ISSN 1347-2739

富山大学留学生センター

紀要

第12号

2013年 9 月

目　次

Ⅰ　論文

〈研究ノート〉

漢字学習のためのグループ練習用教材の開発
—日本語学習者同士で円滑に学習活動を行うための方法を探る—
濱田美和・高畠智美 …… 1

〈実践報告〉

「北方領土」における日本語教育のための教科書　副島健治 …… 9

Ⅱ　年報（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

1．留学生センター 1 年の歩み …… 17
2．日本語教育部門
　日本語研修コース …… 18
　日本語課外補講 …… 27
　総合日本語コース …… 45
　短期留学生 …… 48
　日韓共同理工系学部留学生プログラム …… 51
　教養教育「日本語」「日本事情」 …… 53
　活動報告 1「日本語相談」 …… 57
　活動報告 2「日本語学習支援サイト RAICHO」 …… 59
3．留学生指導部門 …… 61
4．留学生センター関連行事等 …… 66
5．留学生センター教員・担当業務 …… 69
6．資料 …… 71

富山大学留学生センター

富山大学留学生センター

紀　要

第12号

I 論文

漢字学習のためのグループ練習用教材の開発
― 日本語学習者同士で円滑に学習活動を行うための方法を探る ―

濱田美和・高畠智美

Development of Teaching Materials for Kanji Learning: Exploration of a Method for Performing Learning Activities Smoothly between Japanese Language Learners

HAMADA Miwa, TAKABATAKE Tomomi

要　旨

本研究の最終目標は，日本語学習者同士で効果的に練習を行えるような漢字教材を開発することである。受講者の習得状況の開きが大きいため，複式で授業を行っている漢字クラスにおいて，学習者同士で練習を進めていくグループ練習の時間を設けている。本稿では，このグループ練習用のワークシート，カード教材に焦点を当て，実際の活動の中で，学習者が適切に使用できているかどうかを，グループ練習時の学習者同士のやり取りの音声データ等をもとに観察した。そして，教師の援助なしで学習者だけで円滑にグループ練習を進めるためには，より指示文を簡潔に提示すること，練習内容を平易にすること，学習者による例文等の作成は扱わないこと，例文の提示方法や解答の与え方を工夫すること，一度に使用するカードの種類や枚数を制限すること，ゲーム的要素の取り入れに注意を要すること，これらの改善が必要であることが分かった。

【キーワード】　漢字クラス，日本語学習者，グループ練習，教材

1　はじめに

受講者間の漢字の習得状況の開きが大きいため，習得状況別に 2 ～ 4 のグループに分け，グループごとに異なる教科書を選定して，複式授業を行っている漢字クラスにおいて，教師の指導の効率化と自習時間の有効活用を主な目的として，2009 年度前期から日本語学習者同士によるグループ練習の活動を取り入れている。

グループ練習では，学習者がそれぞれ 2 ～ 3 人のグループを作り，使用教科書の各課の要点にかかわる課題に取り組むことになっている。教師の援助なしで学習者だけでグループ練習を行えるように，補助教材としてグループ練習用のワークシート，カードを用意した。ワークシートは練習を進めるための指示と，課題を達成していく中で出てくる漢字や熟語，それらを用いた例文等を書きこむ欄から成る。グループの構成員がそれぞれ異なるワークシートを使用する課もある[1)]。解答の提示方法にはグループ内のほかの学習者から与えられるものと，カードの裏に提示されているものがあるが，これらの形で解答が提示しにくいものについては解答ワークシートを作成し，学習者自身でチェックできるようにしてある。課題の中には学習者自身で例文を考える必要のあるものもあるが，この場合は授業後にワークシートを回収し，教師がチェックしてフィードバックするという形で対応している。

高畠•濱田（2010）で報告したように，グループ学習を行った学習者たちからは，「グループ練習は習った漢字や言葉を話し合って練習しているので，覚えやすくて，応用練習になっています。」，「相互に練習すると，自分で勉強するより速いし，深く理解できます。」，「覚えにくい漢字や言葉をグループ練習を通じて楽しく覚えています。」，「いろいろな練習があるので，楽しい。やる気になる。」，「おもしろい。雰囲気が活発になる。」といった肯定的なコメントが数多く寄せられた。2009 年度以降も継続してグループ練習の活動を漢字クラスの中で取り入れているが，学習者の様子を見ていると，同じ練習活動であっても，活発にやり取りが行われるグループとそうでないグループ，また，グループの構成員が同じであっ

ても，順調に進められる練習活動とそうでない活動がある。これには，グループの構成員，練習活動の内容，教材の形式，その課の学習内容をはじめとして様々なことが影響していると推測される。

そこで，グループ練習の活動を円滑に行うには，教材開発においてどのような点に配慮することが必要なのかを探るため，グループ練習中の学習者の活動の様子を記録して，分析することにした。本稿では，学習者がグループ練習のやり方を理解できているか，時間が足りているか，学習者同士の活動が順調に進んでいるかという3つに焦点を当てて観察し，グループ練習用教材の完成度を高めていくための手かがりを得たい。

2　記録の方法

2012年度前期と後期に開講した中・上級レベルの学習者向けの漢字のクラス[2]で，グループ練習の様子を次の2つの方法で記録した。1つは，グループ練習における学習者同士のやり取り（学習者と教師・授業補助者とのやり取りも含む[3]）をICレコーダーで録音したもの[4]で，もう1つは，授業後に教師および授業補助者[5]（以下，「TA」と称する）がグループ練習中の学習者の様子や学習者から受けた質問などをメモしたものである。

記録の対象としたグループ練習の内容は，教科書『漢字1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』VOL.1, VOL.2（凡人社発行，以下，VOL.1を『IMK1』，VOL.2を『IMK2』と称する）に沿って教師が導入した漢字語の定着を図るために行うものである。1グループは2～3人で，学習者の1人が出題してほかの学習者が答えるものと，学習者同士で相談・協力しながら答えを考えるものがある。

今回は12人の学習者（中国3人，ロシア4人，韓国4人，ブラジル1人）[6]による延べ36のグループ練習を，録音（計10時間8分，1回当たり平均17分）した[7]。

3　分析の手順

分析の手順は次の通りである。まず，グループ練習時の学習者らのやり取りを録音・文字化したデータのうち，グループ練習のやり方，進行状況に関係する学習者の発言に注目して，学習者が練習方法を理解できているか（やり方），時間が足りているか（時間），活動が順調に進んでいるか（進行）について，課ごとに確認していった。さらに，教師・TAによるメモに書かれた情報を加味した後，特に問題が見られなかった場合を「○」，一部の学習者が活動内容を理解できていなかったり，若干のサポートが必要だったり，練習活動が指示と多少違う形で行われていた場合を「△」，学習者の大半が理解できていなかったり，練習活動がなかなか進まなかったりした場合を「×」として分類した。

4　グループ練習における活動の様子

学習者同士で出題・解答する形式のグループ練習における活動の様子を表1に，学習者全員で解答を求める形式のグループ練習における活動の様子を表2にまとめた。

表1　学習者同士で出題・解答する形式のグループ練習における活動の様子

	活動内容	活動の様子	
『IMK1』L1	①漢字1字を用いて，学習者自身で部首・読み・意味用法をもとにクイズを考え出題する。 ②ほかの学習者が漢字を当てる。	グループ1（学習者3人） やり方 学習者同士でやり方を説明，教師もサポートしていた。 時間 クイズ作成に手間取る学習者がいた。 進行 不適切な内容のクイズ作成が見られた。	 × △ ×
『IMK1』L2	①漢字1字を用いて，学習者自身で当該漢字を含む熟語とその例文を作って読む。 ②ほかの学習者がそれを聞いて熟語を書き取る。	グループ1（学習者3人） やり方 理解できていた。 時間 TAの指示もあり，適切に行われていた。 進行 不自然な例文作成が見られた。	 ○ ○ △

	活動内容	活動の様子	
『IMK1』 L4	①平仮名の語を漢字で書いた後，漢字１字が書かれたカードを引き，その漢字を含む語を選んで言う。 ②ほかの学習者は自身がその語を書いていたら，印をつける。	グループ１（学習者３人） やり方 学習者同士でやり方を説明，印のつけ忘れを指摘していた。 時間 順調に進められていた。 進行 順調に「出題→解答」が行われていた。	 △ ○ ○
『IMK1』 L5	①同音異義語の１つを選び，学習者自身で当該語を含む例文を作って読む。 ②ほかの学習者がそれを聞いてどの語かを選ぶ。	グループ１（学習者１人，TA１人[8]） やり方 やり方を説明する発言はなかった。 時間 TA の指示もあり，適切に行われていた。 進行 不自然な例文作成が見られた。	 ○ ○ △
『IMK2』 L1	①カードの語の意味，対語などをもとに，学習者自身でクイズを考えて出題する。 ②ほかの学習者がどの言葉かを当てる。	グループ１，２（各学習者２人） やり方 理解できていた。 時間 順調に進められていた。 進行 一箇所教師がクイズを補足し，出題者を助けていた。不適切な内容のクイズ作成が見られたが，TA が修正していた。	 ○ ○ △
『IMK2』 L3	ほかの学習者が読む例文を聞いて，カードの語の中から例文中に入る語を選ぶ。	グループ１，２，３（各学習者２人），４（学習者３人） やり方 TA の説明もあり，理解できていた。ただ，途中で TA が指摘するまで，出題者と解答者を交代して行うことに気づいていなかった。 時間 順調に進められていた。 進行 順調に「出題→解答」が行われていた。	 △ ○ ○
『IMK2』 L6	①漢語動詞と意味的に対応する和語動詞を使った例文を作って読む。 ②ほかの学習者が和語動詞と置き換え可能な漢語動詞を書く。	グループ１，２，３（各学習者２人），４（学習者３人） やり方 教師が傍らでサポートしないと，理解できなかった。 時間 個人作業にかかる時間にかなり差があり，早く終わった学習者が待たなければならなかった。 進行 不適切な例文作成によって，解答として不適当なものを正答としていることがあった。	 × × ×
『IMK2』 L8	（ワークシートには 12 の名詞を平仮名で，18 の動詞を３語ずつ分けて記載。名詞のみ全員共通。） ①平仮名で書かれた名詞を漢字で書いた後，３つの動詞全てと共起可能な名詞を選び，助詞を添えて書く。各自解答シートで答えを確認した後，３動詞（助詞も添えて）をほかの学習者にカードで示す。 ②ほかの学習者が３動詞と共起する語を 12 の名詞の中から選ぶ。	グループ１（学習者３人） やり方 理解できていた。 時間 個人作業に時間がかかり，グループ練習に十分な時間が取れなかった。 進行 出題者が解答を口頭で示すため，助詞を言い間違えてそのまま修正されない場合があった。	 ○ × ×
『IMK2』 L10	①同音異義語の１つを選び，学習者自身で当該語を含む例文を作って読む。 ②ほかの学習者がそれを聞いてどの語かを書く。	グループ１，２（各学習者２人） やり方 個人作業は理解できていたが，グループでの練習の進め方の理解に手間取っていた。 時間 順調に進められていた。 進行 不適切な例文作成によって，解答として不適当なものを正答としていることがあった。	 △ ○ ×

表２　学習者全員で解答を求める形式のグループ練習における活動の様子

	活動内容	活動の様子	
『IMK1』 L3	①漢字１字が書かれた２枚のカードを組み合わせて熟語を作る。 ②熟語が入る例文カードを探す。	グループ１（学習者２人） やり方 カードの扱いを学習者同士で説明，カードの置き方を TA が助言していた。途中から学習者同士で相談し，カードの出し方を変更していた。 時間 熟語作成にも例文カード探しにもかなり手間取っていた。最後まで終わらなかった。 進行 答えが分からず，なかなか進まないため，学習者同士でぼやく場面が多かった。	 △ × ×

	活動内容	活動の様子	
『IMK1』 復習１	形声文字について，部首と音記号のカードを組み合わせて，漢字を作り，その漢字を使った熟語の読みを答える。	グループ１（学習者２人） やり方 学習者同士でやり方を確認していた。カードの扱い，ワークシートへの記入方法をTAに尋ねていた。 時間 ときどき答えが分からずに時間がかかっていた。最後まで終わらなかった。 進行 答えが分からず，ぼやく場面がときどき見られた。個別に取り組む様子が多く見られ，途中，教師が協力して行うよう助言していた。	× △ △
『IMK1』 L7	①漢字１字が書かれた２枚のカードを組み合わせて熟語を作る。 ②熟語が入る例文カードを探す。	グループ１（学習者２人） やり方 やり方を説明する発言はなかった。TAが時間配分を考え，カードの扱いを変更していた。 時間 TAの指示もあり，適切に行われていた。 進行 学習者同士で相談して答える場面も見られ，順調に行われていた。	△ ○ ○
『IMK2』 L2	①各自のワークシートの文中に入る熟語（漢字１字はグループ共通）を考え，文を読む。 ②ほかの学習者は熟語を書き取る。	グループ１，２（各学習者２人） やり方 学習者同士で説明，TAにも尋ねていた。 時間 最初の個人での作業に時間がかかり，１つのグループでは最後まで終わらなかった。 進行 指示（例文音読）に従わずに進めていた。	× × △
『IMK2』 L4	①漢字１字が書かれた２枚のカードを組み合わせて熟語を作る。 ②熟語が入る例文をワークシートから探す。	グループ１，２，３（各学習者２人），4（学習者３人） やり方 理解できていた。 時間 順調に進められていた。 進行 最初のほうで作成した熟語が誤答であることに気づかず，練習途中で行き詰まっていた。TAが指摘し，進行の軌道修正を行っていた。	○ ○ ×
『IMK2』 L5 （前期）	①熟語と接辞の漢字が書かれた２枚のカードを組み合わせて複合語を作る。 ②複合語が入る例文をワークシートから探す。	グループ１（学習者２人），２（学習者３人） やり方 接辞のカードを複数回使えることに中盤以降でやっと気づいていた。 時間 順調に進められていた。 進行 順調に進められていた。	× ○ ○
『IMK2』 L5 （後期）	①神経衰弱の要領で，カード２枚で熟語を作る。 ②作った熟語と１枚のカードを組み合わせて複合語を作る。 ③複合語が入る例文をワークシートから探す。	グループ１（学習者３人） やり方 理解できていた。 時間 神経衰弱の形だったため，熟語を作るのに時間がかかり，最後まで終わらなかった。 進行 指示（例文音読）に従わずに進めていた。	○ × △
『IMK2』 L7	①平仮名表記の６つの文を漢字仮名交じり文にした後，ほかの学習者と確認する。 ②皆で相談しながら，６つの文を正しい順に並べる。	グループ１（学習者２人） やり方 理解できていた。 時間 順調に進められていた。 進行 順調に進められていた。	○ ○ ○
『IMK2』 L11	①漢字１字が書かれた２枚のカードを組み合わせて熟語を作る。 ②熟語が入る例文をワークシートから探す。	グループ１，２，３，４（各学習者２人） やり方 理解していた。 時間 順調に進められていた。 進行 ②の例文探しでは，微妙な語の使い分けで難易度が高く，学習者がぼやく場面もあった。また，指示（例文音読）に従わずに進めていた。	○ ○ ×
『IMK2』 L14	①各自のワークシートの文中に入る熟語（漢字１字はグループ共通）を考え，文を読む。 ②ほかの学習者は熟語を書き取る。	グループ１（学習者３人） やり方 文中に入れる熟語が全員分からなかった場合の対応を相談していた。TAも助言していた。 時間 最初の個人での作業に時間がかかり，グループでの活動時間は十分に取れなかった。 進行 皆でやり取りしても，各自のワークシートの解答が不明なままのことが多かった。	△ × ×

	活動内容	活動の様子	
『IMK2』L15	①ワークシートの熟語の意味を，学習者自身で考えて言う。 ②ほかの学習者はその語を当てる。 ③皆で相談しながら，その語が入る例文をワークシートから探す。	グループ1，2（各学習者2人） やり方 やり方を説明する発言はなかった。 時間 時間が足りなかった。1つのグループは最後まで終わらなかった。もう1つのグループは教師の指示によって途中を省略した。 進行 1人がリードする形で順調に行われた。	 ○ × ○
『IMK2』L16	①各自のワークシートの表から熟語を探して言う。 ②皆で相談しながら，その語が入る例文をワークシートから探す。	グループ1（学習者3人） やり方 まず教師主導のもとで1問実施し，やり方を確認していた。 時間 順調に進められていた。 進行 指示（例文音読）に従わずに進めていた。	 × ○ △

以下，表1，表2で「×」あるいは「△」の印がついている箇所，すなわち，何らかの問題点が見られた箇所を中心に見ていく。

練習方法の理解

学習者同士で出題・解答する形式のグループ練習（表1）においては，出題のためのクイズ・例文の作り方について，学習者の理解が十分得られていないものがあった。当該漢字と関連するほかの漢字を用いてクイズを作る練習（『IMK1』L1），および，ある語と置き換え可能な語を用いて例文を作る練習（『IMK2』L6）で，学習者同士でやり方を説明したり，教師がサポートしたりしていた。一方，同じクイズ•例文作りでも，語の意味や対語をもとにその語を当てるクイズを学習者自身で作る練習（『IMK2』L1），および，ある語を用いて例文を作る練習（『IMK1』L2，L5）ではスムーズに理解できていた。より複雑で難易度の高い課題では，練習のやり方そのものの理解も難しさを増すことが分かる。

学習者全員で解答を求める形式のグループ練習（表2）においては，解答の求め方について，学習者の理解が不十分なものがあった。グループの構成員がそれぞれ異なる内容のワークシートを持ち，学習者同士でワークシートの情報を総合して解答を求める練習（『IMK2』L2，L14，L16）は，指示文も複雑になってしまい，理解が難しかったようだ。グループの構成員全員が各自のワークシートに入れる語が分からなかった場合に，どう練習を進めていくかといった問題も生じていた。

さらに，学習者同士で出題・解答する形式のグループ練習（表1）と学習者全員で解答を求める形式のグループ練習（表2）の両方にかかわるものとして，カードの扱い方がある。カードの置き方や出し方についてTAがアドバイスしたり学習者同士で相談している練習（『IMK1』L3，復習1，L7），カードの使用回数について学習者がなかなか気づかなかった練習（『IMK2』L5），カードとワークシートを使ってどのように活動を進めていけばよいかをTAに尋ねている練習（『IMK1』復習1）などが見られた。カードの扱い方が問題となった練習はいずれも，複数のカードを用いたり，カードとワークシートを併用しながら練習活動を進めていく形式のものである。また，出題・解答の順番について，ほとんどの練習では学習者同士で交互に出題・解答を行っていたが，中に1つ出題者，解答者を固定したまま，活動を進めている練習（『IMK2』L3）があった。表1の練習の中でこの練習のみ，出題文をワークシートではなく，カードで用意してあったのだが，出題用の例文カードを持つ人と，例文に入れる熟語カードを持つ人というように，間違ってカードを分けてしまったことが，出題者，解答者の固定に結び付いてしまったようだ。これも，カードの扱い方にかかわる問題と言えるだろう。

グループ練習の時間

グループ練習の時間は，グループでの活動に入る前の個人での作業で時間がかかりすぎたものと，グループでの活動に時間がかかったもの，この2つに分けられる。

まず，グループでの活動に入る前の個人での作業で時間がかかりすぎたものとしては，クイズ・例文

作成(『IMK1』L1,『IMK2』L6),文脈等から判断して学習者自身で文中に入る熟語を考える練習(『IMK2』L2，L14)，平仮名の語を漢字にした後に共起可能な名詞を探す練習（『IMK2』L8)，語の意味を考えて説明する練習（『IMK2』L15）の 4 つがある。このうち，クイズ・例文作成においては，長い例文を作ろうとする学習者がいる一方，辞書の例文をそのまま利用する学習者もいたため，作る時間にかなりの個人差が生じ，待たせている学習者がほかの学習者のことを気にしていたり，待っている学習者が時間を持て余している様子も見られた。

次に，グループでの活動に時間がかかったものとしては，カードを組み合わせて漢字や熟語を作る練習（『IMK1』L3，復習 1）と神経衰弱の要領でカードを組み合わせて熟語を作る練習（『IMK2』L5）がある。どちらもカードを使った練習で,学習者全員で解答を求める形式のグループ練習(表 2)である。ワークシート形式であれば，解答できる箇所から先に解いていくことができるが，カードは出た順番に答えていく形になるため，全体を見渡すことが困難なことも時間がかかる原因になったと思われる。

グループ練習の活動の進行

学習者同士で出題•解答する形式のグループ練習（表 1）においては，不適切•不自然な内容のクイズ•例文作成が問題となっている練習（『IMK1』L1, L2, L5,『IMK2』L1, L6, L10）が多かった。中には，別の語を用いるべき例文を作って出題してしまい，そのため出題・解答が円滑に行われていない場合もあった。これ以外には，解答を口頭で伝えることによる助詞の言い間違え（『IMK2』L8）があった。

学習者全員で解答を求める形式のグループ練習（表 2）においては，グループの学習者全員が答えが分からずになかなか進められなかったもの（『IMK1』L3，復習 1,『IMK2』L11，L14）が多かった。学習者らがぼやく様子も度々見られた。また，例文を音読するという指示に従わずに，文の番号を読み上げながら活動を進行しているもの（『IMK2』L2, L4, L5, L11, L16）も多く見られた。このほかには，グループでの活動がかなり進んだ段階でようやく最初のほうで作った熟語の間違いに気づいてやり直すことになった練習（『IMK2』L4）や，熟語の微妙な使い分けに関する知識が必要な，このレベルの学習者にとっては難易度の高すぎる練習（『IMK2』L11）もあった。

5　学習者へのインタビュー

2012 年度後期の授業終了時に，グループ練習に参加した学習者 8 人（ロシア 4 人，韓国 3 人，ブラジル 1 人）に対してインタビューを行った。このうち，グループ練習のやり方，時間，練習内容の改善にかかわるコメントを紹介する。

まず，やり方については,「分かりにくいものはなかった。説明を読んでから，TA に説明してもらったことで，自分の理解が正しいかどうか確認できた。」,「説明を聞いたら分かりにくいということはないが，でも，過程がもっと簡潔な練習だったらよかったと思う。」,「分かりにくかった。説明をちょっと読んだらすぐに練習のポイントが分かる練習がいいと思う。」などの意見があった。教師や TA の説明があればすぐに理解できるものでも，指示文だけ読んで理解するのはハードルが高いことが分かる。

時間については,「難しい練習はすごく時間がかかった。30 分以上かかるのは長すぎる。」,「時々足りなかったけど，30 分以上はつまらなくなってしまう。30 分以内に間に合うぐらいがいい。」などの意見があり，全体的に 20 分～ 30 分ぐらいが適当だと考える学習者が多かった。

練習内容については，カードを組み合わせて漢字や熟語を作る練習に対しての意見が多かった。「時間がかかりすぎて難しいと思った。一度に見る漢字の数が多すぎるし，カードを広げるスペースもないので見にくかった。」,「自分たちで作った言葉が実際に存在する言葉なのかどうかを確認するのに時間がかかった。」,「漢字を組み合わせて言葉を作る練習が役に立ったが,難しかった。」といった意見があった。このほかには,「似ている意味の漢字の使い分けが難しいので，それが練習できればよかった。もっとたくさんの例文を見たい。」という要望もあった。

6　教材改善に向けて

第４節でグループ練習時の学習者らのやり取りの録音・音声データ等をもとに，どのような練習において活動が円滑に進まなかったか，そして，第５節でグループ練習を行った学習者へのインタビューをもとに，学習者がどのような点で困難を感じたかを述べたが，これらの結果から得られた，今後教材を改善するためのポイントを以下にまとめる。

第１に，指示文をより簡潔に示す必要がある。学習者だけでグループ練習を進めていく際に，度々問題となったのが練習のやり方である。教師やTAの簡単な補足説明があればすぐに理解できるような平易な日本語で書かれた指示文であっても，同様の練習を行った経験がない場合は，ワークシートに書かれた指示文を読むだけでやり方を把握するのは困難なことが多い。指示文をより分かりやすくするには，練習内容を簡潔にすること，また，複数のステップを踏む練習活動では，それぞれのステップごとに指示を出すような工夫が考えられる。

第２に，グループ練習の内容をより平易にする必要がある。一部の練習では，学習者だけで活動を進めていくには難易度が高すぎて，解答になかなかたどり着けずに，やる気を失っていく様子も見られた。学習者だけで進めていきやすいように，これまで１つの練習活動として取り上げていた内容を分けて提示したり，問い方を変えて練習の難易度を調整したり，より分かりやすい例文に修正するなどの工夫が考えられる。

第３に，教師の援助なしのグループ練習においては，学習者によるクイズ•例文作成は扱わないよう，見直す必要がある。これまでは，学習者の作成した例文が日本語として不自然な場合は，授業後にワークシートを回収し，教師がチェックして学習者にフィードバックする形で対応できると考えていた。しかし，今回の分析を通じて，例文の不適切さが練習活動に大きく影響する場合もあることが分かった。学習者自身でクイズや例文を作るという練習は，教師やTAの援助が可能なときのみ行う形に改めたい。

第４に，例文の提示方法について工夫する必要がある。学習者が例文を音読するという指示に従わずに文の番号を読みながら活動を進めていたものは，例文に番号が振ってあり，また，グループの構成員全員が同様に例文を見られることから音読の必然性がないものであった。例文に番号を振らないようにすることのほかに，長い例文では全文を読まなくても済むようにポイントとなる箇所を強調して提示する，また，グループの構成員にそれぞれ異なる例文を持たせて音読が必須となる状況を作るといった方法で，学習者が声に出して読む機会を増やしたい。

第５に，解答の与え方について工夫する必要がある。答えがなかなか分からない場合，学習者だけではうまく練習を進めていけなくなってしまうことがある。答えやすい問題から先に表示したり，学習者の習得状況に応じて問題数を調節したりといった工夫が考えられる。また，学習者自身でどこで間違えたのかを把握しやすいような仕組みを新たに考えていかなければならない。

第６に，一度に使用するカードの種類や枚数を制限する必要がある。学習者がその場で１つ１つ答えを確認しやすくなるように，また，カードゲーム的要素も盛り込めるように，複数の種類のカードを使って活動を進めていくような練習を多く設けた。しかし，カードの多さが活動のしづらさに結び付く可能性があること，特に，漢字を不得手とする学習者にとってはカードの多さが心理的な負担になっていることもうかがわれた。カードの使用についても，より単純化したほうがよい。

最後に，ゲーム的要素の取り入れには注意を要する。ゲーム的要素を盛り込んだほうが楽しく練習を進められるのではないかと考えたが，実際には，グループ内で勝敗を楽しむ様子はほとんど見られなかった。授業前の自宅学習として課している予習ワークシート，授業中の教師による導入・説明・練習を通して何度も目にした語であっても，数が多いために十分に覚えられていないこともあり，ゲーム的要素を楽しむ余裕がまだないのだろう。ゲーム的要素を取り入れることよりも，漢字や語彙を確認する回数を増やし，より多くの例文に触れる機会を与えるものとしてグループ練習を捉え，教材開発を進めたほうがよいようである。

教師の援助なしで学習者だけでグループ練習の活動を行わなければならない場合，まず，練習内容の検討において，教師の援助がなくても円滑に活動できる内容とそうでない内容とを見極めることが大切

である。その上で，通常教師がグループの活動中に傍らでモニタリングし，働きかけることで支援していることを補うような工夫が教材に求められる。本稿における分析結果をもとに，現在，教材の改訂を進めている。今後は，教材改訂による効果の有無を検証して，より良いグループ練習用教材の開発につなげていきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり，快く調査に協力してくださったグループ練習参加者の皆さんに深く感謝いたします。また，データの収集・整理に協力してくださった白崎友貴さん，永田泰代さんに心より御礼申し上げます。

なお，本研究は，科学研究費補助金基盤研究（C）「漢字教育におけるグループ学習－学習効果の検証と教材の開発－」平成 24-26 年度（課題番号 24520574）による成果の一部です。

注

1）ジョンソン，ジョンソン＆ホルベック（2010）で「ジクソー法」として紹介されている。ジクソーパズルのように教材を部分部分に分け，グループの各メンバーに課題の達成に必要な教材の一部だけを与えて，最終的にそれらが統合させるようにする方法で，これによりグループとしての達成のために，ひとりひとりのメンバーの積極的な参加を促すことができる。

2）日本の大学で学ぶ外国人留学生を対象とした授業で，交流協定校からの短期留学生，日本語・日本文化研修留学生，大学院生，研究生等が受講している。各期 15 週，週 1 回 90 分の授業が行われる。漢字の授業は，中級クラスと上級クラスの共通科目として開講されているため，受講者の漢字の習熟度の開きが大きい。2012 年度前期は，教科書として『ストーリーで覚える漢字 300』（くろしお出版）を用いるグループ，『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』VOL.2（凡人社）を初めて用いるグループ，同教科書を途中から用いるグループの 3 つのグループ，後期は，『基礎漢字 500 BASIC KANJI BOOK』VOL.2（凡人社）を用いるグループ，『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』VOL.1（凡人社）を用いるグループ，『漢字 1000plus INTERMEDIATE KANJI BOOK』VOL.2（凡人社）を初めて用いるグループ，同教科書を途中から用いるグループの 4 グループに分けて，複式で授業を行った。

3）グループ練習は学習者のみで進めていく活動であるため，学習者同士のやり取りが中心となるが，練習が円滑に進んでいないときには，教師や TA がアドバイスすることもあり，音声データの中に一部，教師や TA の発言が含まれている。

4）グループ練習の録音は，事前に学習者に承諾を得た上で行った。録音と同時に録画も行ったが，今回の分析では，音声データのみを用いた。音声データを文字化する際に，学習者の名前は別名で入力するなど個人が特定できないように配慮した。

5）日本語教育能力検定試験に合格した日本語母語話者で，データの記録のほか，グループ練習で学習者から質問があった場合などへの対応を依頼した。

6）前期は 5 人の学習者（中国 3 人，ロシア 1 人，ブラジル 1 人）が『IMK2』のグループ練習を行った。後期は 3 人の学習者（ロシア 1 人，韓国 2 人）が『IMK1』のグループ練習，6 人の学習者（ロシア 3 人，韓国 2 人，ブラジル 1 人）が『IMK2』のグループ練習を行った。2 人の学習者（ロシア人 1 人，ブラジル人 1 人）は前期，後期の両方に参加した。

7）実際に授業ではもっと多くのグループ練習を行ったが，録音が途中で切れてしまった回や録音状態が良くなかった回があり，それらは分析の対象から外した。

8）この回は，『IMK1』グループの学習者が 1 人しか出席していなかったため，TA（日本語母語話者）とグループ練習を行った。

参考文献

(1) ジョンソン,D.W.，ジョンソン,R.T.& ホルベック, E.J.（2010）『改訂新版 学習の輪－学び合いの協同教育入門－』石田裕久・梅原巳代子（訳），二瓶社

(2) 高畠智美・濱田美和（2010）「複数レベルの学習者を対象とした漢字クラスの授業改善及び教材開発－学習者の学びの活性化のための試み－」『富山大学留学生センター紀要』第 9 号，pp.9-18

「北方領土」における日本語教育のための教科書

副島健治

A Textbook for Japanese Language Education in the "Northern Territories"

SOEJIMA Kenji

要　旨

独立行政法人北方領土問題対策協会は，1998 年より「北方領土」に日本語講師を派遣し日本語コースを開いてきた。これまでのべ 3000 人以上の現地のロシア人住民が日本語を学んだ。2011 年からこの事業のための教科書開発の検討会が設けられ教科書の開発に取り組んでいる。

「北方領土」という特殊な地で実施される日本語教育のための日本語教材であり，教材開発は諸所において色々な配慮のもとに具現化されていった。その特徴は，「ビザなし交流」の場面を意識したダイアローグを「小会話」として積み重ねる，キリル文字による日本語表記，日本語には適宜ロシア語訳を付ける，必要な説明や解説はすべてロシア語で行う，などである。

この日本語コースは「ビザなし交流」の一環として，北方領土問題の解決に寄与するために行われている事業であり、何よりも教師と学習者がお互いの立場を理解し敬愛し合い，人と人とのしっかりした信頼関係が構築されていることが重要である。

【キーワード】　独立行政法人北方領土問題対策協会，ビザなし交流，日本語教材開発，
北方四島交流事業日本語講師派遣事業，北方四島における日本語教育教材検討会

1　はじめに

2010 年 11 月 1 日，メドベージェフ・ロシア大統領（当時）が国後島を訪問し，「北方領土」の実効支配を直接誇示し日本の返還要求を強く牽制したのは記憶に新しい。しかし，2013 年 9 月 5 日にサンクトペテルブルクで行われた日本の安倍晋三首相とロシアのプーチン大統領の会談では，北方領土問題を進展させるための協議を進めて行くことで一致したと報道されており，明るい兆しもある。

北方領土問題の解決は困難な様相を呈しているものの，地道な取り組みは紆余曲折を経ながらも行われている。

1998 年より独立行政法人北方領土問題対策協会（以後「北対協（ほくたいきょう）」とする。）によって，日露政府間で特例として認められた北方四島交流，いわゆる「ビザなし交流」（後述）の枠組みにおいて，「北方四島交流事業日本語講師派遣事業」（以後，「事業」とする。）を実施している。この事業は，日本人日本語講師を北方領土の島々に派遣し，日本語コースを開講するものである。(1) この日本語コースを受講するのは「北方領土」の地に居住するロシア人住民である。

日本語教育を「学習者の日本語習得の支援」ということができるが，その一方，事業としての日本語コースは，「ビザなし交流」の一環として実施されており，目的は「北方領土問題の解決に寄与する」ことである。つまり，この事業において実施される日本語教育は，学習者の日本語習得支援という日本語教育本来の目的と同時に，北方領土問題解決に向けてのアプローチでもある。（副島 2008）。

本稿は，「北方領土」で行われる日本語教育のための教材（教科書）開発の研究と実践に関わる論考である。被占領地（「北方領土」という地域）において，占領された側がその地域に居住する占領した側の国（ロシア）の住民を対象に被占領国の言語（日本語）を教育するという極めて特殊で稀なケースにおける教材（日本語教育教材）の開発に関するものである。本研究の特徴はここにあると言える。

2　いわゆる「北方領土」について

本稿は，いわゆる「北方領土問題」について，政治的な議論は旨としない。しかし，本研究の背景に重要であるので，まずは，いわゆる「北方領土」について簡単に整理しておきたい。

「北方領土」とは，現在ロシア連邦が実効支配している，北海道根室半島沖に点在する小島嶼からなる歯舞群島，色丹島，国後島，択捉島を指す。[2] この地域は，日本の行政区分においては，北海道に属すが，実効支配しているロシアの行政区分においてはサハリン州に属している。[3] 日本はこの地域の返還を求めており，「北方領土」は一度も外国の領土になったことがない日本国固有の領土であり，旧ソ連・ロシアによって不法占拠されている，というのが，日本政府の一貫した立場である。

「北方領土」の元住民（日本人）は高齢化してきており，一日でも早い帰郷を望んでいる。他方，長期間に及ぶロシア（旧ソ連）の実効支配が続く中で，この地域に生活基盤を持って暮らすロシア人住民，さらにこの地で生まれ育った住民も少なからずおり，この地を故郷と考える意識が芽生えているのも事実である。

3　本研究の背景と経緯

3.1　本研究の背景

北対協による日本語講師の派遣と日本語コース開講は1998年から実施されており，2012年度実施分までにおいて，のべ3138人が日本語を学んできた。（表１）

表１『日本語講師派遣事業』で学ぶロシア人受講者の数（1998年～2012年）

		1998※	1999	2000	2001	2002	2003※	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
色丹島	子供	76	100	51	53	49	－	33	43	52	46	53	31	25	29	41
	大人	53	57	38	27	25	－	17	18	23	19	33	17	27	16	29
	合計	**129**	**157**	**89**	**80**	**74**	**－**	**50**	**61**	**75**	**65**	**86**	**48**	**52**	**45**	**70**
国後島	子供	34	57	46	57	65	52	31	70	53	54	28	29	41	43	34
	大人	37	38	27	34	33	40	38	43	43	40	33	38	51	40	45
	合計	**71**	**95**	**73**	**91**	**98**	**92**	**69**	**113**	**96**	**94**	**61**	**67**	**92**	**83**	**79**
択捉島	子供	－	34	77	8	8	41	17	49	20	42	28	17	39	39	23
	大人	－	101	12	19	27	17	12	24	24	18	12	28	18	20	23
	合計	**－**	**135**	**89**	**27**	**35**	**58**	**29**	**73**	**44**	**60**	**40**	**45**	**57**	**59**	**46**
全体の合計		**200**	**387**	**251**	**198**	**207**	**150**	**148**	**247**	**215**	**219**	**187**	**160**	**187**	**187**	**195**

※ 1998年の択捉島，2003年の色丹島への日本語講師派遣はなかった。

日本語コース開始以来，北対協としての大まかな方針は提示されるものの，現地での具体的な教育内容，方法，進度等については，派遣される日本語講師に判断に委ねられていた。筆者自身も2007年に講師として派遣され教鞭を取ったが，当時の教材は市販の『みんなの日本語Ⅰ』『みんなの日本語Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用していた。派遣された日本語講師の懸命の努力と工夫はあったものの，約一ヵ月間という短期間で限られた授業回数（10～20回程度）では，教科書の最初の数課を導入するにとどまり，実際の「ビザなし交流」の場面でのコミュニケーションができる程度の日本語運用力を身につけるには困難な状況であった。

2011年1月，北対協に「北方四島における日本語教育教材検討会」（以後，「検討会」とする。）が設置され[4]，「北方領土」における日本語教材のあり方の検討とその作成が具体的に進んでいる。

本研究は，「ビザなし交流」の枠組みで実施されている，「北方領土」で行われる極めて特殊な状況における日本語教育にとって最もふさわしい教材を求めて取り組まれたものである。

3.2　本研究の経緯

副島（2008）は,「北方領土」における日本語教育の状況を，1998 年から始まった「北方四島交流事業日本語講師派遣事業」は一定の成果を上げているものの，教材に関しては整備されているわけではないことを報告している。

2008 年，筆者らは,「北方領土」における日本語教育に特化した教材作成の必要性から，過去のデータを調査し，国後島の受講者を対象にパイロット的な教材サンプルの試行と教材開発のためのアンケート調査を実施し，これらの結果から，教科書作成の方向づけを行った。[5]

副島ほか（2010）は,「北方領土」における日本語教育のための日本語教科書の，(1) 相応しい教科書のイメージ，(2) 留意すべきファクター，(3) 教科書のフレームとコンテンツ，(4) 教科書の作成方針等を整理し教材作成の基盤を構築した。[6]

2011 年 1 月,「北方領土」における日本語教育のための教材開発が，北対協のプロジェクトとして位置づけられ,筆者らを構成員とする「北方四島における日本語教育教材検討会」(以後,「検討会」とする。) が設置された。同年 6 月,教科書の試用版が完成し,同年度の事業に一部使用された。その後も検討会で，開発された教材の使用結果に基づいて修正をほどこしバージョンアップし，同時に，教科書のコンテンツそのものを増やした。[7] 副島ほか（2011),同（2012）は,その研究の段階に応じて論じたものである。[8]

本研究は，2009 年から 2011 年において，科研費（21520533）の助成を受けた。

4　「北方領土」における日本語教育のための教科書の基本的な考え方と留意点

「北方四島交流事業日本語講師派遣事業」(北対協）のは基本的な考え方次の 4 つである。

（1）四島在住のロシア人に日本語の基礎的な能力（文法及び実際の場に即した会話能力及び四島交流における対話を基本とした能力）を習得させる。各島の派遣講師は 2 名であり，講師はそれぞれ 2 クラスを単独で受け持ち，原則として直接法で授業を行う。

（2）日本語や日本文化に慣れ親しむことにより相互理解と友好親善の促進を図る。

（3）四島の研修と北海道内研修とが連携を図り効果的な研修を行うことにより，ビザなし交流をサポートできる程度の人材を育てる。

（4）日本語講師派遣の期間が限られていることから，四島において通年に日本語学習が行えるようにそのニーズに合った教材の提供等を行う。

これを踏まえた教科書作成の方針を下に整理する。「北方領土」における日本語教育のための教科書は次のようなものでなければならない。

a 教科書全体にわたって，友好的であること。

そのために，コンテンツをはじめとする教科書の全体にわたって友好的なムードを大切にする 。具体的には,「嫌い」などのネガティブな表現をなるべく避け，必要であれば最初から敬語表現を導入したり，お礼を述べるなどのお互いにリスペクティブな礼儀正しい関係の雰囲気を作る。また，教室内の友好的な関係を維持するために細心の注意を払う。 などである。

b コンテンツとしてのダイアローグ

「ビザなし交流」でのコミュニケーションの実践的な場面を想定したものでなければならない。ロシア人島民の家庭を日本人訪問団が訪れるホームビジットや島内を案内する場面などが考えられる。

c 文法導入について

日本語の基礎的な運用のために,最小限の動詞の活用形など文法事項の導入は必要である。日本語コースの授業回数は限られているので,日本語の特徴と文構造（(1) 名詞文 (2) 形容詞文 (3) 動詞文 (4) 助詞）の大枠の理解を重視する。

d「文化」について

教科書のダイアローグを通して，人と人との関わりなどに気づかせ，また教科書の中に「コラム欄」をちりばめ，伝統芸能，日本事情などの文化的なことがらを紹介していく。

e 学習者の負担軽減の観点から

日本語コースの受講者は，予備教育などのように日本語学習に専念しているわけではなく，受講者の多様な学習環境に配慮する必要がある。仕事や家庭の事情などで，自宅での学習時間もあまり確保できず，欠席がちな受講者も少なくない。その意味において，学習者の学習負担軽減の配慮は重要である。

まず，日本語の文字の導入は多くの時間を費やすことになるので，日本語の文字が未習の者でも授業に参加できるような教科書でなければならない。具体的には，キリル文字による日本語表記を採用する。また，教室内の学習者の学習段階は大まかにしか揃っておらず，そのことから学習者の理解の度合いに差が生じることのないように配慮する。具体的には，ダイアローグのロシア語訳（必要に応じて適宜，直訳的なものと意訳的なロシア語訳）を付け，文法的な説明もロシア語で掲載する。その他必要なことはロシア語で示す。

学習の進め方としては，決して教師から暗記することは求めないものとし，教科書を会話のリソースとして利用すればよいものとする。

f「北方領土」で行われる日本語教育であるが故のデリケートな面への留意

先述したように，日本語教育が「北方領土」という国家主権の問題をはらむ地域でなされるという点に留意する必要がある。

例えば，教師が「日本から来ました。」と自己紹介を行えば，そこに政治的な意味が生じかねない。他の例として，「○○に住んでいます。」というような文型練習で，島内の地名を入れるとき，「北方領土」の地名のデリケートさにも気づくべきである。（後述する。）

これらを配慮を具現化した形で，教科書を作成した。

次に，その特徴と使い方を示す。

5 「北方領土」における日本語教育のための開発教材の特徴と使い方

本教材では，日本語の文字の導入を組み込んでいない。前述のように，仮名のほかにキリル文字での表記を示したのはそのためである。限られた授業時間の中で余裕がないということでそうしており，必要に応じて現場で工夫して文字も教えることは可能である。

2013年4月までに作成されたものとして，「ビザなし交流」で日本から訪問団が来島して，受講者らをはじめとするロシア人居住者の自宅を訪問し，友好的な雰囲気の中で会話を日本語でするという設定になっている。[(9)]

各ユニットの配置の大きな流れとして，順に訪問団がロシア人島民の家を訪問し，楽しい交流の時間を過ごし，立ち去るまでを時間軸で立てている。それぞれの場面ごとを1つのユニットとしてコンパクトに独立させたものを積み重ねるようにしている。各ユニットはいくつかの「小会話」と，それらを1つの連続にまとめた「中会話」からなる。ひと夏の日本語コースを受講し終えたら，一連の「中会話」をさらにつなぎ合わせて，大きなひとまとまりの連続会話ができることを願って構成した。

各ユニットの構成と具体的ねらいと意図を，頁をめくる順番に示す。

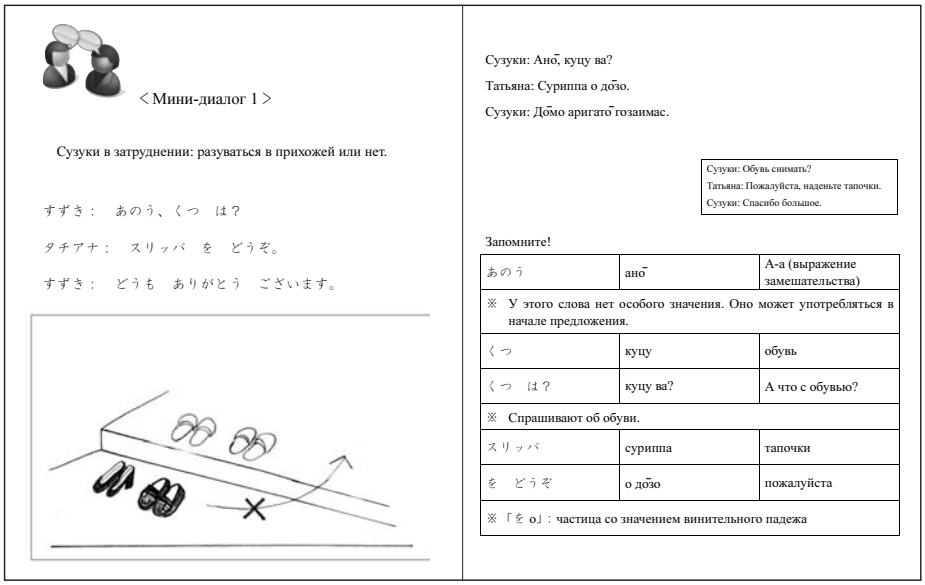
(1) 各ユニットの扉（表紙）

場所，あるいは場所と行為を掲げ，そこでどのようなことをするか，言い換えれば，そのユニットを学習することで，何ができるようになるかを示している。

例：「居間　職業や家族構成を述べる」

(2) 左右見開きページの「小会話」のダイアローグ（図1）

見開きページとし，左ページに，提示したダイアローグが何のやり取りをしているかが分かるシチュエーションをロシア語で簡潔に示した後，日本人とロシア人島民の短い会話（2行～4行）を仮名表記で提示している。また，理解の助けとして具体的なイメージが持ちやすいように挿絵をつけた。



＜Мини-диалог 1＞

Сузуки в затруднении: разуваться в прихожей или нет.

すずき：　あのう、くつ　は？

タチアナ：　スリッパ　を　どうぞ。

すずき：　どうも　ありがとう　ございます。

Сузуки: Анō, куцу ва?

Татьяна: Суриппа о дōзо.

Сузуки: Дōмо аригатō гозаимас.

Сузуки: Обувь снимать?
Татьяна: Пожалуйста, наденьте тапочки.
Сузуки: Спасибо большое.

Запомните!

あのう	анō	А-а (выражение замешательства)
※　У этого слова нет особого значения. Оно может употребляться в начале предложения.		
くつ	куцу	обувь
くつ　は？	куцу ва?	А что с обувью?
※　Спрашивают об обуви.		
スリッパ	суриппа	тапочки
を　どうぞ	о дōзо	пожалуйста
※「を о」：частица со значением винительного падежа		

図１　「小会話」（見開きページ）

右ページには，同会話をキリル文字で提示し，ロシア語訳（会話の意図重視の意訳）を付けた。続けて，この短いダイアローグにあらわれた単語や表現などを訳付きリストで示し，必要に応じてロシア語で※印の注釈や「ここに注意！」のような見出しでの説明も付けた。

学習者に小会話を理解させることにより，学習者が自身のことに置き変えてそのやり取りができるようになることを目指す。ことばの使い方などもあるが，重要なことは，シチュエーションと発話意図を学習者がよく理解することである。

上述の「ここに注意！」が，しはしばことばの使い方や文法的等の説明となる場合もある。その場合は，内容により，「ここに注意！」の中でその文法事項の練習を扱う場合と，次の「話しましょう」の中で扱う場合がある。

(3)「話しましょう」

「話しましょう」は基本的に，場面を想定した模擬会話の練習である。ダイアローグの発話意図を理解したら，次に，シチュエーションを変え実際の場面をイメージさせながら，応用としてそのダイアローグの形を利用して話させることをねらいとする。まずは，ダイアローグに準じて，必要な語句を使って自分ことばで言う練習をさせる。ここで重要なことは，単なる口頭練習ではなく，実際の場面をイメージしながらの模擬会話であることが望ましい。必要な語句はテキスト内に適宜示してはいるが，不足する場合は『ビザなし交流会話集』（北対協）などを使って補うようにする。

例えば，ユニット２の「スリッパを勧める」のダイアローグでは，「スリッパをどうぞ」の表現を学習するが，それを応用して，勧めるものを変えて模擬会話をさせてみる。（図２）

「話しましょう」では，場面を設定しての簡単なロールプレイを試みてもよいだろう。

A：＿＿＿＿＿＿＿＿　を　どうぞ。
B：どうも　ありがとう　ございます。

A：＿＿＿＿＿＿＿＿　о до　зо.
B：До　мо аригато　гозаимас.

おかし	окаш　и	сладости
おちゃ	оча	чай
ジャム	дж　аму	варенье
はちみつ	хачимицу	мёд
いす	Ису	стул

図２　ユニット２の模擬会話練習の例

(4)「小会話」は,「小会話１」に続き「小会話２」,「小会話３」と提示されていくが,それら「小会話１」ダイアローグの続きの言動であったり,「小会話１」の変化したバリエーションとしたりしたものである。

(5) 適宜，日本語という言語に関するトピックや日本の文化に関するトピックを取り上げ,「コラム」として読み物のような形で提示した。

(6)「中会話」と「やってみよう！」

各ユニットの小会話を連続すれば,「ビザなし交流」の想定場所での一連の行為にともなう自然な会話になる。１つ１つの「小会話」はたいへん短いものであるが,「中会話」が一つのまとめとなっている。

(7) その他

北方領土問題と直接かかわりのあるデリケートな問題も,「北方領土」における日本語教育の根底に横たわっている。先述したが，例えば下のような地名の取り扱いをどうするかである。（表２） このようなことについては現場の各教師の考え方によって対応は異なるのかもしれず，答えは１つではないであろう。しかし，そもそもこの日本語コースは「ビザなし交流」の一環として，北方領土問題の解決に寄与するため，日本とロシアの友好と相互理解のために行っている事業である。もしも教室内で日本人の日本語講師とロシア人の受講者がそのようなことでぎくしゃくしたりするようなことがあれば，事業の趣旨にも反することになる。

表２　日本語とロシア語で異なる「北方領土」の地名の例

和名	ロシア語名
古釜布　（フルカマップ）	Южно-Курильск　（ユジノ－クリリスク）
穴澗　（アナマ）	Крабозаводск　（クラバザヴォーツク）
内岡　（ナヨカ）	Китовый　（キトーヴイ）
紗那　（シャナ）	Курильск　（クリーリスク）

6　結語

2011年１月に北対協に「北方四島における日本語教育教材検討会」を設けられ，本教材の開発が進められてきた。そしてこれからは，毎年その年に派遣された日本語講師が検討会の構成員となって，この教材の弱点や使いづらさを指摘し，改善を重ねて行くことが必要であろうと言える。

「北方領土」で実施する日本語教育は、極めて特殊な状況の中で実施され困難さもあるが、同時に将来の日露関係の友好の発展に寄与するというやりがいのある現場でもある。そのようなデリケートな要素をはらんだ現場ではあるが、このような特殊な教育現場であるからこそ，慎重で熟慮した言動を取り、日本人教師とロシア人学習者がお互いの立場を理解し敬愛し合い，人と人としてのしっかりした相互の信頼関係が構築されていることが最も肝要であると言える。

注

(1) 北方領土問題対策協会によって実施される「北方四島交流事業日本語講師派遣事業」を指す。

(2) 1951年９月のサンフランシスコ平和条約によって日本に対する連合国の占領は終り，日本は主権を回復した。

「日本は，サンフランシスコ平和条約により，ポーツマス条約で獲得した樺太の一部と千島列島に対するすべての権利，権原及び請求権を放棄しました。しかし,そもそも北方四島は千島列島の中に含まれません。ソ連は,サンフランシスコ平和条約には署名しておらず，同条約上の権利を主張することはできません。」（外務省HPより）

（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/hoppo/hoppo_keii.html）

(3) サハリン州は,ソ連が日ソ中立条約を破棄して日本に攻撃を開始した1945年８月９日に設置されたものである。

(4) 設置の趣旨として,次のように述べられている。「当協会では,平成10年度より北方四島交流専門家（日本語講師）

派遣事業を実施しており，各島で日本語教室を開講しているが，過去の派遣講師からは，現行のテキスト「みんなの日本語」等の市販の教材は，現地の教育現場に対応していないとの意見が多い。そこで，事業の更なる充実のため，「北方四島における日本語教育教材検討会（仮称）」を設置し，外部の専門家の協力を得ながら，当協会独自の教材を作成することとする。」

検討会の構成員は，(1) 過年度派遣講師，(2) (1) 以外で日本語教育資格を有し，日本語教育に精通している者，(3) ロシア語通訳－特にロシア人の生活環境に熟知している者，(4) 教材にロシア語を使用する可能性があり，四島の学習者の立場を配慮する必要性があることから加える者，の 5 名程度とされる（任期は 1 年，再任あり）。

(5) その研究成果は，2009 年 7 月に開かれた JSAA-ICJLE2009 国際研究大会（於 : ニューサウスウェールズ大学（オーストラリア・シドニー））において発表（副島ほか）した。

(6) その研究成果は，2010 年世界日本語教育大会（於 : 台湾政治大学（台湾，台北））において発表（副島ほか）した。

(7) これからは，その年度の事業の派遣講師が検討会の構成員となって，この教材の弱点や使いづらさを指摘し，改善を重ねて行くことが重要であると言える。

(8) それらの研究成果は，2011 世界日本語教育研究大会（於 : 天津外国語大学，中国）(ICJLE 2011 CHINA) International Conference on Japanese Language Education，ロシア・東欧 JSSEES（Japanese Society for Slavic and East European Studies）2012 年合同研究大会（於 : 同志社大学）でも発表（副島ほか）した。

(9) 場面設定を増やして内容を拡充していくことは今後の課題である。「ダーチャに招待する」(作成が進んでいる) や島内を案内するなど。ダーチャというのは，ロシアでは一般的ないわば農園付きのセカンドハウスである。

[参考文献]

(1) 梶浦篤，「日ソ復交交渉に対する米国の戦略（Ⅰ）」，『政治経済史学』546 号，政治経済史学会，2012 年 4 月，pp1-21.

(2) ———，「日ソ復交交渉に対する米国の戦略（Ⅱ）」，『政治経済史学』546 号，政治経済史学会，2012 年 5 月，pp30-51.

(3) ———，「日ソ復交交渉に対する米国の戦略（Ⅲ）」，『政治経済史学』546 号，政治経済史学会，2012 年 6 月，pp29-53.

(4) ———，「日ソ復交交渉に対する米国の戦略（Ⅳ）」，『政治経済史学』546 号，政治経済史学会，2012 年 7 月，pp1-25.

(5) 副島健治 (2008)，「「北方領土」における「ビザなし交流」としての日本語教育」，『富山大学留学生センター紀要』第 7 号，pp.15-30.

(6) 副島健治，奥村隆信，青木由香，岡田有美子，粕谷謙治，須加春恵，林宏美，増山満美子，宮田妙子（2010），「「北方領土」における日本語教育のための教材開発」，『2010 世界日語教育大會【論文集 •• 予稿集】』(CD)（国立政治大学・外国語文学院），大新書局，台湾 .（CD 収録）№ 518.

(7) 副島健治，鈴木寛子，北岡千夏（2011），「「北方四島」における日本語教育 ― その教材開発の試み ―」，2011 世界日本語教育研究大会（天津外国語大学）(ICJLE 2011 CHINA) 予稿集『跨文化交際中的日語教育研究②異文化コミュニケーションのための日本語教育』，中国高等教育出版社 , pp306-307.

(8) 副島健治，鈴木寛子，北岡千夏（2012），「「北方領土」における日本語教育 ― その教材開発の試み ―」，『比較文化研究』No.102，比較文化研究会，pp87-99.

(9) 副島健治（2012），「「北方領土」で実施されている日本語教育とその教材開発」，富山大学『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究（Creation of East Asian “Kyousei” studies)』(CEAKS) Discussion Paper，富山大学極東地域研究センター , pp.1-9.

(10) タチヤーナ・プルッサコーヴァ著 , 松井憲明•天野直樹訳（2011），「日露間のビザなし交流の歴史から」，『北海道・東北史研究』2011 [通巻第 7 号], pp.41-56.

[参考資料]

(1)『われらの北方領土』（資料編）2009 年版（平成 21 年度版），外務省，2010 年 3 月.

(2)『みんなで考えよう知ろう北方領土～北方領土を正しく理解するために～』㈶日本経済教育センター，同上パソコンソフト・経済教育資料，CD-ROM，平成 16 年 3 月.

(3)『四島交流ロシア語日本語会話集』独立行政法人北方領土問題対策協会，編集 : ルテニア，平成 19 年.

(4) 同上，付属教材 “ビザなし交流会話集” Audio CD，独立行政法人北方領土問題対策協会.

(5) その他（独立行政法人北方領土問題対策協会発行広報資料・パンフレット等）.

(6)『四島交流ロシア語日本語会話集（ビザなし交流会話集）』独立行政法人北方領土問題対策協会（2007）独立行

政法人北方領土問題対策協会.
(7)『北方領土四島交流ロシア語会話集』北方四島交流北海道推進委員会（1998）北方四島交流北海道推進委員会.
(8) 副島健治，岡田有美子（2009）「「北方領土」における日本語教育の現状と教材開発」，JSAA-ICJLE2009 国際研究大会（2009.7.13-7.16, 於 : オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学）口頭発表資料.
(9) 副島健治，奥村隆信，青木由香，岡田有美子，粕谷謙治，須加春恵，林宏美，増山満美子，宮田妙子（2010）「「北方領土」における日本語教育のための教材開発」，2010 年世界日本語教育大会（2010.7.31-8.1, 於 : 台湾政治大学）口頭発表資料.
(10) 副島健治，鈴木寛子，北岡千夏（2011）「「北方領土」における日本語教育 ―その教材開発の試み―」，2011 年世界日本語教育大会（2011.8.19-8.21, 於 : 天津外国語大学）口頭発表資料.
(11) 副島健治，鈴木寛子，北岡千夏（2012）「「北方領土」における日本語教育 ― その教材開発と実践 ―」，ロシア・東欧 JSSEES（Japanese Society for Slavic and East European Studies）2012 年合同研究大会（2012.10.6, 於 : 同志社大学）口頭発表資料.

Ⅱ 年報

（2012年４月～2013年３月）

1．留学生センター１年の歩み

富山大学留学生センターは，学内共同教育研究施設として，1999 年 4 月に文部省（現在の文部科学省）省令により設置された。

富山大学は 2004 年に国立大学法人となり，2005 年 10 月には富山大学（五福地区），富山医科薬科大学（杉谷地区），高岡短期大学（高岡地区）の県内 3 大学が再編•統合されて国立大学法人富山大学となった。統合後は，3 地区から「富山大学留学生センター運営委員会」の委員が選出され，留学生センターの管理運営に関する重要事項について審議している。2012 年度は，橋爪和夫センター長を委員長として，7 回の運営委員会が開催され，また 2 件の留学生センター専任教員人事にかかる「留学生センター教員選考委員会」が設置され，公募・選考及び審査がなされた。

日本語教育部門では，日本語研修コース，日本語課外補講，総合日本語コースの 3 コースを開講した。日韓共同理工系学部留学生プログラムについては，日韓生の配置がなかったため，開講しなかった。各コースでは，これまでと同様に，専任教員がコーディネーターを務め，毎日の授業内容と学生の出欠状況を記録・閲覧できる「授業記録システム」を活用して，学習の進捗状況等を把握し日々の授業に取り組むことができた。日本語課外補講と総合日本語コースの授業シラバスは，英語版と中国語版での提供も行った。その他，日本語学習を支援するためのサイト「富山大学留学生センター日本語学習支援サイト RAICHO」の運営，留学生からの日本語に関する様々な相談に応じる「日本語相談」の実施も引き続き行い，本学で学ぶ留学生の日本語学習を多方面から支援した。

留学生指導部門では，留学生が留学生活で困難を感じる事がないように，異文化教育をはじめ各種オリエンテーションを実施した。また，異文化教育の一環として，異文化交流パーティー，ホームビジット，ホームステイ等の留学生と日本人間の異文化相互理解を深めるための活動を行った。さらに，留学生や日本人学生等に対する指導・助言および留学相談のための面談等を行った。

学部教養教育（五福地区）では，外国人留学生のために開講されている「日本語」と「日本事情」科目を担当し，総合科目である「日本事情」では担当教員が授業をコーディネートした。

2012 年 9 月には，留学生指導の充実をはかるため，「富山大学留学生教育指導連絡会議」を開催し，留学生に関する問題について，各学部および事務組織と情報・意見の交換を行った。また，「富山県留学生等交流推進会議」総会と合わせて開催される「留学生との座談会」では，参加留学生達への指導・助言に加え，司会を担当する等の協力をした。

留学生センター教員は，本年度もセンター業務を順調かつ確実に遂行した。今後も，留学生に対する日本語教育・異文化教育および支援の充実をはかっていく。

2．日本語教育部門

日本語研修コース報告（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

後藤寛樹

1　はじめに

大学院入学前予備教育日本語研修コースは，主として，文部科学省によって配置される大使館推薦国費研究留学生および教員研修留学生を対象とした日本語集中コースで，毎年 4 月と 10 月に開講し，各期 15 週間 75 日のコースを提供している。富山大学留学生センターでは，1999 年 10 月に第 1 期を開講し，2013 年 3 月には第 27 期生を送り出した。富山大学に配置される国費研究留学生・教員研修留学生の数は少なく，受講定員に余裕があるため，2000 年 10 月開講の第 3 期日本語研修コースからは，学内公募を実施して，大学推薦国費研究留学生や私費研究生等も受け入れている。本稿では，2012 年 4 月から開講した第 26 期と同年 10 月から開講した第 27 期について報告する。

2　受講者

第 26 期は，文部科学省によって配置された予備教育生はゼロであったので，学内公募を実施し，私費留学生 3 人が受講・修了した。第 27 期は，文部科学省によって配置された国費教員研修留学生 2 人，学内公募による大学推薦国費研究留学生，私費大学院生および研究生 3 人が受講・修了した。受講・修了者は表 1 の通りである。

表 1　日本語研修コース受講・修了者（第 26 期・第 27 期）

期	名　　前	国　籍	指　導　教　員
26	金　　福　山（キン　フクサン）	中　　国	富山大学　唐　　政　教授
	潘　　俊　超（ハン　シュンチョウ）	中　　国	富山大学　清家　彰敏　教授
	劉　　燕　婷（リュウ　エンテイ）	中　　国	富山大学　唐　　政　教授
27	アシアヌット　パペトワ　アドゥクス	ウ　ガ　ン　ダ	富山大学　岡崎　浩幸　准教授
	ナイン　ウィン　ソウ	ミ　ャ　ン　マ　ー	富山大学　岡崎　浩幸　准教授
	ティオジオ　エドヴィジ　ロジン	カ　メ　ル　ー　ン	富山大学　上田　　晃　教授
	モハンマド　アシュラフール　ラハマン	バングラデシュ	富山大学　川原　茂敬　教授
	李　　梦　澤（リ　ボウタク）	中　　国	富山大学　チャピ　ゲンツィ　教授

※上記の受講者に加え，第 26 期は 2 人，第 27 期は 1 人の私費研究生が受講していた。第 26 期は，1 人が授業についていけずに受講を辞退，もう 1 人は研究生そのものを辞めてしまったために受講資格がなくなった。第 27 期は，専門課程での学習が忙しくなり，受講を辞退した。

3　コース担当者

第 26 期，第 27 期ともに，センター専任教員 5 人（出原節子，加藤扶久美，後藤寛樹，副島健治，濱田美和）と，非常勤講師 7 人（加藤敬子，高畠智美，中河和子，永山香織，藤田佐和子，松岡裕見子，横堀慶子）が授業を担当し，後藤寛樹がコースのコーディネートを行った。

4　コーススケジュール

第 26 期は，2012 年 4 月 6 日（金）に開講式，同年 9 月 28 日（金）に修了式を，第 27 期は，2012 年 10 月 9 日（火）に開講式，2013 年 3 月 1 日（金）に修了式を行い，どちらの期も 15 週間 75 日の集中授業を行った。各期の主なスケジュールは以下の通りである。

＜第 26 期＞

2012年	4 月 4 日(水)	学内公募選考
	4 月 5 日(木)	コースオリエンテーション, 挨拶の練習, ひらがな
	4 月 6 日(金)	開講式
	4 月 9 日(月)	授業開始
	5 月23日(水)	異文化交流パーティー
	6 月 1 日(金)	フィールドトリップ(富山市民俗民芸村)
	6 月19日(火)	「私の国」発表会
	7 月21日(土)	ホームビジット
	7 月26日(木)	授業終了
	7 月27日(金)～ 8 月 1 日(水)	スピーチ練習, 文集作成
	8 月 2 日(木)	スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
	9 月28日(金)	修了式

＜第 27 期＞

2012年	10月 3 日(水)	文科省配置学生:諸手続き
	10月 4 日(木)	文科省配置学生:オリエンテーション, 挨拶の練習, ひらがな
	10月 5 日(金)	学内公募選考, 挨拶の練習
	10月 9 日(火)	開講式, 学内公募受講生:オリエンテーション, ひらがな
	10月10日(水)	授業開始
	11月14日(水)	異文化交流パーティー
	11月30日(金)	フィールドトリップ(富山市民俗民芸村)
	12月18日(火)	「私の国」発表会
	12月25日(火)～2013年 1 月 4 日(金)	冬季休業
2013年	1 月26日(土)～27日(日)	ホームステイ, ホームビジット(26日のみ)
	2 月 8 日(金)	授業終了
	2 月12日(火)～18日(月)	スピーチ練習, 文集作成
	2 月19日(火)	スピーチ発表会(「私の専門」発表会)
	3 月 1 日(金)	修了式

5　コース内容

授業は月曜日から金曜日まで 1 日 4 コマで, 日本語と日本事情, コンピュータを中心とした内容で行った。初級クラスの「文法」10 コマ中 8 コマと「語彙・表現」「聴解」「文字・漢字」「会話」各 1 コマの合計 12 コマ，および，中級クラスの午前中の 10 コマ（「文法」 8 コマ，「聴解」「会話」各 1 コマ）は日本語課外補講の授業と合同で開講される授業である。通常の授業の他に，学生の個人の習熟度やニーズに合わせた指導を行うために，特別指導も行った。コース後半からは，専門課程への橋渡しの教育として，自分の専門についての口頭発表とレポート作成を行う「私の専門」プロジェクトも課した。

第 26 期，第 27 期ともに，コース開講当初は初級・中級の 2 つのレベルの受講者がおり， 2 つのクラ

スに分けて授業を行っていた。しかし既に述べたように，第 26 期 2 人，第 27 期 1 人の学生が途中でコースを辞めることになり，それが中級クラスの学生で，コースに残ったのは初級レベルの学生のみであったため，途中でクラスの編成を組み直すことになった。具体的には，第 26 期，第 27 期ともに，午後の一部のクラスで，学習がやや遅れ気味の学生を別クラスとし，少しでも他の学生に追いつけるよう，習熟度別に授業を行った。また，第 27 期はコンピュータのクラスも 2 つに分け，余裕をもって個々の指導に当たれるようにした。表 2，3 にそれぞれの時間割を示す。

5．1　時間割

表 2　第 26 期日本語研修コース時間割

	1 （8：45 ～ 10：15）		2 （10：30 ～ 12：00）		3 （13：00 ～ 14：30）		4 （14：45 ～ 16：15）	
	初級	中級	初級	中級	初級	中級	初級	中級
月	文法 （加藤敬）	文法 A （高畠）	文法 （加藤敬）	文法 A （高畠）	語彙・表現 （加藤扶）	コンピュータ （濱田）	コンピュータ （濱田）	読解 （加藤扶）
火	文法 （後藤）	聴解 （濱田）	文法 （後藤）	会話 （副島）	聴解 （濱田）	作文 （藤田）	特別指導 （加藤扶・副島）	特別指導 （濱田・後藤）
水	文法 （横堀）	文法 A （中河）	文法 （横堀）	文法 A （中河）	文字・漢字 （加藤扶）	文字・漢字 （濱田）	日本事情 （出原）	
木	文法 （高畠）	文法 B （副島）	文法 （高畠）	文法 B （副島）	読解・作文 （横堀）	コンピュータ （後藤）	コンピュータ （後藤）	文法 C （副島）
金	文法 （永山）	文法 B （松岡）	文法 （永山）	文法 B （松岡）	会話 （後藤）	文法 C （副島）	特別指導 （濱田・後藤）	特別指導 （加藤扶・副島）

※網かけのクラスは日本語研修コース専用クラス，それ以外は日本語課外補講との合同クラスである。
※中級レベルの受講者が辞退してからは，午後の中級のクラスを主に習得が遅れている受講者の手当ての時間として利用した。

表 3　第 27 期日本語研修コース時間割

	1 （8：45 ～ 10：15）		2 （10：30 ～ 12：00）		3 （13：00 ～ 14：30）		4 （14：45 ～ 16：15）	
	初級	中級	初級	中級	初級	中級	初級	中級
月	文法 （加藤敬）	文法 A （高畠）	文法 （加藤敬）	文法 A （高畠）	聴解 （加藤扶）	コンピュータ （濱田）	コンピュータ （濱田）	読解 （加藤扶）
火	文法 （後藤）	聴解 （加藤扶）	文法 （後藤）	会話 （副島）	語彙・表現 （藤田）	作文 （加藤扶）	特別指導 （加藤扶・副島）	特別指導 （濱田・後藤）
水	文法 （横堀）	文法 A （中河）	文法 （横堀）	文法 A （中河）	文字・漢字 （加藤扶）	文字・漢字 （濱田）	日本事情 （出原）	
木	文法 （高畠）	文法 B （副島）	文法 （高畠）	文法 B （副島）	読解・作文 （横堀）	コンピュータ （後藤）	コンピュータ （後藤）	文法 C （副島）
金	文法 （永山）	文法 B （松岡）	文法 （永山）	文法 B （松岡）	会話 （後藤）	文法 C （副島）	特別指導 （濱田・後藤）	特別指導 （加藤扶・副島）

※網かけのクラスは日本語研修コース専用クラス，それ以外は日本語課外補講との合同クラスである。
※中級レベルの受講者が辞退してからは，午後の中級のクラスを主に習得が遅れている受講者の手当ての時間として利用した。

5．2　日本語科目

基本的な日本語文法を習得し，運用できるようになること，文字についてもひらがなやカタカナ，基本的な漢字を習得することを目的として授業を行った。

また，独自開発教材を用いて，正しい日本語の発音を身に付けるための指導も行った。

［使用テキスト］（主なもののみ）

文　　法	『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
	『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ　書いて覚える文型練習帳』（スリーエーネットワーク）
	『毎日の発音練習』（独自開発テキスト）
聴　　解	『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ　聴解タスク 25』（スリーエーネットワーク）
	『わくわく文法リスニング 99』（凡人社）
	『絵とタスクで学ぶにほんご』（凡人社）
	『にほんごきいてはなして』（ジャパンタイムズ）
	『楽しく聞こう』（凡人社）
語彙・表現	『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ』（スリーエーネットワーク）
読解・作文	『みんなの日本語初級Ⅰ，Ⅱ　初級で読めるトピック 25』（スリーエーネットワーク）
	『みんなの日本語初級　やさしい作文』（スリーエーネットワーク）
	『楽しく読もう』（凡人社）
文字・漢字	『留学生のための漢字の教科書　初級 300』（国書刊行会）（第 26 期）
	『ストーリーで覚える漢字 300』（くろしお出版）（第 27 期）
会　　話	『クラス活動集 101』『クラス活動集 131』（スリーエーネットワーク）
	『楽しく話そう』（凡人社）
	『にほんごきいてはなして』（ジャパンタイムズ）

5．3　日本事情

学内から国際交流学生ボランティアとして募集した日本人学生との交流・活動を通して，日本社会について学び，さらには習得した日本語を実際に使う機会を提供する。

また，留学生と日本人学生が共に自国の言語や文化に対する関心を高め，異文化を理解し，異文化コミュニケーション能力を養うことを目指す。

5．4　コンピュータ

この授業では，留学生が日本語環境でコンピュータの基本的な操作をすることができ，ひらがなやカタカナ，さらに漢字なども使って，正しい日本語の入力ができるようになることを目指す。また，あわせて，大学での勉学に必要な基本的な情報リテラシーの習得も目指している。

日本語のコンピュータ用語には漢字語やカタカナ語が多いために難解であったり，入力においても促音や拗音といった特殊音の入力が難しいなど，外国人が日本語環境のコンピュータを用いる際に特有な問題があるが，この授業ではそれを克服できるように指導することが大きな目的である。また，専門課程での勉学に備えて，ワープロソフトやプレゼンテーションソフトなどを使えるようになることも目指し，同時に日本語での電子メールの書き方，インターネットの使い方，およびそれに付随する著作権やセキュリティ対策などについても指導を行った。

［使用テキスト］『日本語でできる！外国人のためのパソコンのきほん』（スリーエーネットワーク）

5．5　口頭発表プロジェクト

5．5．1　口頭発表プロジェクト

日本語研修コースに在籍する留学生は，そのほとんどが大学院へ進学する予定の学生であり，コースが始まって半年後にはそれぞれの専門課程に進んで専門の勉強や研究を始めなければならない。教員研修留学生についても，このコースが終わると，教育に関するさまざまな授業を日本語で受けなければならないし，授業見学を通じて現場の教員とのやりとりが必要となる場面も多い。本コースでは，留学生が日本の大学院での研究活動を効率的に進められるように，スピーチ発表会で自分の専門の内容を簡単に説明する口頭発表を行い，さらにレポートにまとめるというプロジェクトを学生に課している。学生それぞれの留学目的に合わせて，大学院進学予定の学生はこれまで自国で研究してきた内容と富山大学で研究したい内容について，教員研修留学生は自国の教育制度の説明と富山大学で学びたい内容について，それぞれ原稿とスライドを作成してスピーチ発表会で発表し，レポートにまとめるというプロジェクトである。この活動は，一般日本語，コンピュータ，そして専門の学習が一体となって行われるものである。

具体的には，留学生は自分の専門について，専門用語を調べたり，必要な情報をインターネットなどから得たり，あるいは必要に応じて所属研究室の指導教員や学生に質問したりした上で，作文の時間に発表原稿を作成し，コンピュータの時間にプレゼンテーションソフトを使用してスライドを準備した。その後練習を重ね，最終的には，コース修了前に開催されるスピーチ発表会で，作成したスライドを示しながらプレゼンテーションを行った (5.5.2 参照)。さらに，学生は発表原稿をもとにしてレポートを作成した。学生の作成したレポートは，第 26 期，第 27 期のものをまとめ，日本語研修コース修了レポート集『らいちょう』として発行した（5.5.3 参照）。

5．5．2　スピーチ発表会

スピーチ発表会は，第 26 期は 2012 年 8 月 2 日（木）に，第 27 期は 2013 年 2 月 19 日（火）に，それぞれ午後 1 時半より開催した。第 26 期は 15 人，第 27 期は 25 人の出席者があった。出席者は学生の指導教員やセンターに関係のある教員，学務部学生支援グループ留学支援チーム職員，富山大学の留学生および日本人学生などである。

留学生は，発表会に向けて，指導教員，同じ研究室の先輩留学生，日本人学生に協力してもらいながら熱心に準備を進めた。発表会に向けた準備は，作文とコンピュータの授業の中で行ったほか，日本語教育部門の 4 人の教員がそれぞれ分担した学生に対して，授業時間以外にも原稿チェック，発表練習などの指導を行った。

5．5．3　修了レポート集作成

スピーチ発表会で口頭発表を行った原稿をもとにレポートを作成し，修了レポート集『らいちょう』として発行した。留学生は各自の専門についてのレポートを作成したほか，それぞれの期の中表紙，寄せ書き，写真のページなどを共同で作成した。各自の能力を発揮し，話し合いを進めながら，コンピュータの授業で学んださまざまな文書の作り方などを能率良く活かし，完成度の高い文集を作り上げた。

6　成績評価

メインテキスト（『みんなの日本語』）に基づく定期試験を 7 回実施した。この定期試験は，筆記試験（文法，作文，読解），聴解試験，会話試験から構成されるものである。また，「語彙・表現」「文字・漢字」のクラスでは期末試験を実施した。口頭発表プロジェクトについても，原稿と発表会当日の発表を教員が採点し，プロジェクトの成績を出した。コース修了時に，定期試験，その他の試験，口頭発表プロジェクトの成績を総合して，コース全体の成績判定を行い，コースへの出席率も含めた成績表を作成

して，受講者本人と指導教員へ通知した。

7　コース評価

日本語研修コースでは，コース改善に役立てるため，学期終了時にコース評価を実施している。実施前に，成績等には全く影響しないことを伝えた上で，授業の内容，テキスト，教師の教え方，コンピュータ授業，口頭発表プロジェクト，日本人学生との時間，ホームステイ・ホームビジットの各項目について，調査を行った。回答方法は，５段階で評点をつけるものと，与えられた選択肢から該当する答えを選択するものとがある。また，自由意見は日本語または英語で記入させた。それぞれの期の結果を表４，表５に示す。自由意見については，英語で書かれたものは日本語に翻訳して，日本語の誤りがあるものは訂正して掲載する。翻訳・訂正ともにコーディネーターの判断によって行っている。

表４　第26期コース評価

質問及び回答結果 （５段階評価の場合は点が高いほどよい評価であることを示す）	自　由　意　見
（コース全体） コースは役に立ったか：　5.0 スケジュールはどうだったか： 　忙しい３人 日本語は上達したか： 　した１人，ふつう２人	
（日本語の授業） 授業はどうだったか：　4.7 教科書はどうだったか：　4.7 ハンドアウトはどうだったか：　4.7 教師の教え方はどうだったか：　5.0	
（テスト） テストはどうだったか：　4.0 テストは多かったか： 　多い３人	
（コンピュータ授業） 授業は役に立ったか：　5.0 テキストはどうだったか：　5.0 教え方はどうだったか：　5.0	
（口頭発表プロジェクト） プロジェクトはたいへんだったか： 　たいへん１人，ふつう２人 プロジェクトは役に立ったか：　5.0 発表会は役に立ったか：　4.7	
（見学） 見学は楽しかったか： 　はい３人 見学場所は適当だったか： 　はい３人 見学の時期は適当だったか： 　はい３人	どんなところが楽しかったか：（記述なし）

（ホームステイ・ホームビジット） ホームステイ・ホームビジットは楽しかったか： 　はい３人 時期は適当だったか： 　はい３人	どんなところが楽しかったか：（記述なし）
（日本事情） 日本人と一緒に勉強するのはどうだったか： 日本の文化を知らなければならないと思うか： 　思う３人	・いいと思いました。 ・おもしろい。 ・たのしいです。 どうしてそう思うか。：（記述なし）

表５　第27期コース評価

質問及び回答結果 （５段階評価の場合は点が高いほど よい評価であることを示す）	自　由　意　見
（コース全体） コースは役に立ったか：　5.0 スケジュールはどうだったか： 　忙しい３人，ちょうどいい２人 日本語は上達したか： 　した４人，普通１人	
（日本語の授業） 授業はどうだったか：　5.0 教科書はどうだったか：　5.0 ハンドアウトはどうだったか：　4.8 教師の教え方はどうだったか：　5.0	
（テスト） テストはどうだったか：　4.6 テストは多かったか： 　ちょうどよい５人	
（コンピュータ授業） 授業は役に立ったか：　4.6 教材はどうだったか：　4.8 教え方はどうだったか：　5.0	
（口頭発表プロジェクト） プロジェクトはたいへんだったか： 　たいへん１人，ふつう４人 プロジェクトは役に立ったか：　4.8 発表会は役に立ったか：　4.8	
（見学） 見学は楽しかったか： 　はい５人	何が楽しかったか ・たくさんのものを見ました。 ・日本の伝統についてたくさん勉強しました。 ・薬の作り方などを見ることができた。

見学場所は適当だったか： 　はい５人 見学の時期は適当だったか： 　はい４人 　いいえ１人	 いつ頃行きたいか ・もっと長く見学したかったです。 ・時期は適当だったが，天気がよい日に行きたい。
（ホームステイ・ホームビジット） ホームステイ・ホームビジットは楽しかったか： 　はい５人 時期は適当だったか： 　はい３人 　いいえ２人	 何が楽しかったか ・日本のうちに泊まったのが楽しかった。 ・家族がとてもやさしかった。 ・お母さんがとても親切だった。 ・もう一度行きたい いつ頃行きたいか ・もっと長くいたかった。 ・あたたかくなってから行きたい。
（日本事情） 日本人と一緒に勉強するのはどうだったか：	 ・日本人学生がいろいろ手伝ってくれたし，よかった。 ・うれしいです。 ・いいと思います。 ・もっとたくさん時間があるといいです。 ・たのしかった。
日本の文化を知らなければならないと思うか： 　思う５人	 どうしてそう思うか。 ・自分が置かれた場面でどのように振る舞えばいいか知り，コミュニティに入っていくのに役に立つ ・日本と自分の国では文化が違いますから。 ・日本の文化は特別だからです。 ・いつも日本人と話して，日本人の友達がほしいですから。 ・日本人は親切だし，真面目に働くからです。

第 26 期，第 27 期ともに，コースは役に立ったかという問いに，全員が 5 段階評点の 5 と回答し，また，自己の日本語の上達度についての問いにも，半数以上が「上達した」と答えており，これらの点から受講者のコースに対する満足度は高かったということがうかがえる。コースのスケジュールについては，「ちょうどよい」と答えたのが 2 人，「忙しい」と答えたのが 6 人と，「忙しい」という答えが多数を占めているが，「忙しい」と答えたのはすべて研究生あるいは大学院生として富山大学に在籍する学生であった。特に第 27 期は既に実験や研究を開始して忙しい学生が複数おり，朝から夕方まで続く集中コースでの学習は大変だと感じられたのかもしれない。一方，「ちょうどよい」と答えたのは教員研修生で，彼らはまだ教育分野の専門的な研究を開始しておらず，比較的余裕があったためにこのような回答になったのではないかと考えられる。

日本語の授業についての問いでは，5段階評点で平均4.7以上の高い評価が得られている。また，テストについては第26期よりも第27期のほうがやや高い評価が得られ，テストの頻度についても第26期が全員「多い」と答えたのに対して，第27期は全員が「ちょうどいい」と答えている。テストの内容や頻度はどちらの期でも同じであるので，何がこの差の原因になっているのかは，この結果からだけではわからない。

コンピュータの授業については，反対に第26期のほうがやや高い評価が得られた。これについても，この結果を見ただけでは，何がこの差の原因となっているかはわからないが，おそらく受講者のコンピュータリテラシーの差によってこのような結果が生じているのではないだろうか。口頭発表プロジェクトに関しては，どちらの期も平均で4.7以上の回答が得られており，プロジェクトの意義や有効性を受講者自身が感じ取ることができていると言ってよいだろう。

見学，ホームステイ・ホームビジット，日本事情についても全般的に良い評価が得られた。見学やホームビジットは，日本の文化や習慣を直接体験できる場として，また日本事情の授業は，日本語のクラスで学んだ日本語を実際に運用できる場として，とらえられているようである。

第26期，第27期ともに，自由記述にはほとんどコメントが書かれなかった。できるだけ多くの声を拾い上げるために，個別にインタビューを実施するなど，授業評価のあり方を検討してみる必要もあるかもしれない。

8　おわりに

大学院入学前予備教育・日本語研修コースは，2013年3月に第27期生を送り出した。これまでに文部科学省からの配置学生，学内措置による受講者を合わせて174人がこのコースを修了している。

初級クラスについては，日本語課外補講との合同クラスがあることにより，日本語研修コース単独で授業を行っていた頃よりも授業が活発化していると感じられる。期によって受講者の人数や国籍，留学の目的などは異なるが，どのような構成であっても，合同クラスの存在はどちらのプログラムを受講している学生にとっても，プラスになっていると思われる。

一方で，中級クラスについては，第26期，第27期ともに，コース開講当初は受講者がいたにも関わらず，既に述べたようにコース途中でその受講者が受講を辞退し，結果として日本語研修コースとして中級クラスを受ける学生はゼロとなってしまった。辞退の理由は，クラスの雰囲気が合わなかった，研究生を辞めてしまった，専門の勉強が忙しくなったということで，必ずしもコースそのものが直接の原因となっているとは言えないが，初級クラスとは対照的に日本語課外補講との合同化があまりうまくいっていない状況もあるので，開講するコマ数，レベルなど，いろいろな面での見直しを進めていく必要があるだろう。昨年度の年報でも触れたが，見直しを進めていく際には，日本語研修コースのカリキュラムを検討するだけでなく，留学生センターの他の日本語プログラムとも連携をとりながら，改善の道を探っていかなければならない。日本語ゼロレベルで来日した留学生が，在学中に初級から段階的に次のレベルへと進み，自己の日本語力の伸びを感じながら，専門課程での研究に打ち込めるようなプログラムが提供できるよう，留学生センターの日本語プログラム全体の枠組みを検討したうえで，個々のプログラムやレベルの教育内容を具体化していく必要があるだろう。

日本語課外補講報告（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

濱田美和

1　はじめに

日本語課外補講は，富山大学に在籍する外国人留学生及び外国人研究者であれば誰でも受講できるプログラムである。日常生活や大学での学習・研究活動に必要な日本語の習得を目指して，初級，中級，上級の 3 つのレベル別クラス，及び，中級•上級クラスの共通科目「漢字」を開講している。2012 年度は，前期（2012 年 4 月～ 9 月）と後期（2012 年 10 月～ 2013 年 3 月）にそれぞれ 15 週間開講した。

以下，2012 年度の日本語課外補講の実施状況について報告する。なお，2005 年 10 月に富山大学（五福キャンパス），富山医科薬科大学（杉谷キャンパス），高岡短期大学（高岡キャンパス）の 3 大学が再編・統合したことにより，富山大学で実施されている日本語課外補講は，五福キャンパスにおいて留学生センターが実施するものと，杉谷キャンパスにおいて医学部所属の日本語・日本事情担当教員が中心となり実施するものとの 2 つとなったが，本稿では，五福キャンパスで留学生センターが実施している日本語課外補講について報告する。

2　受講者

前期は，初級クラスが 10 人，中級クラスが 15 人，上級クラスが 37 人（うち 2 人は中級クラスも同時に受講），計 60 人が日本語課外補講を受講している。60 人の在籍身分別の内訳は，大学院生 25 人，研究生 14 人，特別聴講学生 12 人，科目等履修生（県費留学生），教員研修生各 3 人，特別研究学生 2 人，日本語•日本文化研修留学生 1 人となっている。国•地域別の内訳は，中国 41 人，韓国 5 人，チェコ 3 人，ベトナム，ロシア各 2 人，インドネシア，ガーナ，カメルーン，台湾，バングラデシュ，ブラジル，ラトビア各 1 人となっている。また，所属別の内訳は，理工学教育部 19 人，経済学部 12 人，人文学部 9 人，経済学研究科 5 人，芸術文化学部，人間発達科学研究科各 4 人，人間発達科学部 3 人，工学部，人文科学研究科各 2 人となっている。

後期は，初級クラスが 7 人，中級クラスが 15 人，上級クラスが 35 人，計 57 人が日本語課外補講を受講している。57 人の在籍身分別の内訳は，大学院生 21 人，研究生，特別聴講学生各 11 人，特別研究学生，科目等履修生各 4 人（科目等履修生 4 人のうち 3 人は県費留学生），日本語・日本文化研修留学生 3 人，教員研修生 2 人，学部生　1 人となっている。国・地域別の内訳は，中国 35 人，韓国 6 人，ロシア 4 人，カメルーン，タイ，ベトナム各 2 人，インド，インドネシア，ガーナ，台湾，ブラジル，マレーシア各 1 人となっている。また，所属別の内訳は，理工学教育部 15 人，人文学部 13 人，経済学部，経済学研究科各　7 人，工学部 5 人，人間発達科学部，人間発達科学研究科各 3 人，理学部，人文科学研究科，芸術文化学研究科，生命融合科学教育部各 1 人となっている。

なお，日本語・日本文化研修留学生，及び，協定校からの短期留学生については，日本語課外補講上級クラスで開講している科目を，総合日本語コースの科目として受講している（詳細は，総合日本語コース報告，短期留学生報告を参照）。

3　授業担当者

前期，後期ともに，センター専任教員 4 人（加藤扶久美，後藤寛樹，副島健治，濱田美和），及び謝金講師（日本語研修コースとの合同授業については非常勤講師）8 人（加藤敬子，高畠智美，中河和子，永山香織，藤田佐和子，松岡裕見子，要門美規，横堀慶子）が授業を担当した。前期，後期ともに濱田美和がコーディネートを行った。

4　授業日程

前期は 2012 年 4 月 9 日（月）～ 7 月 26 日（木）を授業期間とした。曜日調整のため，7 月 17 日（火）は月曜日の授業，7 月 25 日（水）は金曜日の授業を行った。後期は 2012 年 10 月 10 日（水）～ 2013 年 2 月 8 日（金）を授業期間とした。12 月 25 日（火）～ 1 月 4 日（金）は冬季休業，1 月 18 日（金）は大学入試センター試験準備日のため，休講とした。また，曜日調整のため，11 月 22 日（木）は金曜日，1 月 16 日（水）は月曜日の授業を行った。

オリエンテーションは，前期は 4 月 5 日（木），後期は 10 月 4 日（木）に開催した。専任教員 5 人（出原節子，加藤扶久美，後藤寛樹，副島健治，濱田美和）がオリエンテーションを行った。オリエンテーションの案内は，留学生センターのホームページに掲載する他，日本語，英語，中国語の 3 カ国語表記で作成したポスターを五福キャンパス内の各学部及び留学生センター談話室に掲示し，また，学期初めに発行される留学生センターニュースの掲示板でも紹介した。留学生センターのホームページでは，時間割や授業概要（日本語，英語，中国語版を用意）の閲覧，それから，受講申請書とふりがな入りの時間割も PDF ファイルとしてダウンロードできるようになっている。オリエンテーションでは，受講希望者一人一人とセンター専任教員が面接し，受講者の日本語の習熟度に応じたクラスを紹介し，受講申請書の提出により，登録を行った。ただし，来日時期が遅れる学生等については，コーディネーターが面接を行った上で，開講期間の途中からの受講も認めた。

5　授業内容

5．1　時間割

前期，後期ともに週 35 コマ授業を行った。前期の時間割を表 1，後期の時間割を表 2 に示す。

表 1　2012 年度前期 日本語課外補講時間割

曜	限	初級クラス		中級クラス	上級クラス
月	1		文法（加藤敬）	文法Ａ（高畠）	
	2		文法（加藤敬）	文法Ａ（高畠）	表現技術１（濱田）
	3		語彙・表現（加藤扶）	［中級・上級クラス共通］漢字１（高畠）	
火	1		文法（要門）	聴解（濱田）	
	2		文法（要門）	会話（副島）	会話１（松岡）
	3		聴解（濱田）		作文１（松岡）
	4				読解Ａ１（藤田）
水	1		文法（横堀）	文法Ａ（中河）	
	2	生活日本語（加藤扶）	文法（横堀）	文法Ａ（中河）	
	3		文字・漢字（加藤扶）		日本文化１（中河）
木	1		文法（高畠）	文法Ｂ（副島）	
	2	生活日本語（要門）	文法（高畠）	文法Ｂ（副島）	
	3				聴解１（要門）
	4				文法１（要門）
金	1		文法（永山）	文法Ｂ（松岡）	
	2		文法（永山）	文法Ｂ（松岡）	読解Ｂ１（遠藤）
	3		会話（後藤）		

＊ 1 限 8:45 ～ 10:15，2 限 10:30 ～ 12:00，3 限 13:00 ～ 14:30，4 限 14:45 ～ 16:15
＊ 網掛けの授業科目は，日本語研修コースとの合同授業

表 2　2012 年度後期 日本語課外補講時間割

曜	限	初級クラス		中級クラス	上級クラス
月	1		文法（加藤敬）	文法Ａ（高畠）	
	2	生活日本語（加藤扶）	文法（加藤敬）	文法Ａ（高畠）	表現技術 2（濱田）
	3		聴解（加藤扶）	［中級・上級クラス共通］漢字 2（高畠）	
火	1		文法（要門）	聴解（加藤扶）	
	2		文法（要門）	会話（副島）	会話 2（松岡）
	3	生活日本語（要門）	語彙・表現（藤田）		作文 2（松岡）
	4				読解Ａ 2（藤田）
水	1		文法（横堀）	文法Ａ（中河）	
	2		文法（横堀）	文法Ａ（中河）	
	3		文字・漢字（加藤扶）		日本文化 2（中河）
木	1		文法（高畠）	文法Ｂ（副島）	
	2		文法（高畠）	文法Ｂ（副島）	
	3				聴解 2（要門）
	4				文法 2（要門）
金	1		文法（横堀）	文法Ｂ（松岡）	
	2		文法（横堀）	文法Ｂ（松岡）	読解Ｂ 2（遠藤）
	3		会話（後藤）		

＊ 1 限 8:45 ～ 10:15，2 限 10:30 ～ 12:00，3 限 13:00 ～ 14:30，4 限 14:45 ～ 16:15
＊ 網掛けの授業科目は，日本語研修コースとの合同授業

5．2　初級クラスの授業内容

前期，後期ともに，月曜日から金曜日まで毎日午前中 2 コマ連続で「文法」の授業と，午後に「聴解」，「会話」，「文字・漢字」，「語彙・表現」の授業を各 1 コマ行った。また，毎日日本語の授業に出席することが困難な学生のために，「生活日本語」の授業を週 2 コマ設けた。

週 10 コマの「文法」の授業では，『みんなの日本語 初級』Ⅰ，Ⅱ（スリーエーネットワーク）をメインテキストとして，教科書を 1 日 1 課ないしは 2 日に 1 課のペースで初級文型の導入及びその定着のための練習を行った。授業の最初に，『毎日の発音練習』（独自開発教材）を用いた発音練習も適宜取り入れた。

表 3　初級クラス「文法」（『みんなの日本語 初級』）の授業進度

第 1 週	1 課～ 4 課		第 9 週	30課～32課	
第 2 週	5 課～ 7 課	1 課～ 6 課試験	第 10 週	33課～35課	26課～32課試験
第 3 週	8 課～11課		第 11 週	36課～38課	
第 4 週	12課～14課	7 課～ 12 課試験	第 12 週	39課～41課	33課～38課試験
第 5 週	15課～18課		第 13 週	42課～45課	
第 6 週	19課～22課	13 課～ 18 課試験	第 14 週	46課～48課	39課～45課試験
第 7 週	23課～26課		第 15 週	49課～50課	日本語能力試験
第 8 週	27課～29課	19 課～ 25 課試験		復習	旧 3 級模擬試験

「聴解」の授業では，『毎日の聞き取り 50 日』上，下（凡人社），『絵とタスクで学ぶ日本語』（凡人社），『わくわく文法リスニング 99』（凡人社），『楽しく聞こう』Ⅰ，Ⅱ（凡人社），『日本語きいてはなして』Vol.1，Vol.2（ジャパンタイムズ），『Situational Functional Japanese』Vol.1，Vol.2，Vol.3（凡人社），

『みんなの日本語初級 聴解タスク 25』(スリーエーネットワーク)の CD やテープを用い,初級クラス「文法」(『みんなの日本語 初級』)の授業進度に合わせて，聴解練習を中心に行った。

「会話」の授業では，午前の「文法」の時間に学んだ文法事項を使って，特に話す力を身につけるための応用練習を行った。

「語彙・表現」の授業では，午前の「文法」の時間に学んだ語彙や表現をより正確に理解し，正しく使えるようになるための練習を中心に行った。

「文字•漢字」の授業では,前期は『留学生のための漢字の教科書 初級 300』(国書刊行会),後期は『ストーリーで覚える漢字 300』(くろしお出版)をメインテキストとして,1 日の授業で 1 課進むペースで,ひらがな，カタカナ，漢字の読み書きの練習を中心に行った。

週 2 コマの「生活日本語」の授業では,『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』I (講談社インターナショナル)をメインテキストとして，1 日の授業で 1 課進むペースで初級文型の導入及び会話力を伸ばすための練習を中心に行った。

なお，前期については，月曜 2 限開講予定だった「生活日本語」を，高岡キャンパスからの受講者のスケジュールにあわせて，5 月の連休明けから水曜 2 限に変更するとともに，4 月分の授業内容について補講を行うなどのサポートを行った。そして，後期については，木曜 2 限開講予定だった「生活日本語」を受講者のスケジュールにあわせて，第 2 週目以降火曜 3 限に変更した。

5．3　中級クラスの授業内容

前期，後期ともに，午前中週 2 日 2 コマ連続で「文法Ａ」と「文法Ｂ」の授業を行い，1 日は「聴解」と「会話」の授業を各 1 コマ行った。

「文法Ａ」の授業では『ジェイ・ブリッジ』(凡人社)をメインテキストとして，3 日（6 コマ）の授業で 1 課進むペースで，中級の文型や表現を導入し，それらを大学生活で遭遇する場面や様々なトピックに合わせて，運用できるよう談話練習なども行った。一方,「文法Ｂ」の授業では『日本語中級Ｊ 301』,『日本語中級Ｊ 501』(スリーエーネットワーク)をメインテキストとして,『日本語中級Ｊ 301』は 1 日（2 コマ）の授業で 1 課進むペース,『日本語中級Ｊ 501』は 2 日（4 コマ）の授業で 1 課進むペースで，それぞれ中級の語彙や文法事項を導入し，主に読解の力を伸ばすための練習を行った。

「聴解」の授業では，前期は『日本語生中継•初中級編』1，2（スリーエーネットワーク)，後期は『毎日の聞き取り 50 日 中級』上，下（凡人社),『新•毎日の聞き取り 50 日 中級』上，下（凡人社）を用い，中級の語彙や表現を確認しながら，聴解練習を行った。

「会話」の授業では,「文法」の授業でのメインテキスト『日本語中級Ｊ 301』,『日本語中級Ｊ 501』を部分的に用いて，話し合いの練習やプレゼンテーションの練習を中心に，大学生活や日常生活で出会う場面に応じた日本語を使って，適切に話すための練習を行った。

5．4　上級クラスの授業内容

前期，後期ともに,「読解」の授業を週 2 コマ,「作文」,「聴解」,「会話」,「文法」,「表現技術」,「日本文化」の授業をそれぞれ週 1 コマ行った。上級クラスの授業は，2 期連続して受講する学生のために，以前から前期と後期で扱うテーマや教材等を変えて対応していたが，平成 22 年度より前期は科目名の末尾に「1」，後期は「2」を付けて，それぞれの違いを科目名でも表すことにした。ただし，授業目的や進め方等の授業概要は同じであるため，以下，まとめて報告する。

「読解」の授業は,「読解Ａ」と「読解Ｂ」の 2 科目を設け,「読解Ａ」は前期は『生きた素材で学ぶ中級から上級への日本語』(ジャパンタイムズ),後期は新たに『新完全マスター読解 日本語能力試験Ｎ 1』(スリーエーネットワーク)をメインテキストとし，発音の指導，表現や文型練習なども取り入れながら読解練習を行った。「読解Ｂ」は，現代日本社会の問題を扱った新聞記事，文学作品，教養書などの

生教材を利用し，初めに論理構成を把握させ，効率的な読みの練習を心がけた。ブックレポート作成の練習も行った。

「作文」の授業では，コンピュータを使用しながら，レポートや論文を書く際に必要となる論理的な文章の書き方の練習を行った。『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』(スリーエーネットワーク)，『大学・大学院留学生の日本語４　論文作成編』（アルク）等を参考書とし，練習問題等はワープロ文書で提供した。

「聴解」の授業では，日本語の聴解教材とあわせて，テレビやラジオ，インターネットなど，様々なメディアを用いて，大学生活や日常生活に必要な聴解練習を行った。

「会話」の授業では，ロールプレイ等の会話練習等を通して，大学生活や日常生活で出会う場面，状況での会話力を伸ばす練習を行った。また，様々なトピックについて日本語で的確に説明・描写する練習，意見や感想を述べる練習を行った。

「文法」の授業では，前期は『新完全マスター文法 日本語能力試験Ｎ１』（スリーエーネットワーク），後期は『日本語能力試験Ｎ１・Ｎ２ 試験に出る文法と表現』（桐原書店）をメインテキストとし，大学での学習，研究生活に必要な上級レベルの文法・表現について，演習形式で確認した。日本語能力試験の受験対策もあわせて行った。

「表現技術」の授業では，目上の人とのやりとりや，不特定多数の人に対して情報発信する際に必要となる，フォーマルな場で用いられる日本語の表現を確認した後，メールやメモなど日常的・実用的な文章の書き方やプレゼンテーション・スライドを利用しての口頭発表の練習を行った。

「日本文化」の授業では，テレビ番組，アニメ映画，漫画，新聞・雑誌記事，自治体広報などの様々なメディアを使用して，震災と日本，日本の中の外国人，ジェンダー，ポップカルチャーといった視点から現代日本社会の問題を考えた。

５．５　中級・上級クラス共通科目「漢字」の授業内容

「漢字」は，中級・上級クラスの共通科目として，前期，後期ともに週１コマ授業を行った。教科書には『漢字 1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.1，Vol.2（凡人社）等を使用した。非漢字圏の学生には，読み方，書き方及び意味・用法の全体的な指導を行い，漢字圏の学生には，読み方と意味・用法の確認を中心に，様々な話題について書かれた文章を読み，そこで用いられている漢字語を学ぶことで，更なる語彙の拡充を図った。クラスには異なるレベルの学習者が混在しているため，一斉授業ではなく，時間を区切ってそれぞれのレベルに合わせた指導を行っている。

6　試験

初級クラス「文法」，「聴解」，「会話」では，７回の定期試験を実施した。定期試験の内容は，筆記試験，聴解試験，会話試験で，いずれの試験も日本語研修コース初級クラスと同じものを使用した。初級クラス「語彙・表現」では期末試験を実施し，「文字・漢字」では毎回の授業で確認テストを実施した。中級クラスでは，「文法Ａ」は２回の定期試験，「文法Ｂ」は３回の定期試験，「聴解」は期末試験を実施し，「会話」は授業中に発表を課した。上級クラスでは，「読解Ａ」，「読解Ｂ」，「会話」，「文法」は期末試験を実施し，「作文」，「聴解」，「表現技術」，「日本文化」は期末レポートあるいは発表を課した。中級・上級クラスの共通科目「漢字」では毎回の授業での確認テストと２回の定期試験を実施した。

7　授業評価

日本語課外補講の受講者に対して，授業内容とカリキュラムに関するアンケート調査を前期と後期の授業期間中に実施した。授業内容に関するアンケートはクラス別に集計し，カリキュラムに関するアンケートは回答者全員分をまとめて集計した。

授業内容に関するアンケートは，いずれのクラスにおいても，基本的には科目ごとに実施したが，同一の教科書（『みんなの日本語 初級』）を使用した科目（初級クラス「文法」,「聴解」,「会話」,「語彙・表現」）についてはまとめて実施した。

以下，表4に前期初級クラス，表5に前期中級クラス，表6に前期上級クラス，表7に後期初級クラス，表8に後期中級クラス，表9に後期上級クラスの授業内容のアンケート集計結果をまとめた。授業内容に関するアンケートでは，中級，上級クラスについては，1人の学生が複数の授業科目に答えているため，括弧内の人数はいずれも延べ人数を表す。評点は5段階評価で，値が大きいほど良い評点であることを示す。「とてもよかった」を5点,「よかった」を4点,「ふつう」を3点,「あまりよくなかった」を2点,「ぜんぜんよくなかった」を1点として，その平均点を出したものである。

カリキュラムに関するアンケート調査は，1人の学生が1回のみ回答することになっている。表10に前期，表11に後期の結果をまとめた。

なお，自由記述については一部英語での回答もあったが，筆者が日本語に翻訳した。また，日本語の表記や助詞等の間違いは修正して掲載した。

表4　前期初級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者11人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1．授業内容 とてもよかった（3人） よかった（6人） ふつう（2人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.1	・授業内容は豊富になったほうがいいです。（みんなの日本語） ・授業内容はおもしろいと思います。（文字・漢字）
2．授業のレベル とてもよかった（4人） よかった（6人） ふつう（1人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.3	・ときどき速すぎた。（生活日本語）
3．授業の進度 ちょうどよかった（2人） よかった（6人） ふつう（0人） あまりよくなかった（2人） ぜんぜんよくなかった（0人） 無回答（1人）	3.8	・復習の時間がもっとあったほうがいい。（生活日本語） ・遅すぎた。（生活日本語） ・速すぎた。（生活日本語）
4．教科書・プリント とてもよかった（3人） よかった（6人） ふつう（1人） あまりよくなかった（1人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.0	・練習がよくなかった。（生活日本語） ・整理の資料があったほうがいいです。（みんなの日本語） ・よかったですが，教材はちょっと簡単です。（文字・漢字）
5．教え方 とてもよかった（7人） よかった（4人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	・いいと思います。（みんなの日本語） ・先生の教え方はおもしろいと思います。（文字・漢字）

6．どのぐらい出席したか 80%～100%（11人） 60%～80%（0人） 40%～60%（0人） 20%～40%（0人） 0%～20%（0人）	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（3人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（2人） ・その授業に興味がなかったから（0人） ・その他（3人）：旅行のため，国へ帰りました，実験があった
7．予習・復習をしたか かなりした（4人） すこしした（7人） ぜんぜんしなかった（0人）	—	・習った文法についての筆記テストがあれば役に立ったと思う。そうすればもっと勉強した。（生活日本語） ・復習は必要です。（みんなの日本語） ・予習と復習は必要です。（文字・漢字）

その他

- コースは留学生にとってとても役に立った。もし可能なら，日本人学生と留学生の間での短い対話などが提供されるといいと思う。（生活日本語）
- 日本語は私たち外国人にとって少し難しいが，先生や教え方はとてもいいと思う。（生活日本語）
- このような形で日本語の基礎を学べて感謝している。このクラスに出席できてとてもよかった。（生活日本語）
- ことばの練習がもっと多かったらいいと思います。（文字・漢字）

表5　前期中級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者11人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1．授業内容 とてもよかった（10人） よかった（1人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.9	・先生方はみんな勤勉で，今までいろいろな文法の点がわかるようになってきて，うれしいです。心から感謝しております。（文法A） ・いろいろな資料を勉強して，いろいろな話をすると，新しいことばと情報がわかるようになっていくと思います。（文法B） ・先生方は，みんなきびきびと機敏で，すべての授業は楽しかった。（文法B）
2．授業のレベル ちょうどよかった（7人） よかった（2人） ふつう（1人） あまりよくなかった（1人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.4	・難しすぎた。（漢字）
3．授業の進度 ちょうどよかった（4人） よかった（7人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.4	
4．教科書・プリント とてもよかった（4人） よかった（7人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.4	
5．教え方 とてもよかった（11人） よかった（0人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	5.0	・先生は新しい語彙を教えてくださって，とてもよかったです。（文法B） ・先生の教え方はよかったです。（聴解） ・先生の教え方はよかったです。（会話）

6．どのぐらい出席したか 80%～100%（6人） 60%～80%（2人） 40%～60%（3人） 20%～40%（0人） 0%～20%（0人）	－	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（6人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（0人） ・その授業に興味がなかったから（0人） ・その他（3人）：眠かったから，難しいですから
7．予習・復習をしたか かなりした（5人） すこしした（5人） ぜんぜんしなかった（0人） 無回答（1人）	－	

その他

・もっと練習があればいいと思います。（文法B）
・上級クラスで，副島先生，松岡先生，続けて教えてください。（文法B）
・漢字の授業でいろいろな方法を使って，ゲームなど，だから勉強しやすかったです。どうもありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。（漢字）

表6　前期上級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者62人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1．授業内容 とてもよかった（47人） よかった（14人） ふつう（1人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.7	・勉強になりました。すばらしかったです。授業内容がおもしろくて，楽しんでいます。（読解A） ・いろいろなテーマがあったから，新しい言葉をたくさん学びました。（読解B） ・先生の授業はおもしろくて，読解の技術がだんだん上手になりました。ありがとうございました。読解の授業は，1級，2級試験の読解練習もあるほうがいいと思う。（読解B） ・読んだ文章はとても興味深かった。（読解B） ・自分の修論を完成させるために役に立つ。（作文） ・論文に使う言葉，序論，本論，考察，結論などの書き方がとてもいいと思う。（作文） ・とても役に立ちました。（作文） ・先生はいつも真面目に教えてくださいます。心より感謝しております。（作文） ・いろいろな形式のスピーチを聞きたい。（卒業式，弁論大会，送別会など）（聴解） ・ビデオを使用した授業は，テーマも面白く，見るのが楽しかったです。（聴解） ・面接を受ける時，交通事故に遭った時などのいろいろな場面の会話を練習しました。（会話） ・N1の文法はおもしろい。（文法） ・N1の文法はかなり難しいですが，この授業は能力試験に合格するため，もちろん役に立つ。（文法） ・敬語の勉強はとても大事だと思う。（表現技術） ・これからの生活や仕事に大きく役立つ内容でありがたいです。（表現技術） ・敬語，発表とスピーチについて勉強した。この知識は大きな役に立つと思う。（表現技術） ・この授業で受けた知識はふつうの生活で役に立つと思います。特に発表するスキルや，敬語の使い方です。（表現技術） ・今学期の文化の授業，ありがとうございました。この授業で教えてもらった文化についての全部の知識が日本での生活に役に立ちます。（日本文化） ・先生はたくさん日本について面白い話題をみんなと一緒に相談して，クラスはとても楽しいです。（日本文化）

		・この授業で，日本文化の一部，特に日本人にとって当たり前のことが少しわかるようになりました。また，前から知っていたことを違う角度で見ることができたので，日本文化の世界は広まったと思います。（日本文化） ・とてもよかった。しかし，カリキュラムの連続性が必要だと思います。いきなり憲法の話から次の授業ではアニメなどの話は少し複雑な気分（？）でした。（日本文化） ・１コマの授業時間内に更に内容が豊富であったらいいなあと思いました。グループ分けはある程度学生の意思尊重の上で行ったらよい効果が出ると思います。（日本文化） ・とてもおもしろかったです。もっと多く勉強したくなります。（日本文化） ・日本文化について各側面から勉強した。（日本文化）
２．授業のレベル ちょうどよかった（36 人） よかった（25 人） ふつう（１人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.6	・私の現在のレベルにちょうどよかったと思います。いろいろな学んだことを思い出しました。いい勉強になりました。（読解Ａ） ・文法や言葉や表現，全部含まれている。勉強になった。（作文） ・大体よかったが，かなり難しい部分もありました。（聴解） ・私にとってちょっと難しいです。（聴解） ・時にはレベルがちょっと低かったですが，ビデオを使用した授業はちょうどよかったと思います。（聴解） ・レベルはちょうどよかったと思う。（文法） ・元々分かっていた内容もあったが，新しい表現もたくさん学ぶことができた。（文法） ・説明を聞いて，問題を解いてみても，分からない部分もあったし，かなり難しかったです。（文法） ・教科書は「Ｎ１」についてですが，能力試験の問題との関係が少ないです。しかし，日本語能力を上げることができた。（文法） ・自分の日本語能力がまだ足りないと思う。私にとって授業はちょっと難しいです。（日本文化） ・ちょうどよかったと思う。（日本文化）
３．授業の進度 ちょうどよかった（42 人） よかった（18 人） ふつう（２人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.6	・適当な速さで学びやすいです。（読解Ａ） ・私たちのレベルに応じて進んでいる。（作文） ・時々，ある内容にかかった時間が長すぎます。学生の参加意欲に障るのではないかという心配があります。（日本文化） ・もっと速く進んでも大丈夫だと思います。（日本文化） ・ちょうどよくて，理解しやすい。（日本文化） ・授業の速さをだいたい自分で決めたので，ちょうどよかったと思います。（漢字） ・ちょっと速いと思います。（漢字）
４．教科書・プリント とてもよかった（42 人） よかった（18 人） ふつう（２人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.6	・わかりやすかった。（作文） ・論文や作文にとても役立っています。（作文） ・説明はとても詳しくて，いい教材だ。（文法） ・教材の文法は実際の試験の文法との関連があまり多くない。（文法） ・具体的な内容なので，普段気づかなかった自分のミスを直すことができました。とてもよかったです。（表現技術） ・内容は詳しい。特に敬語の教材はおもしろい。（表現技術） ・授業でもらった教材もよかったです。（日本文化） ・データや調査結果を含む教材はとてもわかりやすい。内容も豊かだと思う。（日本文化） ・今期は教科書をあまり使わず，興味深い文章を読んだので楽しかったです。（漢字） ・教科書にさまざまな分野があったので，私の語彙の範囲をのばせて，うれしいです。漢字が好きなので，もっとがんばりたいと思います。（漢字）

5．教え方 とてもよかった（50 人） よかった（12 人） ふつう（0 人） あまりよくなかった（0 人） ぜんぜんよくなかった（0 人）	4.8	・上手です。先生の授業に出ることができまして，うれしかったです。（読解Ａ） ・先生の授業はおもしろくて，読解の方法も詳しく説明しました。そして，自分が他の文章を読むときに，だんだん上手になりました。ありがとうございます。（読解Ｂ） ・わかりやすかった。（作文） ・すばらしい先生だと思います。すごく感謝しています。（作文） ・先生はとても真面目で，私たちの作文を修正してくれた。良い先生です。（作文） ・どこが問題なのか指摘してくれて，また，はげましてくれてありがとうございます。（会話） ・先生のおかげで，日本語が徐々に上達しています。すごく感謝しています。（会話） ・教科書だけじゃなく，いろいろな練習問題も出してくださって大変勉強になった。（文法） ・優しくて，学生の声を全て聞いて下さってよかった。（文法） ・文法は予習や復習をしなければならないので，かなり難しかったです。でも，分からないことがあって，質問すると，詳細に説明してくれるので大丈夫でした。（文法） ・先生はとても丁寧に教えてくださって，心から感謝しております。（表現技術） ・授業でいろいろな問題についてのディベートみたいな議論がとてもおもしろかったです。ありがとうございます。（日本文化） ・先生の視野が広くて，新しい考え，新しい視点を教えていただきました。（日本文化） ・一方的な授業方式ではなく，自由な雰囲気で自分の意見などを話せて本当によかったと思います。授業を結構休んでしまって申し訳ありません。（日本文化） ・先生の考え方や意見を聞くたび，いつも敬服してしまいます。（日本文化） ・深いテーマをわかりやすく提起してくださって，いつも勉強になりました。先生のおかげで，内容だけでなく，思考の方法などもいろいろ学びました。（日本文化） ・ビデオを放送し，その内容を説明しながら，授業をするやり方はとてもいいと思う。（日本文化） ・私が気がつかなかった漢字や言い回しの意味を指摘してもらったことがとても役立ったと思います。（漢字）
6．どのぐらい出席したか 80％～ 100％（54 人） 60％～ 80％（5 人） 40％～ 60％（3 人） 20％～ 40％（0 人） 0％～ 20％（0 人）	―	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（8 人） ・アルバイトがあったから（0 人） ・病気のため（3 人） ・その授業に興味がなかったから（0 人） ・その他（2 人）：天気・体調，寝坊した
7．予習・復習をしたか かなりした（25 人） すこしした（36 人） ぜんぜんしなかった（1 人）	―	・予習しないと，進められないかもしれない。（作文） ・この授業は論文を書く時に非常に助かりました。（作文） ・予習ができない。復習をした。（聴解） ・短期交換留学生にとって，留学期間が短くて，発表の機会も少ないですから，毎回の会話と発表の前に，よく準備しました。（会話） ・勉強した内容を復習するのは大切だ。（文法） ・なるべく全部の勉強したことを復習した。（文法） ・敬語の勉強だから，復習はとても大切だと思う。（表現技術） ・特に，予習や復習の必要がなかったと思います。（日本文化） ・授業で扱いきれない内容，補充知識，読み物は宿題にしていいと思います。学生の負担にならないように今までのおもしろい内容のものがよかったと思います。（日本文化）

		・授業の内容は，授業中に把握するように頑張った。（日本文化） ・復習しないと，すぐ忘れてしまいます。（漢字）

その他

・この授業が面白くて，たくさん学びました。読書の能力をのばせてうれしいです。今，自分の語学力にもっと自信があります。（読解Ａ）
・面白かったです。役に立つと思います。（読解Ｂ）
・読解Ｂの授業はちょうどよかったです。毎週の授業で今の日本の状況についてのテキストを読みましたので，役に立ったと思います。（読解Ｂ）
・ありがとうございました！（読解Ｂ）
・前は，なんとなく文章を読んで，自分の感覚だけでその意味がわかったのですが，この授業で正しくかつ速く読む技術を身につけたと思います。（読解Ｂ）
・またとりたい。（作文）
・作文の書き方がとても勉強になりました。（作文）
・このコースに感謝します。（作文）
・作文を書くときは重要なので，先生からいろいろな基礎知識を学んだ。来学期に先生の授業も受けたいと思う。（作文）
・ただ日本語能力試験を目指して問題を解くだけではなく，色々なジャンルの聴解ができて楽しかったし，すごく役に立ちました。（聴解）
・聴解の内容の中にいろいろな形式のスピーチを加えていただけませんか。例えば，卒業式の代表，弁論大会，送別会などのビデオ。（聴解）
・後期と前期どちらも会話の授業を取りましたけど，先生のおかげで話すのがしやすくなりました。（会話）
・良いコースだ。楽しかった。（会話）
・国であまり日本語を話す機会がなかったため，日本へ来てから最初はつらかったが，この授業で学んだことが助けになりました。日常生活にも役に立つと思います。（会話）
・能力試験の問題の中にある文法についての文法を加えたほうがもっといいと思う。（文法）
・授業で学んだ内容は日常生活に役に立つに違いありません。この知識を生かしたいです。（表現技術）
・先生のおかげで，いろいろ勉強になりました。感謝しています。（表現技術）
・この授業はよかった。たのしかった。（日本文化）
・この授業は，日本のアニメ，富山の観光地，草食男，日本憲法などいろいろな内容が含まれています。最初は「日本文化」ということは実際にどんなものか詳しく説明することはできませんでした。実は今もできません。でも，いろいろ日本の面白いことを見たあとで，日本人の価値観，日本人の生活はいくらか理解できるようになりました。（日本文化）
・あっという間に今学期の日本文化の授業も終わりました。先生はいつも私たちに個の成長・個としての考え方を培わせるように工夫しています。感謝の気持ちでいっぱいで，この留学の１年間，日本文化の授業を受けて本当によかったと思っています。これから，もう先生の講義を聞くことがなくなることは残念に思っています。私たち一人一人の存在を対等に尊重してくださって，ありがとうございました。（日本文化）
・この１年間，本当にありがとうございました。先生の授業が大好きです。（日本文化）
・日本文化の豊かさがよくわかった。これからも日本文化についてもっと勉強したいと思う。（日本文化）
・帰国のせいで，後期の授業に出られなくなるのが残念に思います。（漢字）
・漢字の授業の資料や先生の教え方は本当によかったです。全部の受けた知識は私たちの役に立ちます。（漢字）

表７　後期初級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者８人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
１．授業内容 とてもよかった（５人） よかった（２人） ふつう（１人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.5	・よかったけど，少し意見があります。勉強の中で，日本語の映画とかゲームとかあったら，もっとよくなると思います。（みんなの日本語）

2．授業のレベル とてもよかった（5人） よかった（3人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	
3．授業の進度 とてもよかった（5人） よかった（3人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	
4．教科書・プリント とてもよかった（5人） よかった（3人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	・別の教材（読み物，新聞，雑誌）が少し入ったらいいと思う。（みんなの日本語）
5．教え方 とてもよかった（6人） よかった（2人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.8	・先生は全員まじめだし，親切だし，勉強する中でとてもうれしかったです。（みんなの日本語）
6．どのぐらい出席したか 80%～100%（3人） 60%～80%（5人） 40%～60%（0人） 20%～40%（0人） 0%～20%（0人）	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（3人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（1人） ・その授業に興味がなかったから（0人） ・その他（3人）:実験があったから（2人),11月に来ました（1人）
7．予習・復習をしたか かなりした（1人） すこしした（4人） ぜんぜんしなかった（0人）	—	・楽しく勉強できたら，学ぶことや生活することなどに何よりいいです。（みんなの日本語）

その他

・私は本当に日本語を上手に話せるようになりたいですが，研究のために十分な時間が取れません。先生方の尽力に感謝しています。（生活日本語）
・今のままで，少しだけ直して授業したらいいと思います。先生方に感謝しています。これからもよろしくお願いします。（みんなの日本語）

表8　後期中級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者10人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1．授業内容 とてもよかった（6人） よかった（4人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	・とても役に立ちます。（聴解）

2．授業のレベル ちょうどよかった（3人） よかった（7人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.3	
3．授業の進度 ちょうどよかった（3人） よかった（5人） ふつう（2人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.1	
4．教科書・プリント とてもよかった（7人） よかった（2人） ふつう（1人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.6	
5．教え方 とてもよかった（8人） よかった（2人） ふつう（0人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）	4.8	
6．どのぐらい出席したか 80%～100%（4人） 60%～80%（0人） 40%～60%（2人） 20%～40%（4人） 0%～20%（0人）	—	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（8人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（1人） ・その授業に興味がなかったから（0人） ・その他（0人）
7．予習・復習をしたか かなりした（6人） すこしした（4人） ぜんぜんしなかった（0人）	—	

その他

- この授業は全部のレベルがいっしょに勉強しますから，先生はとても大変だと思います。そして，留学生のほうは少なくともこの漢字クラスは続けたいと思っています。日本語で論文を書くために漢字が大切です。先生，よろしくお願いします。（漢字）
- 先生のおかげです。今大体漢字の読み方が分かるようになってきました。（漢字）

表9　後期上級クラスの授業内容についてのアンケート結果（回答者51人）

質問項目（回答者数）	評点	自由記述
1．授業内容 とてもよかった（29人） よかった（21人） ふつう（1人） あまりよくなかった（0人） ぜんぜんよくなかった（0人）		・この授業を受ける前は読解が嫌いだったが，今は好きになりました。（読解A） ・教科書はさまざまな分野を扱うので，いい勉強になったと思います。（読解A） ・ちょうどいい。（読解A） ・授業は本当によかったです。12月に行われた試験で役に立ったと思います。（読解A）

		・この授業で読解の能力をのばすことができましたので，よかったと思います。（読解Ａ） ・授業がすばらしかった。（読解Ａ） ・論文の書き方が分かるようになりました。すごく役に立つと思います。（作文） ・毎週の授業で論文についての書き方を少しずつ教えていただいて，論文の進め方は大体分かりました。これまで習ったことはこれから論文を書くことに役立つと思います。（作文） ・レポートの書き方について詳しく教えてもらったので，修了論文を書くのに力になると思います。（作文） ・授業でした練習のおかげで聴解だけではなく，日本の文化や言語力を伸ばすことができたと思います。（聴解） ・いろいろなビデオがあって，多様な分野が扱われましたので，いい勉強になりました。（聴解） ・ビデオやテープを聞いて，日本語を聞き取る能力が向上できると思う。また内容的にも面白くて勉強になった。（聴解） ・外国人が日本語を勉強するのに力になります。（聴解） ・役に立つと思う。（会話） ・日本語の学習のほかにいろいろ考えさせられた。勉強になると思う。（会話） ・この授業を通して，自分の日本語能力が上達したように感じました。様々な話題をめぐって，皆と一緒に話し合ったり，議論したりして，他人の意見を受け取ることができました。要するに，この授業を取ったのはよかったです。先生，本当にありがとうございます。（会話）
	4.5	・勉強した表現の大部分を知っていましたが，難しい文法は忘れやすいものなので，もっと得意になったり，文法を覚えたりするために，文法の授業内容はとてもよかったと思います。（文法） ・日本人の先生に敬語などを習うのは本当によかったです。日本に来る前にずっと悩んでいた敬語の使い方がわかるようになってきたと感じます。本当にありがとうございました。（表現技術） ・いろいろな社会的なことばを勉強することができてよかったです。同性愛や草食男子などです。（日本文化） ・日本文化の授業で取り上げた話題はすごく面白いと思う。格差問題やジェンダーなど意味深いテーマについていろいろ話し合って考えされられて，はじめて違う立場から考え直すことができる。特に先生に質問された時，今まで考えなかったこともあるから，それは新しい知識を得るのにいいきっかけになると思う。（日本文化） ・日本だけの問題ではなく，世界的な問題までつながる内容だったと思う。（日本文化） ・毎回，授業のテーマは面白かったです。自分の意見を述べる機会も多かったので，自分の意見を述べたり，他の学生の意見を聞いたりしたのは，異文化を理解するためにいいと思います。（日本文化） ・授業内容は社会的なものですので，面白かったと思います。興味を持つようになりました。（日本文化） ・いろいろなテーマの中で，草食系男子のテーマがおもしろくて，関連映像をもっと見たかった。（日本文化）

		・この授業で社会文化や問題をめぐって皆と一緒に議論しました。知らず知らずのうちに問題意識を養いました。これは今後の人生にも役立ちます。また，ロシアや韓国の学生さんと一緒にこの授業を取って，国際的視野を広げました。いろいろ勉強になりました。本当によかったと思います。ありがとうございました。（日本文化） ・この授業で様々な分野の文章を読みながらたくさんの漢字を学んで，語彙の知識を広げられたと思います。読解力を養うために非常に役に立ちました。（漢字） ・日常生活の言葉も専門用語も勉強して，役に立つと思います。言葉の正しい使い方もいい勉強になりました。（漢字） ・この授業は，私にとって２回目に取った漢字の授業ですが，前回と今回，両方ともよかったです。（漢字）
２．授業のレベル ちょうどよかった（24 人） よかった（25 人） ふつう（２人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.4	・適当だと思われる。（読解Ａ） ・難しいところがあるにはありましたが，簡単すぎたら勉強にならないと思うので，授業で難しい点は確かに役に立ったと思います。（日本文化）
３．授業の進度 ちょうどよかった（24 人） よかった（25 人） ふつう（１人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（１人）	4.4	・慣れた。（読解Ａ） ・グループに分けてするのがよくなかったです。（漢字）
４．教科書・プリント とてもよかった（21 人） よかった（29 人） ふつう（１人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.4	・教科書はよかった。前に私は自分で勉強するために他の教科書を使っていたが，今の授業の教科書のほうがもっとよかった。（読解Ａ） ・内容が豊富でためになる。（読解Ａ） ・ビデオを通して日本の文化がもっと学べました。（聴解） ・見たビデオの内容がとてもおもしかったと思う。（聴解） ・内容は面白い。（会話） ・様々な映像資料を見せてもらってとてもよかったと思う。（日本文化）
５．教え方 とてもよかった（32 人） よかった（18 人） ふつう（１人） あまりよくなかった（０人） ぜんぜんよくなかった（０人）	4.6	・とてもやさしい先生です。いろいろ教えてくださってありがとう。（読解Ａ） ・教え方が上手な上に親切である。（読解Ａ） ・分からない文法や言葉の正しい使い方の説明は分かりやすかったです。そして，似ている表現の微妙な差も分かるようになりましたから，先生の教え方はとてもよかったと思います。（文法） ・いつもおもしろくて深くて社会的な話をするので，よかったです。（日本文化） ・グループごとに話す機会が多くてよかったと思う。（日本文化） ・先生の教え方はよかったですけど，グループごとに分けて授業をするところがよくなかったです。グループ練習はあまり役に立たなさそうです。（漢字） ・同じ教室でいろいろなレベルの学生がいたけれども，先生はよくがんばったと思います。（漢字）

6．どのぐらい出席したか 80%～100%（42人） 60%～80%（4人） 40%～60%（5人） 20%～40%（0人） 0%～20%（0人）	－	欠席した理由 ・専門の授業やゼミがあったから（6人） ・アルバイトがあったから（0人） ・病気のため（8人） ・その授業に興味がなかったから（0人） ・その他（3人）：寝坊（2人），卒業論文を書くため（1人）
7．予習・復習をしたか かなりした（23人） すこしした（26人） ぜんぜんしなかった（2人）	－	・できるだけ時間があったときに復習した。（読解A） ・日本語能力試験にいい練習でした。（読解A） ・予習が必要だ。（読解A） ・事前に話す材料を探すために，インターネットで色々調べて，よかったと思います。（会話）

その他

・私は忍耐強く，親切なよい先生のいるこのコースが好きです。（読解A）
・ありがとうございます。（聴解）
・ありがとうございます。（文法）
・ありがとうございました。（漢字）

表10　前期のカリキュラムについてのアンケート結果（回答者29人）

1．日本語課外補講をどこで知ったか（複数回答）	オリエンテーション出席者（19人）	・オリエンテーションの掲示を見た（5人） ・学部の教員にきいた（3人） ・留学生センターの教員にきいた（6人） ・友だちにきいた（4人） ・学部の教務課できいた（2人） ・学部の教員にきいた（2人）
	オリエンテーション欠席者（10人）	・留学生センターの教員にきいた（3人） ・友だちにきいた（3人） ・学部の教務課できいた（1人） ・よく知っている（1人）
2．授業科目数の希望	今のままでいい（22人）：初級3人，中級5人，上級14人 多くしてほしい（7人）： 初級（生活日本語）5人…週に1時間半では十分でない，2時間だといい， 初級（みんなの日本語）1人…「会話」を多くしてほしい， 上級1人…「日本文化」，「聴解」を多くしてほしい	
3．授業科目の希望	今のままでいい（24人）： 初級6人，中級4人，上級14人 新しい科目を作ってほしい（5人）： 初級（生活日本語）2人…会話，会話と習った文法の練習 中級2人…作文 上級1人…できれば留学生の就職のため，面接でよく使われる日本語の指導をしてもらえませんか？	
4．来期の授業時間帯の希望	専門の時間割がわからないのでこたえられない（17人）： 初級4人，中級3人，上級10人 午前1・2限（5人）：初級2人，中級1人，上級2人 午後3・4限（1人）：中級1人 いつでもいい（5人）：初級2人，上級3人 その他（1人）：初級1人…次の期は日本にいない。	

その他

・先生方はよかった。問題は，授業が他のキャンパスで行われていて，1週間に1回しかないことだ。このため，私にとっては少し速すぎた。（初級 生活日本語）

・コースはとてもよかったが，１度で日本語のルールなどすべて理解することはできない。（初級 生活日本語）
・10月からも参加したいが，今はまだスケジュールがわからない。日本に適応するのにとても重要だし，自分の研究や日本人学生との交流にとても役に立つ。（初級 生活日本語）
・日本語のクラスの後，たくさんの実験があったため，日本語の復習をする時間がなかった。クラスの中でもっと復習の時間があったらいいと思う。（初級 みんなの日本語）
・会話の時間が多くなったほうがいいです。（初級 みんなの日本語）
・テストの記録がほしいです。自分の評価をするためです。（中級）
・教科書Ｊ 301 とＪ 501 の練習がもっとあればいいと思います。（中級）
・ありがとうございました。（上級）
・日常生活で使う文法や論文やレポートを書くとき使う文法を教えてほしいです。（上級）
・今学期の授業は本当に面白くて，たくさん学びました。将来に役に立つと思っています。（上級）
・今，上級クラスに通っています。次の期もまた受けたいですが，受けられる授業科目がなさそうです。（上級）

表 11　後期のカリキュラムについてのアンケート結果（回答者 19 人）

1．日本語課外補講をどこで知ったか（複数回答）	オリエンテーション出席者（13 人）	•オリエンテーションの掲示を見た（６人） •学部の教員にきいた（４人） •留学生センターの教員にきいた（２人） •友だちにきいた（１人）
	オリエンテーション欠席者（６人）	•オリエンテーションの掲示を見た（１人） •学部の教員にきいた（１人） •留学生センターの教員にきいた（３人） •友だちにきいた（１人）
2．授業科目数の希望	今のままでいい（16 人）：初級５人，中級３人，上級８人 多くしてほしい（３人）：初級（生活日本語）１人，中級２人…文法，漢字	
3．授業科目の希望	今のままでいい（18 人）：初級６人，中級４人，上級８人 新しい科目を作ってほしい（０人） その他（１人）：中級１人…J301 はよかった。J501 はむずかしかったです。	
4．来期の授業時間帯の希望	専門の時間割がわからないのでこたえられない（７人）： 　初級２人，中級３人，上級２人 午前１・２限（１人）：上級１人 午後３・４限（０人） いつでもいい（５人）：初級２人，中級１人，上級２人 その他（６人）：初級２人…指導教員と相談してみます。晩でもいいと思う。 中級１人…帰国します。　上級３人…帰国します。	

その他
・前の学期も今学期もいろいろな授業科目を取って，私の日本語力の上達に大変重要な役割を果たしました。（上級）
・いろいろいい経験になりました。畳の歴史や和菓子の歴史などの映像を見たのがよかったです。（上級）
・よい勉強になりました。（上級）

まず，各クラスの授業内容に関するアンケート結果については，全体の７割が 4.5 点以上となっており，概ね良い評価を得ていると言ってよいだろう。

数は少なかったが，今後のコース改善に向けての検討材料とするために，「あまりよくなかった」，「全然よくなかった」という回答を詳しく見ておきたい。「よくなかった」という回答は，前期については初級クラスの授業進度と教科書，中級クラスの授業のレベルで，後期については上級クラスの授業進度で見られた。

前期の初級クラスの授業進度については,「生活日本語」で「あまりよくなかった」という回答者が２人いた。１人は遅すぎたこと，もう１人は速すぎたことを理由に挙げていた。前期の初級クラスの教科書については,「生活日本語」で「あまりよくなかった」という回答者が１人いた。その理由として「練習があまりよくなかった」ことを挙げていた。前期の中級クラスの授業のレベルについては,「漢字」で「あまりよくなかった」という回答者が１人いた。難しすぎたことを理由に挙げていた。後期の上級クラスの授業進度については,「漢字」で「全然よくなかった」という回答者が１人いた。その理由として「グループで分けてするのがよくなかった」と述べていた。「漢字」は中級クラスと上級クラスの合同授業のため，レベル別に２～４のグループに分けて，それぞれのレベルに応じた教材を用いて複式で授業を行っている。2012 年度は前期が 3 グループ, 後期が 4 グループで, グループ数が多かったため, 各グループへの対応が十分にできていなかった可能性が高く，そのため「グループで分けてするのがよくなかった」という意見が出たものと思われる。前期の「生活日本語」と「漢字」，後期の「漢字」は，いずれも受講者数がいつもの期と比べて多く，受講者間の習熟度の差が大きかった。このことが，レベルや授業進度へ不満を抱く学生がいた一番の要因だろう。

次に，カリキュラムに関するアンケート結果を見ると，これまでと同様，日本語課外補講に関する情報は, オリエンテーションの掲示を見て知ったという回答と, 教員や友人からきいたという回答が多かった。また，授業時間帯については,「専門の時間割がわからないのでこたえられない」という回答が最も多かったが, 午前と午後では, 午前を希望する学生のほうが多かった。授業科目数や内容については「今のままでいい」という回答がいずれの期も最も多かったが，前期，後期ともに初級クラス「生活日本語」で授業科目数を多くしてほしいという要望が見られた。

8　おわりに

日本語研修コースとの合同授業化によって，日本語課外補講の学生もより多くの科目を受講できるようになった。しかし，受講者の日本語の習熟度にはかなりばらつきが見られ，また，日本語課外補講の受講者の中には，専門の学習や研究が忙しくて継続的に参加できない学生もいるため，授業期間中に受講者間の習熟度の差が広がってしまうこともある。この問題を少しでも軽減するため，2013 年度からこれまで日本語研修コースの学生のみを対象としていた中級クラス「文法Ｃ」,「漢字」を，日本語課外補講の学生も受講できるように変更した。今後も他の日本語プログラムと連携しながら，より良いコース運営のありかたを探っていきたい。

総合日本語コース報告（2011 年 10 月～ 2012 年 9 月）

濱田美和

1　はじめに

総合日本語コースは，日本語・日本文化研修留学生のために，2004 年 10 月に開設した日本語プログラムである。富山大学の外国人留学生全体の中で，日本語・日本文化研修留学生の占める割合は低いため，本コースの授業科目はいずれも日本語課外補講上級クラスとの合同授業として開講している。2005 年 9 月に，初めて本コースの修了生を送り出し，2011 年 10 月に 8 期目の学生を迎えた。

以下, 2011 年度秋期（2011 年 10 月～ 2012 年 3 月）及び春期（2012 年 4 月～ 9 月）の総合日本語コースの実施状況について報告する。

2　受講学生

「2011 年度富山大学日本語・日本文化研修留学生プログラム」に参加した学生は 1 人で，その学生は秋期，春期ともに総合日本語コースを受講した。学生の出身国はロシアで，所属は人文学部である。なお, 2006 年 10 月より, 本学との学術交流協定に基づく短期留学生も総合日本語コースに参加可能となったが，短期留学生の受講状況等については別に報告する。(「短期留学生報告」参照)

総合日本語コースの授業科目として, 2011 年度は秋期と春期, 各期 9 科目を提供した。総合日本語コースの授業科目は必修科目ではないが，本学の日本語・日本文化研修留学生プログラムの修了要件の一つとして，学部や教養教育の授業科目及び総合日本語コースの授業科目の中から各期 8 科目以上の履修が義務づけられている。2011 年度の日本語・日本文化研修留学生の総合日本語コースの受講状況は，8 科目（秋期 4，春期 4）だった。

3　担当者

秋期，春期ともに，1 人のセンター専任教員（濱田美和），及び，6 人の謝金講師（遠藤祥子（秋期のみ），高畠智美，中河和子，永山香織（春期のみ），藤田佐和子，松岡裕見子，要門美規）が授業を担当した。いずれの期も，センター専任教員（濱田美和）がコーディネートを行った。

4　スケジュール

秋期は，2011 年 10 月 11 日（火）～ 2012 年 2 月 10 日（金）を授業期間とした。12 月 22 日（木）～ 1 月 4 日（水）は冬季休業, 1 月 13 日（金）は大学入試センター試験準備日のため, 休講とした。また, 曜日調整のため，1 月 10 日（火）は月曜日の授業を行った。

春期は, 2012 年 4 月 9 日（月）～ 7 月 26 日（木）を授業期間とした。曜日調整のため, 7 月 17 日（火）は月曜日の授業，7 月 25 日（水）は金曜日の授業を行った。

学期ごとに，コーディネーターがオリエンテーションを行った。オリエンテーションの実施日は，秋期は 2011 年 10 月 4 日（火），春期は 2012 年 4 月 4 日（水）である。オリエンテーションでは，学生に各授業科目の目的，理解達成目標，授業計画等を掲載した授業概要の冊子（授業概要は留学生センターホームページ上にも掲載，Web 版は日本語，英語，中国語の 3 言語での閲覧が可能）を渡し，コースの内容，各授業科目の詳細について説明を行った。春期のオリエンテーションでは，履修の際の参考となるよう，秋期の学業成績通知書を学生に渡している。履修登録は，授業開始後 1 週間以内に行い，履修登録を行った授業科目について学期終了時に成績を出すシステムとしている。

5　授業内容

総合日本語コースは，上級レベルの日本語課外補講の授業と合同で授業を行っているが，日本語課外補講は成績評価が必要でないため，授業科目によっては必要に応じ，総合日本語コースの受講者だけに別課題や試験を課すなどの方法を取っている。科目別の授業概要は表１の通りである。いずれの科目も秋期と春期で同一の授業概要（目的）となっているが，秋期に履修した科目を春期に続けて履修できるように，授業で取り上げるトピックやタスクの内容は期ごとに変えている。

表１　総合日本語コース授業概要（2011 年 10 月～ 2012 年 9 月）

授業科目名 （開講曜限）	担当	授業概要
秋期：読解Ａ２ 春期：読解Ａ１ （火曜４限）	藤田	日本人向けに書かれた文章の読解を通して，大学での学習や研究に必要とされる実践的な日本語読解能力を身につける。主教材として『生きた素材で学ぶ 中級から上級への日本語』（The Japan Times）を使用し，秋期は奇数ユニット，春期は偶数ユニットを学ぶ。この他，適宜テーマに合った生教材も取り入れ，中上級の表現，文法，語彙を習得する。
秋期：読解Ｂ２ （金曜２限） 春期：読解Ｂ１ （水曜２限）	遠藤 （秋期） 永山 （春期）	大学生活で出会う様々なテキストタイプの読み物を扱い，それぞれのタイプの読み物の特徴となる基本的な構造，文体等を把握し，それに慣れる手だてを見つける。特に留学生にとって必要な専門書，論文，教養書を読み解く技能を多面的に養うとともに，ブックレポートの際の基本的技術をマスターする。
秋期：文法２ 春期：文法１ （木曜４限）	要門	大学での学習，研究生活に必要な上級レベルの文法・表現（時を表す表現，接続表現，文末表現など）を，実践的な演習を通して習得する。日本語能力試験受験対策もあわせて行う。
秋期：作文２ 春期：作文１ （火曜３限）	松岡	論理的な文章を書くために必要な構成，表現，文法の基本を学び，学習した項目を用いてまとまった文章を書くことで，レポートや論文を書く力をつける。文章を書く練習はコンピュータを使って行い，ワープロ文書でのレポート作成方法も同時に学ぶ。
秋期：聴解２ 春期：聴解１ （木曜３限）	要門	大学で講義を聞いたり，演習や研究会に参加したりする際に必要な聴解力や，日常生活に必要な聴解力を身につけるために，様々な種類の聴解練習を行う。日本語の聴解教材とあわせて，テレビやラジオ，インターネットなど，様々なメディアを用いた練習を行う。
秋期：会話２ 春期：会話１ （火曜２限）	松岡	ロールプレイ等での会話練習を通して，大学生活や日常生活で出会う場面や状況での会話力を伸ばす。また，人や物，経験など様々なトピックについて日本語で的確に説明・描写する力，意見や感想を述べる力を養う。
秋期：漢字２ 春期：漢字１ （月曜３限）	高畠	日常生活や大学の講義で用いられている漢字・漢字語の意味を理解し，正しく読み，使う力を身につける。学生一人一人のレベルに応じたテキスト（『漢字 1000PLUS INTERMEDIATE KANJI BOOK』Vol.1, Vol.2（凡人社）等）を用い，大学での学習，研究生活に必要な漢字を習得する。
秋期：表現技術２ 春期：表現技術１ （月曜２限）	濱田	目上の人や初対面の人とやりとりする，あるいは，不特定多数の人に対して情報発信する際に必要となる，フォーマルな場で用いられる日本語の表現，日常的・実用的な文章の書き方，日本語での口頭発表のスキルを習得する。
秋期：日本文化２ 春期：日本文化１ （水曜３限）	中河	留学生として日本社会を分析する試み（情報の読みとり，整理など）を TV 番組，新聞・雑誌記事，自治体広報などの様々なメディアを用いてする。日本社会を読み解くための身の回りのリソースを活用する手だてを与え，そこから得たものを日本語で発信する力を養成する。

＊１限 8:45 ～ 10:15，２限 10:30 ～ 12:00，３限 13:00 ～ 14:30，４限 14:45 ～ 16:15

なお，学生による授業評価アンケートは，日本語課外補講上級クラスとまとめて実施した。授業評価アンケートの結果については，日本語課外補講報告の 7 授業評価を参照いただきたい。

6　成績評価

成績評価の方法については，成績評価の基準を授業概要に明記するとともに，オリエンテーションでも説明している。この基準をもとに授業担当者が，優（80 点～ 100 点），良（70 点～ 79 点），可（60 点～ 69 点），不可（59 点以下）で判定を行うが，総合日本語コースの授業科目については単位が出ないことになっている。学生への成績の通知は,9 月の日本語•日本文化研修留学生プログラムの修了時に，成績を記した履修証明書の発行を留学生センター長名で行っている。

7　学生からの評価

前述の通り，各授業科目に関する授業評価アンケートは日本語課外補講とまとめて実施し，これ以外に，総合日本語コース全体についてはインタビュー調査（実施日：2012 年 7 月 25 日（木），調査対象：2011 年度日本語・日本文化研修留学生（1 人））を行った。この結果を表 2 に示す。

表 2　総合日本語コース（日本語・日本文化研修留学生）インタビュー調査結果

1．総合日本語コース：科目について	・十分だった。
2．総合日本語コース：レベルについて	・大体ぴったりだったが,たまに予想外（簡単に思った）だった。でも，クラスにはいろいろなレベルの学生がいるので，仕方がないと思う。
3．自身の日本語力について	・漢字は読むのは大丈夫だが，書くのは最近パソコンを使うこともあって，自分の弱点なので，漢字の授業をとった。また，読解の授業で，効率的に文章を読むスキルがついたと思う。
4．富山での留学生活について	・今回が初めての日本での長期滞在だったが，自分で日本で生活できることがわかった。富山は交通が不便なのが問題だったが，それ以外は問題なかった。日本人学生も，先生に指摘されなかった日本語の間違いを教えてくれたり，親切だった。日本の大学は，母国の大学と違って，日本語の授業も専門の授業も，プリントを配ってそれに沿って説明するので，わかりやすかった。

コースの日本語の科目数については十分だとしているが，この学生は来日した時点から高い日本語力を有していたこともあり，コースのレベルについては簡単だと感じた授業もあったようである。自分自身の日本語力の伸びについては，特に読解スキルの伸びを実感していることがわかる。富山での留学生活を通して，自分一人で日本で生活できるという自信が得られたことに大変満足している様子だった。

8　おわりに

2011 年度秋期, 春期は従来通りのカリキュラムで, これまでと同様の科目数で開講することができた。これは，いずれの科目も日本語課外補講上級クラスとの合同授業であることから実現できている。総合日本語コースの受講者は人文・社会系の短期留学の学部学生が中心であるのに対して，日本語課外補講の受講者は理工系を専門とする学生もおり，また，大学院生や研究生として日本での滞在歴も長い留学生が多い。受講者が多いクラスでは、受講者間の日本語の習熟度の開きが問題になることもあるが，全体的には学生の多様化へとつながり，互いに良い刺激となっているようである。今後も授業担当者との連携を密にして，よりよいコースの提供に努めたい。

短期留学生報告（2011 年 10 月～ 2012 年 9 月）

加藤扶久美

1　はじめに

富山大学留学生センターでは，「富山大学短期留学生受入れ体制要項」に基づき，学術交流協定校からの短期留学生が学部および大学院で学習・研究が円滑に進められるように支援している。

富山大学に在籍した短期留学生は，2011 年度後期（2011 年 10 月～ 2012 年 3 月）が 13 人，2012 年度前期（2012 年 4 月～ 9 月）が 15 人であった。表 1 に所属別短期留学生数を，表 2 に出身大学別短期留学生数を示した。

表 1　所属別短期留学生数

	五福地区				高岡地区	合計
	人文	人発	経済	理工	芸文	
2011 年度後期	8	2	2	1	0	1 3
2012 年度前期	7	2	2	1	3	1 5

＊人文は人文学部と人文科学研究科，人発は人間発達科学部，経済は経済学部と経済学研究科，理工は理工学教育部，芸文は芸術文化学部を示す。

表 2　出身大学別短期留学生数

		2011 年度後期	2012 年度前期
韓国	国民大学校	5	5
	江原大学校経営大学	1	1
中国	山東大学大学院	1	1
	遼寧大学	1	1
	大連理工大学	1	1
	大連理工大学大学院	1	1
	中南林業科技大学経済学院	1	0
	西南交通大学大学院	0	1
	アモイ大学大学院	1	1
ロシア	ノヴォシビルスク大学	1	0
チェコ	プラハ美術工芸大学	0	3
	（合　計）	1 3	1 5

本稿では，表 1，表 2 に示した短期留学生について，2011 年度後期と 2012 年度前期の日本語プログラム（五福キャンパス）の受講状況について報告する。

2　日本語プログラム（五福キャンパス）の受講状況について

2．1　総合日本語コース

上級レベルの短期留学生は，総合日本語コースを受講できる。受講者は，2011 年度後期が 11 人，2012 年度前期が 9 人である。

表 3 に所属別「総合日本語コース」受講者数を示した。「総合日本語コース」の受講者は文系の人文学部，人文科学研究科，人間発達科学部，経済学部に在籍している。

表 3 所属別「総合日本語コース」受講者数

	人　文	人　発	経　済	合計
2011 年度後期	8	2	1	1 1
2012 年度前期	6	2	1	9

＊人文は人文学部と人文科学研究科，人発は人間発達科学部，経済は経済学部を示す。

表 4 - 1 と表 4 - 2 に，授業科目別「総合日本語コース」受講者数を示した。

表 4 - 1　授業科目別「総合日本語コース」受講者数

	読解 A2	読解 B2	作文 2	聴解 2	会話 2	漢字 2	日本文化 2	文法 2	表現技術 2	合計	平均受講コマ数
2011 年度後期（受講者：11 人）	1	3	1	1	3	7	4	3	3	2 6	2.4

表 4 - 2　授業科目別「総合日本語コース」受講者数

	読解 A1	読解 B1	作文 1	聴解 1	会話 1	漢字 1	日本文化 1	文法 1	表現技術 1	合計	平均受講コマ数
2012 年度前期（受講者：9 人）	0	0	1	2	3	0	4	4	3	1 7	1．9

平均受講コマ数は，2011 年度後期が 2.4 コマ，2012 年度前期が 1.9 コマである。受講者も受講コマ数も減少している。

2．2　日本語課外補講

初級・中級レベルの短期留学生は日本語課外補講を受講できる。受講者は，2011 年度後期が 2 人，2012 年度前期が 6 人である。

表 5 に所属別「日本語課外補講」受講者数を示した。2011 年度後期は，経済学部 1 人及び理工学教育部 1 人の計 2 人が，初級クラスを受講した。2012 年度前期は，経済学部 1 人が中級クラスを，経済学研究科 1 人，理工学教育部 1 人及び芸術文化学部 3 人の計 5 人が初級クラスを受講した。

高岡キャンパス芸術文化学部では，2012 年度前期に短期留学生が 3 人在籍し，シャトルバスを週 1 回利用して，五福キャンパスで週 2 回開講されている日本語課外補講初級「生活日本語」を 1 回だけ受講し，自習プリントで欠席分を補った。

表５　所属別「日本語課外補講」受講者数

	経済学部	経済学研究科	理工学教育部	芸術文化学部	合　計
2011 年度後期	1	0	1	0	2
2012 年度前期	1	1	1	3	6

２．３　成績評価

上級レベルの短期留学生については，受講した総合日本語コースの科目の成績評価がなされる（「総合日本語コース報告」参照）。学生への成績通知は，日本語教育部門短期留学生担当の加藤扶久美が「学業成績通知書」を作成し，学期末に個別に渡している。人文学部については，学部長名で，「富山大学人文学部短期（１年）留学生プログラム（受け入れ）」に基づく「履修証明書」が発行されている。

初級・中級レベルの短期留学生については，学部長からの依頼に応じて，受講した日本語課外補講の「受講記録」を提供している。

３　おわりに

学術交流協定に基づく短期留学生に対する留学生センターの支援は，日本語教育とスタディ・トリップである。日本語教育については，日本語課外補講を受講する初級・中級レベルの学生および総合日本語コースを受講する上級レベルの学生に対して，学部等との連携をとりながら支援体制をさらに充実させていきたい。

スタディ・トリップについては，全学向け「見学」として案内し，2011 年 11 月 11 日（金）に瑞龍寺・瑞泉寺・井波彫刻総合会館へ，2012 年 6 月 1 日（金）に富山市民俗民芸村へ出かけた。「留学生指導部門報告」で詳細が述べられるので，ここでは省略する。

日韓共同理工系学部留学生プログラム報告
（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

副島健治

1　はじめに

1998 年の日韓首脳会議における「21 世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ」の構築の合意に基づき，具体的な行動計画として「日韓共同理工系学部留学生事業」が立ち上げられた。この事業は，韓国で選抜された高校卒業生を，留学生として日本の国立大学の理工系学部が受け入れるプログラムである。1999 年に第一期生の募集が開始され 10 年間の第 1 次事業を経て，2009 年の募集から新たな第 2 次事業が行われている。富山大学はこれまでにこのプログラムに基づく留学生（以下,「日韓生」とする）をのべ 9 人受け入れた。現在 2 人の日韓生が富山大学に在学中である。

2　2012 年度の本事業による富山大学への学生配置について

富山大学の理・工学部の日韓生受け入れ可能数は各学科の合計で 16 人であったが，2012 年度の日韓生の新たな配置はなかった。

3　富山大学配置の在籍日韓生

これまでに，第 7 期生までが本学の理学部・工学部から巣立って行った。2012 年度の本プログラムの学部在籍者は第 10 期生 2 人（理学部 1 人，工学部 1 人）である。

4　日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング

4．1　構成員

本学における日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の受入れのための準備と円滑な遂行のために「日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキング」（以下,「日韓ＷＧ」とする）が 2001 年 4 月に立ち上げられ，メンバーの交代を経て現在に至っている。

2012 年度のメンバーは石川義和（理学部，日韓ＷＧの長），柿崎充（理学部），飴井賢治（工学部），加藤扶久美（留学生センター），副島健治（留学生センター），朝野真（学生支援グループ留学支援チーム）で構成されている。副島がコーディネーターを務めている。

4．2　日韓ＷＧのミーティング

2012 年度は以下のように，日韓ＷＧのミーティングが 3 回持たれ，日韓共同理工系学部留学生事業による日韓生の本学受入れ等について話し合われた。ミーティングにはＷＧのメンバーの他，必要に応じて留学生センター長，2011 年度および 2012 年度の「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」参加者も加わった。

○第 39 回（2012 年度第 1 回）日韓ＷＧミーティング
　日時・場所：2012 年 6 月 5 日（火）14：45　留学生センター長室
○第 40 回（2012 年度第 2 回）日韓ＷＧミーティング
　日時・場所：2012年 7 月 3 日（火）8：45　学生会館 2 階多目的室
○第 41 回（2012 年度第 3 回）日韓ＷＧミーティング
　日時・場所：2011年10月29日（月）16：30　学生会館 2 階多目的室

4．3　その他の活動

韓国ソウルで開催される「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」への参加者と日韓ＷＧのメンバーの一部で，出発直前の打ち合わせを行った。

○「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」準備・打ち合わせ（１回目）

日時・場所：2012年７月９日(月) 10：00　場所：留学生センター長室

○「日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア」準備・打ち合わせ（最終打ち合わせ）（２回目）

日時・場所：2012年８月22日(水) 10：00　場所：留学生センター長室

5　日韓共同理工系学部留学生事業協議会

本事業参加の国立大学の全国協議会が，2012年度は下記の日時・場所で開催された。本学からは飴井賢治（工学部），副島健治（留学生センター）が参加した。

日時：2012年６月11日(月) 13：00

場所：名古屋工業大学鶴舞キャンパス

6　日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア

本事業の筆記試験合格者とその保護者および関係者を対象として，下記の日時・場所でフェアが開催された。このフェアには，日本の34の国立大学が参加した（資料展示のみの５大学を含む）。

日時：2012年９月２日(日) ９：30～17：00

場所：大韓民国国立国際教育院（韓国Seoul特別市鐘路区東崇洞181）

午前中，全体に対する説明会と各参加大学による１分間スピーチ等が講堂で行われた後，午後，本事業の採用候補者を対象として各参加大学のブースにおいて説明が行われた。

本学からは柿﨑充（理工学研究部理学系），チャピ・ゲンツィ（理工学研究部工学系），横山雅彦（入試グループ）の３人が参加し，現地雇用の通訳に加え，韓国人学生２人（本学経済学部２年生と国民大学校からの交換留学生）もボランティアで手伝った。本学のブースへは７人の訪問があり，その他数名に資料配布を行った。

7　おわりに

本事業は10年計画で開始されたが，10年を経たのちも「第２次事業」として継続されている。この事業における日本の国立大学への日韓生の配置は，これまで通り，日韓生候補生が「志望調査」でどの大学を望んだかによりほぼ決定され，受け入れようとする日本の国立大学は，自大学が希望大学として選ばれるように努力しなければならないという形になっている。富山大学としても，日韓生が配置されるように努力したが，2012年度は配置が得られなかった。

日韓生の進学希望校は，ネームバリューのある日本の国立大学に集中しがちで，日韓生の配置はおのずとそのような大学に偏るという傾向は否めない。と同時に，学内において日韓共同理工系学部留学生事業への参加の是非が費用対効果の観点からも議論され始めていることとも相俟って，この事業による留学生の受入れを追求することに困難が少なくない現状である。富山大学として，どのように舵を切るかを決断するべき時期なのかもしれない。もし，全学的合意をもって，今後も日韓生の配置を目指すとするならば，大学としての国際戦略の観点から富山大学の将来像を考えた上で，全学をあげての取り組みが望まれると言える。

教養教育「日本語」「日本事情」報告
（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

加藤扶久美

1　はじめに

富山大学の学部における教養教育は，2005 年に富山大学（五福キャンパス），富山医科薬科大学（杉谷キャンパス）および高岡短期大学（高岡キャンパス）を再編・統合してからも，旧実施体制を引き継いだカリキュラムによりキャンパスごとに実施している。本稿では，五福キャンパスで実施されている教養教育「日本語」「日本事情」について報告する。

五福キャンパスの教養教育では，外国語科目として「日本語 A」「日本語 B」を，総合科目として「日本事情 I」「日本事情 II」「日本事情 III」を開講している。以下に，2012 年度の教養教育「日本語」「日本事情」の実施状況について述べる。

2　「日本語」

「日本語 A」は学部正規留学生 1 年生を対象とした科目で，前学期に「日本語 A1」を，後学期に「日本語 A2」を開講している。「日本語 B」は， 2 年生以上の学部正規留学生と各学部から受講申請願いの出された聴講生，科目等履修生を対象とした科目で，前学期に「日本語 B3」を，後学期に「日本語 B4」を開講している。

授業では中•上級用の日本語教材，視聴覚教材，新聞や雑誌の記事を使って，四技能（聞く，話す，読む，書く）の面でバランスのとれた日本語能力の養成と，大学での学習や研究活動に十分な日本語能力の養成を目的としている。主に文法・作文中心の授業と読解・聴解中心の授業がある。

2．1　2012 年度の実施状況

前学期は，文系クラス（人文学部・人間発達科学部・経済学部・芸術文化学部対象）の「日本語 A1」を火曜日 3 時限と金曜日 2 時限に各 1 コマ，理系クラス（理学部・工学部対象）の「日本語 A1」を火曜日 3 時限と金曜日 2 時限に各 1 コマ，合計 4 コマ開講した。「日本語 B3」は，主に経済学部の留学生を対象として火曜日 3 時限に 1 コマ，主に人文学部の留学生を対象として火曜日 4 時限に 1 コマ，全学部留学生を対象として水曜日 4 時限に 1 コマ，主に工学部の留学生を対象として木曜日 3 時限に 1 コマ，合計 4 コマ開講した。

後学期は，文系クラス（人文学部・人間発達科学部・経済学部・芸術文化学部対象）の「日本語 A2」を火曜日 3 時限と金曜日 2 時限に各 1 コマ，理系クラス（理学部・工学部対象）の「日本語 A2」を火曜日 3 時限と金曜日 2 時限に各 1 コマ，合計 4 コマ開講した。「日本語 B4」は，主に経済学部の留学生を対象として火曜日 3 時限に 1 コマ，全学部留学生を対象として火曜日 1 時限と水曜日 4 時限に各 1 コマ，合計 3 コマ開講した。

2．2　授業科目及び授業担当者

前学期は，「日本語 A1」を留学生センター専任教員 4 人（出原節子，加藤扶久美，後藤寛樹，副島健治）が担当し，「日本語 B3」を学部留学生専門教育教員 3 人（人文学部；山崎けい子，経済学部；村上剣十郎，工学部；飴井賢治）及び非常勤講師 1 人（横掘慶子）が担当した。

後学期は，「日本語 A2」をセンター専任教員 2 人（後藤寛樹，副島健治）及び学部留学生専門教育

教員 2 人（人文学部；山崎けい子，工学部；飴井賢治）が担当し，「日本語 B4」をセンター専任教員 1 人（濱田美和），経済学部留学生専門教育教員 1 人（村上剣十郎）及び非常勤講師 1 人（横掘慶子）が担当した。

2．3　受講者

前学期の受講者は，「日本語 A1」が 26 人であり，「日本語 B3」が火曜日 3 時限に 1 人，火曜日 4 時限に 0 人，水曜日 4 時限に 6 人，木曜日 3 時限に 2 人であった。

所属別の内訳は，「日本語 A1」が人文学部 1 年生 2 人，経済学部 1 年生 4 人，工学部 1 年生 19 人，芸術文化学部 1 年生 1 人であり，火曜日 3 時限の「日本語 B3」が工学部 2 年生 1 人であり，水曜日 4 時限の「日本語 B3」が人文学部 2 年生 1 人，工学部 2 年生 5 人であり，木曜日 3 時限の「日本語 B3」が工学部 2 年生 2 人である。

国•地域別の内訳は，「日本語 A1」が中国 14 人，マレーシア 7 人，ベトナム 4 人，モンゴル 1 人であり，火曜日 3 時限の「日本語 B3」がベトナム 1 人であり，水曜日 4 時限の「日本語 B3」が中国 4 人，ベトナム 2 人であり，木曜日 3 時限の「日本語 B3」が中国 1 人，ベトナム 1 人である。

後学期の受講者は，「日本語 A2」が 26 人であり，「日本語 B4」が火曜日 1 時限に 5 人，火曜日 3 時限に 2 人，水曜日 4 時限に 11 人であった。

所属別の内訳は，「日本語 A2」が人文学部 1 年生 2 人，経済学部 1 年生 4 人，工学部 1 年生 19 人，芸術文化学部 1 年生 1 人であり，火曜日 1 時限の「日本語 B4」が人文学部聴講生 1 人，人文学部科目等履修生 2 人，人間発達科学部聴講生 2 人であり，火曜日 3 時限の「日本語 B4」が工学部 2 年生 2 人であり，水曜日 4 時限の「日本語 B4」が工学部 2 年生 1 人，人文学部聴講生 5 人，人文学部科目等履修生 2 人，人間発達科学部聴講生 2 人，経済学部聴講生 1 人である。

また，国・地域別の内訳は，「日本語 A2」が中国 14 人，マレーシア 7 人，ベトナム 4 人，モンゴル 1 人であり，火曜日 1 時限の「日本語 B4」がロシア 3 人，中国 1 人，韓国 1 人であり，火曜日 3 時限の「日本語 B4」が中国 1 人，ベトナム 1 人であり，水曜日 4 時限の「日本語 B4」が中国 4 人，韓国 4 人，ロシア 2 人，ベトナム 1 人である。

3　「日本事情」

「日本事情」は学部正規留学生を対象とした科目で，1 年生後学期（第 2 期）に「日本事情Ⅰ」を，2 年生前学期（第 3 期）に「日本事情Ⅱ」を，2 年生後学期（第 4 期）に「日本事情Ⅲ」を開講している。3 科目とも，留学生センターの専任教員がコーディネートしている。

「日本事情Ⅰ」では，日本の文化や芸術についての理解を深めるとともに，母国の文化を客観的に見る目を養うこと，「日本事情Ⅱ」では，日本の自然，産業，社会，文化等についての理解を深め，日本と母国との比較ができるようになること，「日本事情Ⅲ」では，日本という「異文化」を理解し，異文化への対処の仕方を身につけ，さらに「異文化」を通して自文化への理解を深めることを目標としている。

3．1　2012 年度の実施状況

2012 年度前学期は，「日本事情Ⅱ」を木曜日 2 時限に，後学期は，「日本事情Ⅰ」を火曜日 5 時限に，「日本事情Ⅲ」を木曜日 5 時限に開講した。

2012 年度に 2 年生となった学生は，前学期開講の「日本事情Ⅱ」と後学期開講の「日本事情Ⅲ」を受けることになる。また，1 年生は後学期開講の「日本事情Ⅰ」を初めて受けることになる。

3．2　受講者

「日本事情Ⅰ」の受講者は 42 人であった。所属別の内訳は，人文学部 1 年生 2 人，経済学部 1 年生 4

人，工学部 1 年生 18 人，工学部 3 年生 5 人，人文学部聴講生 6 人，人文学部科目等履修生 3 人，人間発達科学部聴講生 3 人，経済学部聴講生 1 人である。また，国・地域別の内訳は，中国 18 人，マレーシア 10 人，韓国 6 人，ベトナム 4 人，ロシア 3 人，モンゴル 1 人である。

「日本事情Ⅱ」の受講者は 42 人であった。所属別の内訳は，人文学部 2 年生 6 人，人間発達科学部 2 年生 2 人，経済学部 2 年生 5 人，理学部 3 年生 1 人，工学部 2 年生 18 人，人文学部聴講生 5 人，人文学部科目等履修生 3 人，人間発達科学部聴講生 2 人である。また，国・地域別の内訳は，中国 23 人，マレーシア 7 人，韓国 6 人，ベトナム 4 人，ロシア 1 人，ブラジル 1 人である。

「日本事情Ⅲ」の受講者は 33 人であった。所属別の内訳は，人文学部 2 年生 3 人，人間発達科学部 2 年生 1 人，経済学部 2 年生 4 人，工学部 2 年生 13 人，工学部 3 年生 5 人，人文学部聴講生 2 人，人文学部科目等履修生 2 人，人間発達科学部聴講生 2 人，経済学部聴講生 1 人である。また，国・地域別の内訳は，マレーシア 13 人，中国 9 人，韓国 6 人，ベトナム 4 人，ロシア 1 人である。

3．3　コーディネーターと授業担当者

前学期は，「日本事情Ⅱ」のコーディネーターを加藤扶久美が担当し，学部教員 8 人（青地正史，飴井賢治，石原外美，柿崎充，小松美英子，竹内章，中島淑恵，山田茂）と非常勤講師 1 人（稲本裕）と加藤扶久美が授業を担当した。

後学期は，「日本事情Ⅰ」のコーディネーターを濱田美和が担当し，学部教員 6 人（鈴木景二，隅敦，立川健治，鼓みどり，林夏生，二村文人）と非常勤講師 4 人（桂博子，三遊亭良楽，清水星栄，経澤菁汀）と濱田美和が授業を担当した。

「日本事情Ⅲ」は，出原節子がコーディネーターを担当し，学部教員 8 人（大熊敏之，神川康子，久保田真功，呉羽長，島添貴美子，鼓みどり，堀田裕弘，水内豊和）と非常勤講師 1 人（彼谷環）と出原節子が授業を担当した。

3．4　授業内容

以下のようなテーマで授業がなされた。

「日本事情Ⅰ」

桂　　博子（非常勤講師）	「日本の音楽と民謡」
三遊亭良楽（非常勤講師）	「落語」
清水　星栄（非常勤講師）	「華道」
鈴木　景二（人文学部）	「富山の歴史と観光」
隅　　敦（人間発達科学部）	「日本から世界へ － Visual Culture の広がり」
立川　健治（人文学部）	「日本人の身体所作」
鼓　みどり（人間発達科学部）	「日本の美術」
経澤　菁汀（非常勤講師）	「書道」
林　　夏生（人文学部）	「日本社会と漫画・アニメ」
二村　文人（人文学部）	「日本の伝統芸能」
濱田　美和（留学生センター）	「情報収集・レポート作成」「ポスター作成・発表」

「日本事情Ⅱ」

青地　正史（経済学部）	「日本の円高について」
飴井　賢治（工学部）	「日本のパワーエレクトロニクス技術について」
石原　外美（工学部）	「日本における最近の技術者倫理教育」
稲本　　裕（非常勤講師）	「漆ジャパンと各国の漆事情」「木育と食育」

柿崎　　充（理学部）　　「日本の素粒子物理学への貢献」
小松美英子（大学院理工学部研究部）　「日本に生息するマリンペスト」
竹内　　章（理学部）　　「日本の地殻変動と海底資源」
中島　淑恵（人文学部）　　「小泉八雲と日本の自然」
山田　　茂（工学部）　　「ヨーロッパ，アメリカ，日本から中国へ移る機械産業の歴史」
加藤扶久美（留学生センター）　「異文化理解」「異文化体験発表」

「日本事情Ⅲ」
大熊　敏之（芸術文化学部）　　「日本の造型」
彼谷　　環　（非常勤講師）　　「日本の法律 : 人権状況と絡めて」
神川　康子（人間発達科学部）　「日本のすまい・住宅事情」
久保田真功（人間発達科学部）　「日本の教育事情」
呉羽　　長（人文学部）　　「日本文学」
島添貴美子（芸術文化学部）　　「世界の音の文化／日本の音の文化」
鼓　みどり（人間発達科学部）　「日本の美術」
堀田　裕弘（工学部）　　「日本における情報通信事情」
水内　豊和（人間発達科学部）　「日本の障害児教育」
出原　節子（留学生センター）　「異文化コミュニケーション」

4　おわりに

五福キャンパスの教養教育においては，「日本語」の授業担当者は，留学生センター教員５人と学部留学生専門教育担当教員（人文，経済，工）３人の計８人と，長年大学の日本語教育に関わっている非常勤講師１人であり，今年度から工学部の留学生専門教育担当が新しく飴井賢治教員になったが，皆，日々留学生の指導に携わりながら，何か問題があれば，互いに連携して対処している。

入学して１年目の学部正規留学生を対象とした「日本語 A」では，授業を通して生活上の指導・助言ができるように，また，２年生以上の留学生を対象とした「日本語 B」では，学部の専門性を考慮したアドバイスができるように，担当教員が連携して，きめ細かい指導を行っている。

また，「日本事情」についても，センター専任教員３人がコーディネートして，学部教員等との連絡・調整をしながら授業を進めている。

今年度は高岡キャンパスの芸術文化学部１年生が，前期だけ五福キャンパス開講の「日本語 A1」（火３）を受講して単位を取得した。高岡キャンパスの学生の日本語受講については，今後の継続課題として議論が望まれる。

日本語教育部門活動報告１－日本語相談－
（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

濱田美和

1　はじめに

日本語教育部門では，2003 年度から毎週水曜日の昼休みの時間帯を利用して，日本語教育部門の専任教員が留学生からの日本語に関する相談や質問に応じる「日本語相談」を行っている。これは，日本語に関する問題であれば，日本語の授業内容とは関係なく，アポイントなしで相談できるというシステムで，2012 年度も，授業レポートの添削，進学・就職に関する日本語の文章のチェック，弁論大会出場のための練習，各種書類の内容確認など，多岐にわたる目的での利用があった。

以下，2012 年度の「日本語相談」の実施状況について報告する。

2　「日本語相談」の概要

「日本語相談」の概要は次の通りである。

1）実施場所

留学生センター 1 階の談話室において実施した。

2）実施期間及び実施日時

毎週水曜日の昼休み 12 時から 13 時までの時間帯を利用して実施した。2012 年度は，前期は 2012 年 4 月 25 日 (水) から 7 月 18 日 (水) までの全 12 回，後期は 10 月 24 日 (水) から冬季休業をはさんで 2013 年 1 月 30 日 (水) までの全 12 回，１年間に計 24 回実施した。なお，夏季休業期間は特定の実施日を設けなかったが，留学生から希望があった場合に相談に応じた。

3）担当者

日本語教育部門の教員 4 人 (加藤扶久美，副島健治，濱田美和，後藤寛樹) が，1 回ごとに交代して相談にあたった。

3　「日本語相談」の実施状況

3．1　「日本語相談」への来談者

前期，夏季休業期間，後期それぞれの来談者数を，来談者の所属別に見ると，表 1 のようになる。

表 1　2012 年度「日本語相談」来談者数（単位：人）

	五福地区					高岡地区	計
	人文	人発	経済	理工	留セ	芸文	
前　　期	3	6	6	7	0	5	27
夏季休業期間	0	8	1	2	0	0	11
後　　期	7	1	3	6	4	0	21
計	10	15	10	15	4	5	59

＊人文は人文学部と人文科学研究科，人発は人間発達科学部，経済は経済学部と経済学研究科，理工は理学部と工学部と理工学教育部と生命融合科学教育部，留セは留学生センター，芸文は芸術文化学部を示す。

前期は，高岡地区からの相談者がいるが，この学生たちは五福地区の日本語課外補講を受講するために留学生センターに来たときに，日本語相談を利用してかなの練習を行った。また，工学部の留学生担当教員からの依頼を受け，日本語の作文の力が十分でない学部生のために，日本語相談の時間を利用して作文の指導を継続的に行った。夏季休業期間中は，弁論大会に出場する学生たちの利用が中心だった。後期は，10 月に来日したばかりの短期留学生，教員研修生，研究生の利用が半数近くを占めた。

3．2　相談の内容

前期，夏季休業期間，後期それぞれの相談件数を，相談内容別に見ると，表 2 のようになる。

表 2　2012 年度「日本語相談」相談件数（単位：件）

	日本語の発音・表記・文法・作文等に関する質問や練習	大学の授業等に関連した相談（レポート添削等）	学外での活動に関連した相談（スピーチ原稿の添削や練習）	各種書類や掲示物に関する相談（書類の内容確認や添削等）	進学や就職活動に関連した相談（作文添削や面接練習等）	日本語の学習方法や日本語クラスの受講に関する相談	計
前期	14	9	2	2	0	1	28
夏季休業期間	4	0	6	0	1	0	11
後期	7	8	1	1	2	2	21
計	25	17	9	3	3	3	60*

＊1 人の相談者から複数の相談を受ける場合があるため，来談者数よりも多くなっている。

「日本語の発音・表記・文法・作文等に関する質問や練習」が最も多く，2 番目が「大学の授業等に関連した相談（レポート添削等)」，3 番目が「学外での活動に関連した相談（スピーチ原稿の添削や練習)」で，この 3 つで，全体の 8 割以上を占める。ここ数年，「日本語学習に関する質問や練習」と「レポート等の添削」での利用が中心となっている。

4　担当教員による打合せ

「日本語相談」は，日本語教育部門の専任教員が 1 回ごとに交代して実施している。2012 年度は濱田がとりまとめを行い，他の教員と連携を取りながら実施した。担当教員による打合せは，各学期の開始前に行った。その内容は，「日本語相談」の実施日及び担当者の決定，実施のための広報活動等の業務分担である。学期中の引き継ぎは日誌を用いて行った。

5　おわりに

「日本語相談」は 2012 年度で 10 年目を迎えた。最初の 5 年間は，大学院入試科目「小論文」の練習のために毎週継続的に利用する学生が多かったが，その後は「日本語学習に関する質問や練習」と「レポート等の添削」での利用者が中心となり，毎週継続的に利用する学生が少なくなっている。そのため，来談者が多い日と全くいない日があるなどの問題も指摘されるようになった。現状においてどのような形での支援が最も効果的なのかを探りながら，留学生の日本語学習の支援体制を整備していきたい。

日本語教育部門活動報告 2 －日本語学習支援サイト RAICHO －（2012 年 4 月～ 2013 年 3 月）

後藤寛樹

1　日本語学習支援サイト RAICHO の概要

「日本語学習支援サイト RAICHO」（以下，「RAICHO サイト」とする，http://tisc.isc.u-toyama.ac.jp/）は，富山大学に在籍する留学生の日本語学習を総合的に支援するための一つの手段として，留学生センター日本語教育部門が開設・運営しているサイトである。サイト開設のねらいは，富山大学で学ぶ留学生の学習を支援するという点にあり，ターゲットを富山大学の留学生に限定することで，サイトに掲載する情報を絞り込み，利用者が必要な情報に容易にアクセスできるようにするという点に重点をおいている（ただし，サイト自体は学内外を問わず利用できる）。インターネットはわれわれの生活に深く浸透し，インターネットを介してありとあらゆる情報にアクセスできるようになったが，インターネット上には膨大な量の情報があり，求める情報を効率よく探し出すためには，この膨大な量の情報の中から必要とするものを取捨選択する能力が必要とされる。しかし，必要な情報の取捨選択はそれほど容易ではなく，留学生が日本語学習のリソースをインターネット上に求めたとしても，自己の学習に有益な情報をうまく選ぶことができなければ，リソースを学習に効率的に生かすことはできない。そこで，本学で学ぶ留学生に必要な情報を一括して提供する Web サイトがあれば，留学生にとっての利便性が高くなるだろうというねらいのもとで開設・運営されているのが，RAICHO サイトである。本稿では，RAICHO サイトの 2012 年度の整備状況について報告し，今後の展望を述べる。

2　2012 年度 RAICHO サイト整備状況および利用状況

2012 年度には，「日本語自己学習」で提供していた助詞，動詞の活用の問題構成を再検討し，初級クラスでメインテキストとして用いている『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）に準拠した形で，テキストの進度に合わせて語彙や活用・助詞などの基本文法の確認練習ができるような問題群を作成した。また，近年，スマートフォンが普及し，携帯電話を所持している留学生のほとんどがスマートフォンを利用するようになっている。そして，スマートフォンで「日本語自己学習」にアクセスしたいという声も聞かれるようになってきた。これまでの「日本語自己学習」コンテンツは，コンピュータからのアクセスを前提としてデザインされていたため，スマートフォンでは閲覧しにくい状況にあった。そこで，新たにスマートフォン用のページデザインを作成し，スマートフォンからでも気軽に利用できるように整備した。

RAICHO サイトの利用状況については，引き続き学内外から多数の利用の声が寄せられている。特に，「日本語自己学習」コンテンツはユーザ登録をすることによって，利用者が自身の解答履歴を参照できるようになっているが，2012 年 4 月から 2013 年 3 月までの 1 年間に，新たに 488 人がユーザ登録をしてこのコンテンツを利用している。

3　今後の展望

RAICHO サイトは開設から 10 年が経過した。昨年度の報告で，スマートフォンの普及に伴う RAICHO サイトの課題について述べたが，今年度はスマートフォンからの閲覧も不自由なく行えるよう，「日本語自己学習」のコンテンツ表示デザインにスマートフォン専用のデザインを追加した。しかし，コンテンツすべてがスマートフォンからでも利用できるようになったわけではなく，ひらがな・カ

タカナの学習コンテンツなどはFlash動画を使用しているため，これに対応していないスマートフォンでは表示ができない。サイトで提供するコンテンツを充実させるとともに，こうした点の改善も進めていかなければならない。また，コンテンツの中身については，2節で述べた問題群の作成により，かなり充実した練習問題が提供されるようになった。しかし一方で，漢字のコンテンツについては，授業で使用するテキストが以前と異なっているため，「日本語自己学習」コンテンツで提供されているのは，クラスで使用している漢字のテキストに準拠した問題ではない。教科書が変わるたびに問題を開発していくのは作業としても大変ではあるが，できるだけセンターの日本語プログラムで使用している教科書に準拠した問題を開発していく必要がある。

また，「情報提供」のコンテンツの充実化も課題である。昨年度の報告でも述べたが，スマートフォンやタブレットPCの普及により，これまで以上に様々なツールやリソースを日本語学習に利用できるようになっている。しかし，こうしたツールやリソースの存在を知らなければ，あるいは知っていても活用の幅に気づいていなければ，効果的な利用にはつながっていかない。留学生の日本語学習を間接的に支援するために，各種ツールやリソースの活用のヒントや活用例を掲載するなどして，「情報提供」のページの充実化を進めていく必要があるだろう。

富山大学は3つのキャンパスからなる総合大学であるが，留学生数の違いや留学生の専門分野の違い，キャンパスごとの事情などもあり，3つのキャンパスで同内容の日本語支援を行っていくのは難しいという現状がある。できる限り，同内容の日本語支援を行っていくのが望ましい形ではあるが，一方で，RAICHOサイトを利用することで，各キャンパスで行われる授業では補いきれない部分についての支援を行うことも可能である。ただし，このサイトの管理・運営を担っているのは五福キャンパスにいる留学生センター専任教員であり，他のキャンパスの実情に即したコンテンツの開発は行えていない。特に杉谷キャンパスには日本語・日本事情担当の専任教員もいるので，うまく協力・連携することができれば，このサイトを利用した留学生の日本語学習支援が強化されるのではないか。

今後も，インターネットを利用したサイトの機能や特長を生かして，留学生の日本語学習支援をさらに進めていけるよう，RAICHOサイトの充実をはかっていきたい。

3．留学生指導部門報告
（2012年4月～2013年3月）

出原節子

1　はじめに

留学生指導部門では，部門担当教員（出原）が以下のような業務を行っている。

1．外国人留学生に対する修学・研究上，生活上及び異文化適応上の指導・助言
2．異文化教育及び日本語教育
3．留学生と日本人学生の相互理解，コミュニケーション能力を高めるための活動
4．日本での留学生活に関わる各種情報の提供，地域交流団体等が主催する行事の案内
5．海外留学に関する情報の提供及び留学相談

小稿では，2012年度に留学生指導部門が行った主な活動について，報告する。

2　指導・助言

以下のように面談時間（OH）を設けたが，面談時間以外にも訪ねて来る学生がいるので，時間のある限り対応している。

＜2012年度前期面談時間＞

	1限	2限	3限	4限	5限
月	OH	OH	OH	OH	OH
火	OH				OH
水	OH	OH			
木	OH	OH	OH	OH	OH
金	OH	OH	OH	OH	

＜2012年度後期面談時間＞

	1限	2限	3限	4限	5限
月	OH	OH	OH	OH	OH
火	OH	OH	OH	OH	OH
水	OH	OH			
木	OH	OH			
金	OH	OH	OH	OH	

指導部門に寄せられた様々な問題に対しては，留学生センター日本語教育部門教員及び非常勤講師をはじめ，各学部，留学支援チーム，学生支援グループ等と連携して対処した。

（1）留学生に対する指導・助言

留学生の日常生活に関する相談（ex: △△を修理したい。安い○○を買いたい。××へ行きたい。等）は，留学生センター事務室の事務補佐職員が対応しており，指導部門教員の手を煩わせることなく解決している。それらの相談件数は以下の件数には含まれていない。

件数：　51件

（2）日本人学生に対する指導・助言

件数：　4件

（3）その他（富山大学教職員，卒業生，地域住民等からの相談）

件数：　3件

3　異文化理解・交流

（1）「日本事情」

日本語研修コース「日本事情」の授業に，学内から募集した「国際交流学生ボランティア」に参加してもらい，留学生との合同授業を行っている。この授業は，①日本語能力の向上，②日本人学生による留学生支援，③異文化理解，④自文化理解，⑤異文化交流活動の拠点化，を目的としている。

（2）見学

前期と後期に原則各１回，日本文化への理解を深めるため，見学（日本語研修コースフィールドトリップ／短期留学生スタディトリップ）を実施している。それと同時に「富山大学短期留学生受入れ体制要項」に基づく短期留学生のためのスタディトリップも実施している。見学には学部生や研究生等も希望があれば参加を認めている。日本人学生も付き添いとして参加を認め，異文化交流の場としている。

・前期フィールドトリップ＆スタディトリップ

＜実施日・見学場所＞

2012 年 6 月 1 日（金）

五百羅漢・富山市民俗民芸村

＜参加者数＞

留学生	11人
センター教員（付添）	2 人

・後期フィールドトリップ＆スタディトリップ

＜実施日・見学場所＞

2012 年 11 月 30 日（金）

五百羅漢・富山市民俗民芸村

＜参加者数＞

留学生	10人
センター教員（付添）	2 人

（3）ホームステイ

公益財団法人（旧財団法人）とやま国際センターの斡旋により，1999 年度後期より留学生センター所属の文部科学省国費留学生（予備教育生）に対し１泊２日のホームステイ・プログラムを実施している。

＜実施日・参加者数＞

2013 年 1 月 26 日（土）～ 27 日（日）　2 人（27 期生）

（4）ホームビジット

日本語研修コースには，文部科学省からの国費留学生だけでなく，学内公募による受講生を受け入れている。「留学生センター在籍者ホームステイ実施要項」制定時には，学内公募の学生がいなかったため，これらの学生はホームステイ・プログラムの対象者に含まれていない。そこで，富山市民国際交流協会の協力により，『日本語研修コース受講学生』を対象とした１日家庭訪問プログラムを 2002 年度前期より実施している。

＜実施日・参加者数＞

2012 年 7 月 21 日（土）　　3 人（26 期生）

2013 年 1 月 26 日（土）　　3 人（27 期生）

（5）異文化交流パーティー

留学生と日本人学生の交流を目的としたパーティーを春と秋の年 2 回，留学生センターの談話室で開催し，200 円の参加費で，スナック菓子と飲物を用意している。

＜開催日時・参加者数＞

2012年 5 月23日（水）17：00 ～　　66 人

2012年11月14日（水）17：00 ～　　43 人

（6）おしゃべりタイム

毎週木曜日の 12：00 ～ 13：00 に留学生センターの談話室で「おしゃべりタイム」を開催し，留学生と日本人学生が昼食を食べながら語り合う時間を設けているが，木曜日以外にも留学生と日本人学生が談笑したり，一緒に勉強したりする姿がみられる。

（7）異文化理解教育等への協力

県内の教育機関で行われている異文化理解教育や市・町・村主催の国際交流行事，地域の各種団体等が主催する行事等に参加依頼・協力依頼があった場合は，その要請に応じて，都合のつく留学生に参加協力を依頼している。今年度は留学生指導部門に対する派遣依頼はなかった。

4　各種情報の提供

全学の留学生を対象に，留学生活に関わる情報を提供し，地域の交流団体等が主催する行事等の案内を留学生センターの談話室に掲示している。

国際交流団体および行事内容については「外国人留学生関係行事一覧」を参照していただきたい。

5　オリエンテーション

（1）学部新入留学生のためのオリエンテーション

学部教職員や学生支援グループ等の協力により，全学のオリエンテーションとは別に，学部新入留学生を対象としたオリエンテーションを実施している。

＜実施日時＞

2012 年 4 月 3 日（火）9：30 ～ 13：45

＜参加者＞

学部新入留学生　　26 人（内 3 人欠席）

センター教員

学部教職員

学務部職員（留学支援チーム・学生支援チーム）

＜オリエンテーションの内容＞

・ガイダンス－ 1　授業料，授業料免除，奨学金等についての説明

－ 2　留学生センターからの注意事項（危機管理等）

－ 3　学部教職員からの注意事項（大学生活の心得，除籍・懲戒・退学・休学，チューター制度，アルバイト等）

・懇親会（昼食）

＊予定していたキャンパスツアーは強風のため，キャンセルとなった。

(2) 新規来日非正規生（研究生，科目等履修生，特別聴講学生）のためのオリエンテーション

＜実施日・参加者数＞

2012年 4 月 9 日（月）　　7 人

2012年10月10日（水）　　15人

＜オリエンテーションの内容＞

・学内・学外における諸手続きについて

・留学生センターについて

・学生生活について

・留意事項・危機管理について

6　海外留学相談

留学生センターの 1 階に「留学情報資料室」を設置して海外留学を希望する学生に情報の提供を行うとともに，「異文化理解」の観点から留学の相談にのっている。

面談回数：	29 回
相談者数：	22 人
（内訳）	
人文学部	7 人
人間発達科学部	2 人
経済学部	7 人
理学部	2 人
工学部	2 人
芸術文化学部	1 人
大学院（工）	1 人
計	22 人

希望留学先：英語圏諸国（カナダ，アメリカ，イギリス等），台湾，中国，韓国

7　その他

(1) 富山大学留学生教育指導連絡会議

2002 年 9 月 24 日に「富山大学留学生指導連絡会議要項」を制定し，以来留学生指導等の充実を図るために連絡会議を開催し，留学生に関する様々な問題について各学部の教員及び事務との情報交換・意見交換を行って来たが，2006 年 7 月 21 日に「富山大学留学生教育指導連絡会議」として再スタートし，引き続き留学生の教育及び生活指導等の充実を図ることを目的に，各学部や留学支援室と連携して会議を開催して情報・意見の交換，収集を行った。2009 年度からは，より緊密な連携のため，教員だけでなく各学部の事務職員も会議に参加している。

＜開催日＞

2012 年 9 月 24 日（月）　14：00 ～ 14：47

8　おわりに

富山大学には 330 人（2012 年 5 月現在）の外国人留学生が在籍している。

富山県では，県内在住の大学等の私費留学生に対し，県から「富山県国際交流奨学金」が支給されている。また，国民健康保険料の助成もおこなわれている。さらに，2002 年 10 月より公益財団法人とやま国際センターが，富山県，富山県婦翔会，留学生を受け入れる富山県内の大学・短大・高専，宅地建物取引業の団体などの連携協力のもとに，「留学生住宅確保支援制度」を実施している。こうした地域の人々の暖かい支援により，留学生がより安定した環境の中で安心して留学生活を送ることができるようになり，大変感謝している。

これからも地域との緊密な連携をはかり，留学生支援体制の充実のため一層の努力をしていきたい。

４．留学生センター関連行事等

２０１２年

４月２日(月)	平成24年度前期日本語プログラム講師ミーティング
４月３日(火)	平成24年度外国人留学生学部新入生オリエンテーション
４月４日(水)	総合日本語コースオリエンテーション（日本語・日本文化研修留学生）
	総合日本語コースオリエンテーション（短期留学生）
	第26期日本語研修コース学内公募選考（試験・面接）
４月５日(木)	第26期日本語研修コース（学内公募受講生）オリエンテーション
	日本語課外補講オリエンテーション
４月６日(金)	学部オリエンテーション（新入生に対する「留学生センター」概要説明）
	第26期日本語研修コース開講式
	学部新入留学生のための時間割作成オリエンテーション
４月９日(月)	新規来日留学生（非正規生）のためのオリエンテーション
４月18日(水)	国際交流学生ボランティア説明会
５月15日(火)	平成24年度第１回留学生センター運営委員会
５月23日(水)	留学生と日本人学生との異文化交流パーティー
６月１日(金)	見学（日本語研修コース：フィールドトリップ／短期留学生：スタディトリップ）
６月５日(火)	第１回日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキングミーティング
６月11日(月)	平成24年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会
６月19日(火)	日本語研修コース「私の国」発表会
６月20日(水)	平成24年度富山県留学生等交流推進会議総会・留学生との座談会
６月29日(金)	平成24年度第２回留学生センター運営委員会
７月３日(火)	第２回日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキングミーティング
７月21日(土)	ホームビジット
８月２日(木)	日本語研修コーススピーチ発表会（「私の専門」発表会）
９月２日(日)	平成24年度日韓共同理工系学部留学生事業推進フェア
９月14日(金)	インターンシップ学生の留学生センター見学・研修
９月24日(月)	平成24年度第１回富山大学留学生教育指導連絡会議
９月28日(金)	第26期日本語研修コース修了式
	平成24年度後期日本語プログラム講師ミーティング
10月２日(火)	総合日本語コースオリエンテーション（日本語・日本文化研修留学生）
	総合日本語コースオリエンテーション（短期留学生）
10月４日(木)	第27期日本語研修コース（文科省配置学生）オリエンテーション
	日本語課外補講オリエンテーション
10月５日(金)	第27期日本語研修コース学内公募選考（試験・面接）
10月９日(火)	第27期日本語研修コース開講式
	第27期日本語研修コース（学内公募受講生）オリエンテーション
10月10日(水)	新規来日留学生（非正規生）のためのオリエンテーション
10月17日(水)	国際交流学生ボランティア説明会

10月29日(月)　平成24年度第３回留学生センター運営委員会
第３回日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ワーキングミーティング
11月12日(月)　平成24年度第４回留学生センター運営委員会
11月14日(水)　留学生と日本人学生との異文化交流パーティー
11月21日(水)　平成 24 年度第５回留学生センター運営委員会
11月30日(金)　見学（日本語研修コース：フィールドトリップ／短期留学生：スタディトリップ）
12月18日(火)　日本語研修コース「私の国」発表会

２０１３年

１月21日(月)　平成24年度第６回留学生センター運営委員会
１月26日(土)　ホームビジット
１月26日(土)～27日(日)　ホームステイ
２月４日(月)　平成24年度第７回留学生センター運営委員会
２月19日(火)　スピーチ発表会（「私の専門」発表会）
３月１日(金)　第27期日本語研修コース修了式

平成 24 年度外国人留学生と地域との交流状況

No.	行　事　名	期　日	主 催 団 体 名	参加人数（留学生）
1	ＷＦＷＰ春のつどい	4 月 7 日（土）	ＷＦＷＰとやま	3
2	第 53 回外国人による日本語弁論大会	6 月 2 日（土）	（財）国際教育振興会	1
3	サロン灯との交流会	7 月14日（土）	二口西部長寿会サロン灯	3
4	東日本大震災復興支援 チャリティディナーショー	7 月15日（日）	東日本大震災復興支援実行委員会とやま	2
5	ゆかた着付け教室	7 月22日（日）	富山市民国際交流協会	17
6	富山まつり　おわら踊りで参加	8 月 4 日（土）	富山市民国際交流協会	8
7	ジャパンテント	8 月23日（木）～ 29日（水）	ジャパンテント開催委員会	5
8	女子留学生日本語弁論富山県大会	9 月29日（土）	ＷＦＷＰとやま	5
9	国際交流フェスタ in 海王丸	10月 6 日（土）	ＮＧＯダイバーシティとやま	8
10	国際交流フレンドリー in 婦翔会	10月14日（日）	富山県婦翔会	10
11	高岡の街を歩こう	10月21日（日）	富山市民国際交流協会	19
12	国際交流フェスティバル （各国のブース担当，踊り，カラオケ）	11月11日（日）	国際交流フェスティバル 2012 実行委員会	65
13	食文化交流会	11月18日（日）	富山雷鳥ライオンズクラブ	20
14	留学生ホームスティ	年末から年始にかけて	富山県婦翔会	9
15	2013 新春国際交流のつどい	1 月20日（日）	富山市民国際交流協会	12
16	異文化交流「見つけた　新しいこと」	2 月22日（金）	富山県立新川みどり野高校	6
17	ボウリング交流会	2 月24日（日）	富山市民国際交流協会	5
18	留学生との交流会「ひな祭り」	3 月 2 日（土）	ＷＦＷＰとやま	5

5．留学生センター教員・担当業務

富山大学留学生センターでは，2012年度において，センター長以下，日本語教育部門４人，留学生指導部門１人の専任教員が，次のような業務を行った。

【留学生センター教員】

センター長	橋爪　和夫（人間発達科学部併任）
副センター長	副島　健治
日本語教育部門	加藤扶久美（日本語・日本事情担当）
	副島　健治（大学院入学前予備教育担当）
	濱田　美和（日本語・日本事情担当）
	後藤　寛樹（大学院入学前予備教育担当）
留学生指導部門	出原　節子

【コースコーディネーター等（2012年度）】

コースコーディネーター

日本語研修コース	後藤　寛樹
日本語課外補講	濱田　美和
日韓共同理工系学部留学生プログラム	副島　健治
総合日本語コース	濱田　美和

短期留学生担当　加藤扶久美
（紀要報告執筆担当，オリエンテーション開催，成績管理等）

教養教育「日本語」「日本事情」担当　加藤扶久美
（紀要報告執筆担当，「日本語A」受講者名簿作成等）

【授業担当（2012年度）】　㊏:日本語研修コース，㊐:日本語課外補講，㊟:総合日本語コース，㊎:教養教育

	前　学　期	後　学　期
加藤扶久美	㊏中級「読解」（月４）,「特別指導」（火４，金４），㊏㊐初級「語彙・表現」（月３），初級「文字・漢字」（水３），㊐初級「生活日本語」（月２），㊎外国語科目「日本語 A1（文系）」（火３），総合科目「日本事情 II」（木２）	㊏中級「読解」（月４），中級「作文」（火３），「特別指導」（火４，金４），㊏㊐初級「聴解」（月３），中級「聴解」（火１），初級「文字・漢字」（水３），㊐初級「生活日本語」（月２）
副島　健治	㊏中級「文法 C」（木４，金３），「特別指導」（火４，金４），㊏㊐中級「会話」（火２），中級「文法 B」（木１，木２），㊎外国語科目「日本語 A1（理系）」（金２）	㊏中級「文法 C」（木４，金３），「特別指導」（火４，金４），㊏㊐中級「会話」（火２），中級「文法 B」（木１，木２），㊎外国語科目「日本語 A2（理系）」（金２）
濱田　美和	㊏中級「コンピュータ」（月３），初級「コンピュータ」（月４），中級「文字・漢字」（水３），「特別指導」（火４，金４），㊏㊐中級「聴解」（火１），初級「聴解」（火３），㊟㊐上級「表現技術１」（月２）	㊏中級「コンピュータ」（月３），初級「コンピュータ」（月４），中級「文字・漢字」（水３），「特別指導」（火４，金４），㊟㊐上級「表現技術２」（月２），㊎外国語科目「日本語 B4」（火１），総合科目「日本事情 I」（火５）

	前　学　期	後　学　期
後藤　寛樹	㊏中級「コンピュータ」(木３),初級「コンピュータ」(木４),「特別指導」(火４，金４)，㊏㊐初級「文法」(火１，火２)，初級「会話」(金３)，㊙外国語科目「日本語 A1（文系)」(金２)	㊏初級「文法」(火１，火２)，中級「コンピュータ」(木３)，初級「コンピュータ」(木４)，「特別指導」(火４，金４)，㊏㊐初級「会話」(金３)，㊙外国語科目「日本語 A2（文系)」(金２)
出原　節子	㊏「日本事情」(水４，水５)，㊙外国語科目「日本語 A1（理系)」(火３)	㊏「日本事情」(水４，水５)，㊙教総合科目「日本事情Ⅲ」(木５)
	※相談業務のオフィスアワーについては，「留学生指導部門」の報告（p.61）を参照	

【学内委員等（2012年度)】

国際戦略本部会議	橋爪　和夫
国際戦略本部教育部会	橋爪　和夫，副島　健治
富山大学留学生奨学金等選考委員会	副島　健治
留学生奨学金等選考委員会五福キャンパス部会	副島　健治
五福キャンパス教養教育実施専門委員会	加藤扶久美
五福キャンパス教養教育FD専門委員会	濱田　美和
センター専任教員評価方法検討委員会	橋爪　和夫
日本語・日本文化研修留学生プログラム検討ＷＧ	濱田　美和
日韓共同理工系学部留学生事業受入れ方法検討ＷＧ	副島　健治，加藤扶久美
環境推進員	出原　節子
安全衛生管理者	副島　健治

【その他業務分担（2012年度)】

留学生センター紀要	副島　健治
留学生センター概要	濱田　美和
留学生センターニュース	出原　節子，加藤扶久美
日本語研修コース報告書『らいちょう』	後藤　寛樹
留学生センターホームページ	後藤　寛樹

資　料

資料１　富山大学における年度別留学生数の推移

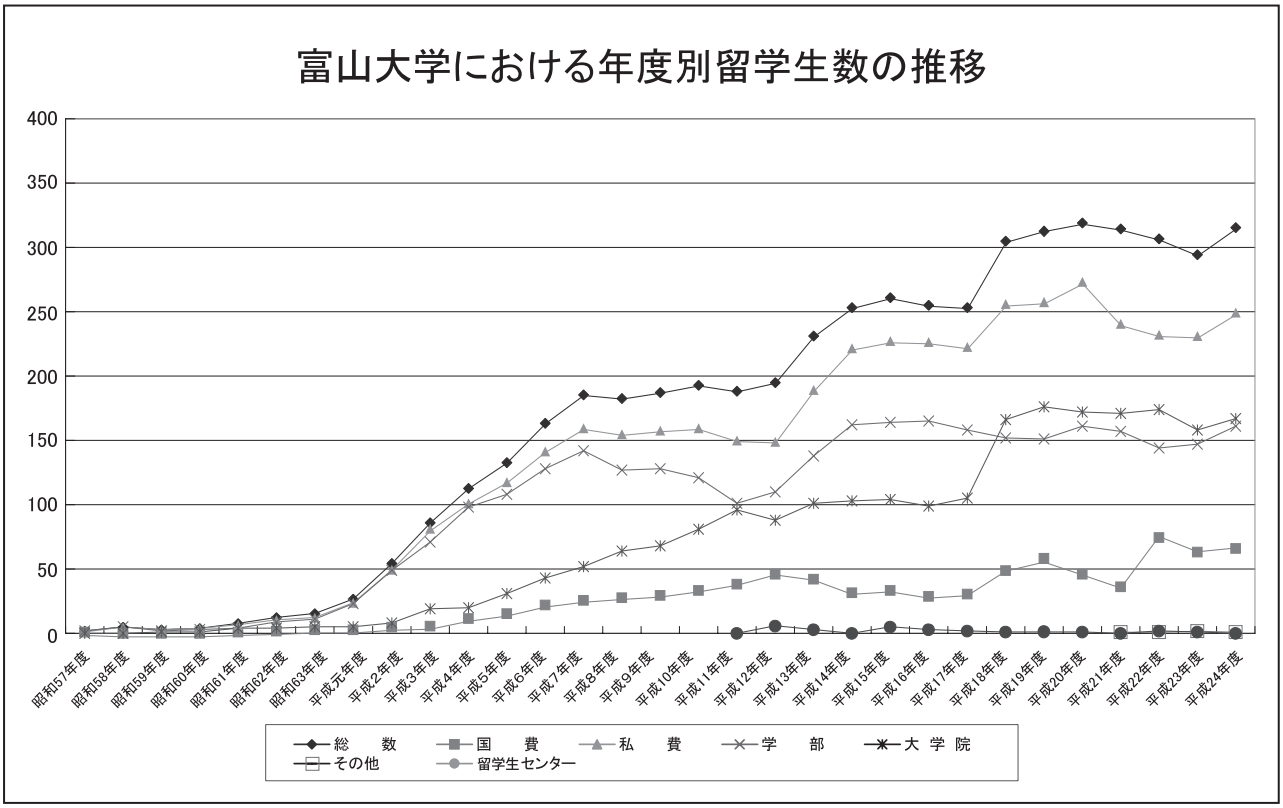
資料２　富山大学在籍外国人留学生数

資料３　富山大学留学生センター規則

資料４　富山大学留学生センター紀要投稿要項

資料 1

●年度別留学生数の推移　Change by Year
（Number of International Students）



●外国人留学生受入状況　Number of International Students

平成24年５月１日現在　As of May 1, 2012　（人）

	昭和57年度	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
総　数	2	5	3	4	8	13	16	28	57	90	118	139	171	194	191	196	202	197	204	242	265	273	267	265	319	328	334	329	321	308	330
国　費	1	0	0	0	1	2	3	3	5	6	12	16	23	27	29	31	35	40	48	44	33	35	30	32	51	58	48	38	78	66	69
私　費	1	5	3	4	7	11	13	25	52	84	106	123	148	167	162	165	167	157	156	198	232	238	237	233	268	270	286	252	243	242	261
学　部	2	5	2	3	4	9	11	23	49	71	98	108	128	142	127	128	121	101	110	138	162	164	165	158	152	151	161	157	144	147	161
大学院	0	0	1	1	4	4	5	5	8	19	20	31	43	52	64	68	81	96	88	101	103	104	99	105	166	176	172	171	174	158	167
その他																												1	1	2	2
留学生センター																		0	6	3	0	5	3	2	1	1	1	0	2	1	0

※富山大学，富山医科薬科大学，高岡短期大学は，平成17年10月１日統合により富山大学となりました。
　昭和57年度から平成17年度は旧富山大学のデータです。
　外国政府派遣と県費は「国費」に含めました。

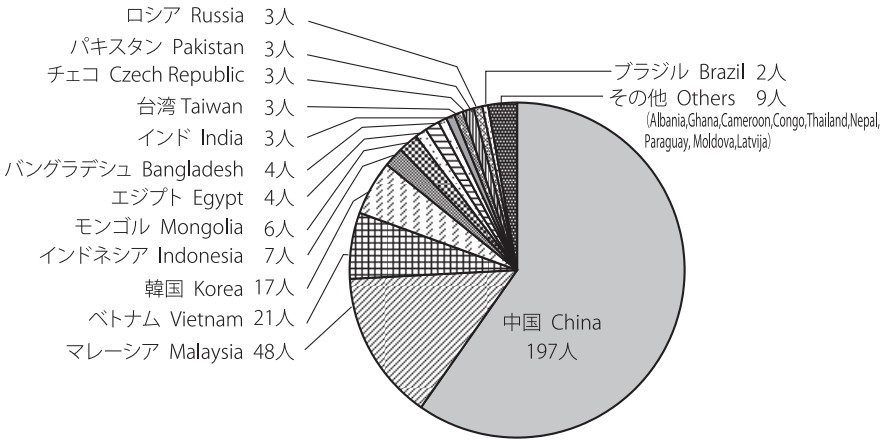
資料 2

外国人留学生受入状況　Number of International Students

平成 24 年 5 月 1 日現在　　As of May 1, 2012

学部等		正規生							研究生・科目等履修生等							合計
		国費		外国政府		私費		小計	国費		県費		私費		小計	計
		男	女	男	女	男	女		男	女	男	女	男	女		
人文学部						9	8	17		1			3	3	7	24
人間発達科学部							2	2	2	1	3			3	9	11
経済学部					1	6	5	12					10	9	19	31
理学部		1				1		2							0	2
医学部								0					1		1	1
薬学部		1						1							0	1
工学部		1		32	10	21	14	78					2	1	3	81
芸術文化学部						1	5	6					2	2	4	10
小計		3	0	32	11	38	34	118	2	2	3	0	18	18	43	161
人文科学研究科							4	4						2	2	6
教育学研究科								0							0	0
人間発達科学研究科							2	2						1	1	3
経済学研究科		1				16	18	35							0	35
生命融合科学教育部	博士(薬・理・工)	2				4		6							0	6
	博士(医)	2	1			8	4	15							0	15
医学薬学教育部	修士	1				4	5	10						1	1	11
	博医		1			4	8	13							0	13
	博薬	2	2			8	3	15							0	15
医学系研究科	博士							0							0	0
薬学研究科	博後							0							0	0
理工学教育部	修士					24	5	29							0	29
	博士	3		1		24	3	31					1	1	2	33
理工学研究科	博士							0					1		1	1
小計		11	4	1	0	92	52	160	0	0	0	0	2	5	7	167
芸術文化学研究科						1	1	2							0	2
留学生センター								0							0	0
和漢医薬学総合研究所															0	0
合計		14	4	33	11	131	87	280	2	2	3	0	20	23	50	330

五福キャンパス	262
杉谷キャンパス	56
高岡キャンパス	12
合計	330



資料３

富山大学留学生センター規則

平成 17 年 10 月　１日制定
平成 18 年　４月　１日改正
平成 19 年 11 月 15 日改正
平成 20 年　４月　１日改正
平成 21 年　４月　１日改正
平成 23 年　４月 25 日改正
平成 24 年　１月 11 日改正

（趣旨）

第１条　この規則は，国立大学法人富山大学学則第 12 条第２項の規定に基づき，富山大学留学生センター（以下「センター」という。）に関し，必要な事項を定める。

（目的）

第２条　センターは，外国人留学生及び海外留学を希望する富山大学（以下「本学」という。）の学生に対し，必要な教育及び指導助言等を行うことにより，本学における国際交流の推進に寄与することを目的とする。

（業務）

第３条　センターは，次に掲げる業務を行う。

（１）　外国人留学生に対する日本語・日本事情教育
（２）　外国人留学生に係る入学前における予備教育（以下「予備教育」という。）
（３）　外国人留学生に対する修学上及び生活上の指導助言
（４）　海外留学を希望する学生に対する修学上及び生活上の指導助言
（５）　留学生教育に関する調査及び研究
（６）　その他センターの目的達成に必要な事項

（職員）

第４条　センターに，次に掲げる職員を置く。

（１）　センター長
（２）　副センター長
（３）　専任の教員
（４）　その他必要な職員

（センター長）

第５条　センター長は，センターの業務を掌理する。

２　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。

３　センター長の選考については，別に定める。

（副センター長）

第６条　副センター長は，センター長を補佐し，センター業務を整理する。

２　副センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，センター長の任期の範囲内とする。

３　副センター長に欠員が生じた場合，後任の副センター長の任期は，前任者の残任期間とする。

４　副センター長の選考については，センターの専任の教員のうちから第８条に定める運営委員会の議に基づき，学長が行う。

（専任の教員）

第７条　専任の教員は，センターの業務に従事する。

２　専任の教員の選考については，別に定める。

（運営委員会）

第８条　センターに，センターの管理運営に関する重要事項を審議するため，富山大学留学生センター運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

（運営委員会の審議事項）

第９条　運営委員会は，次の各号に掲げる事項を審議する。

（１）　管理運営の基本方針に関すること。

（２）　事業の計画及び実施に関すること。

（３）　センター長，副センター長及び専任の教員の人事に関すること。

（４）　予算概算の方針に関すること。

（５）　その他センターに関し必要な事項

（運営委員会の組織）

第 10 条　運営委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（１）　センター長

（２）　学長が指名した副学長

（３）　センターの専任の教員

（４）　学部（理学部，医学部，薬学部及び工学部を除く。）及び研究部の各系から選出された教授　各１人

（５）　学務部長

２　前項第４号の委員の任期は，２年とし，再任を妨げない。ただし，欠員が生じた場合の後任の委員の任期は，前任者の残任期間とする。

３　第１項第３号の委員のうち教授を除く専任の教員は，前条第３号の事項のうち専任の教員の人事に関する事項の審議には加わらない。

４　第１項第５号の委員は，前条第３号の事項の審議には加わらない。

（委員長）

第 11 条　運営委員会に委員長を置き，センター長をもって充てる。

２　委員長は，運営委員会を招集し，その議長となる。

３　委員長に事故があるときは，あらかじめ委員長が指名する委員が，その職務を代行する。

（運営委員会の議事）

第 12 条　運営委員会は，構成員の半数以上が出席しなければ開会できない。議事は，出席者の過半数をもって決する。ただし，可否同数のときは，議長がこれを決する。

２　前項の規定にかかわらず，第９条第３号の事項を審議する会議は，構成員の３分の２以上が出席しなければ開会できない。議事は，出席者の３分の２以上をもって決する。

（意見の聴取）

第 13 条　運営委員会が必要と認めたときは,委員以外の者の出席を求めて意見を聴くことがで

きる。

（専門委員会）

第14条　運営委員会に，専門的事項を担当するため，必要に応じて専門委員会を置くことができる。

２　専門委員会に関し必要な事項は，運営委員会の議を経て，センター長が別に定める。

（日本語研修コース）

第15条　センターに，予備教育を行うため，日本語研修コースを置く。

２　日本語研修コースに関し必要な事項は，別に定める。

（雑則）

第16条　この規則に定めるもののほか，センターの運営に関し必要な事項は，運営委員会の議を経て，センター長が定める。

（事務）

第17条　センターの事務は，学務部学生支援グループにおいて処理する。

附　則

１　この規則は，平成17年10月１日から施行する。

２　この規則の施行後，最初に任命される副センター長は，この規則の施行日の前日において富山大学留学生センター副センター長であった者をこの規則により選考されたものとみなし，任期は第６条第２項の規定にかかわらず，平成19年３月31日までとする。

３　この規則の施行後，最初に選出される第 10 条第１項第４号に規定する委員の任期は，第10条第２項の規定にかかわらず，平成19年３月31日までとする。

附　則

１　この規則は，平成18年４月１日から施行する。

２　この規則施行日の前日において，理学部，医学部，薬学部及び工学部から選出された者については，第10条第１項第４号の研究部の各系から選出された者とみなす。ただし，任期は同条第２項の規定に関わらず，平成19年３月31日までとする。

附　則

この規則は，平成20年４月１日から施行する。

附　則

この規則は，平成21年４月１日から施行する。

附　則

この規則は，平成23年４月25日から施行し，平成23年４月１日から適用する。

附　則

この規則は，平成24年１月11日から施行する。

資料 4

富山大学留学生センター紀要投稿要項

1　目的

富山大学留学生センター（以下「センター」という。）は，日本語・日本事情教育，異文化教育，留学生教育，国際交流等にかかる理論的・実践的研究に関する論文，研究資料等を発表するため，富山大学留学生センター紀要（以下「センター紀要」という。）を発行する。

2　執筆者の資格

(1)　センターの専任教員及び非常勤講師，　各学部の留学生専門教育教官とする。

(2)　編集委員会が特に認めた者

3　原稿の内容

(1)　投稿原稿は，未発表のものとする。

(2)　原稿の種目は，論文，研究ノート（特定の主題に対する研究上及び教育上の提言，史・資料の紹介及び考察，　又は萌芽的研究を記したものを指す。），　研究資料（実践記録・調査結果，既成の知見の確認等研究上報告する価値のあるものを指す。），実践・調査報告，書評のいずれかとする。

4　原稿の長さ

原稿の長さは，１篇につき，図・表・写真等を含め，原則として刷り上がり 20 ページ以内とする。

5　原稿の体裁

富山大学留学生センター紀要執筆要領（以下「執筆要領」という。）に従って，記述する。

6　編集委員会

センター紀要編集のため，センター長を委員長とした編集委員会を置く。

7　投稿手続き

(1)　投稿カードに所定の事項を記入のうえ，原稿とともにセンター長に提出し，原稿受領書を受け取る。

(2)　提出された年月日をもって，受付年月日とする。

(3)　原稿提出締切日は，別途定める。

8　原稿の採否

論文等の採否は，本要項及び執筆要領に基づいて，編集委員会が決定する。

9　発行回数

原則として，　年１回とする。

10　その他

別刷希望者は，実費負担とする。

付記

本要項の実施は，センター紀要第１号の執筆時から適用する。

執筆者一覧

出原　節子　　富山大学留学生センター教授※

加藤扶久美　　富山大学留学生センター教授

後藤　寛樹　　富山大学留学生センター准教授※

副島　健治　　富山大学留学生センター教授

高畠　智美　　富山大学留学生センター非常勤講師

濱田　美和　　富山大学留学生センター准教授

※2013年3月時点におけるもの

富山大学留学生センター紀要　第12号

発行年月 / 2013年9月

編集・発行 / 国立大学法人 富山大学留学生センター

〒930-8555　富山市五福3190

印刷所 / ㈱なかたに印刷

Journal of International Student Center University of Toyama

Vol.12

September 2013

Contents

Ⅰ Research Papers

HAMADA Miwa, TAKABATAKE Tomomi;
Development of Teaching Materials for Kanji Learning: Exploration of a Method for Performing Learning Activities Smoothly between Japanese Language Learners ····· 1

SOEJIMA Kenji;
A Textbook for Japanese Language Education in the "Northern Territories" ····· 9

Ⅱ Annual Reports (April 2012 – March 2013)

1. Outline of ISC from April 2012 to March 2013 ····· 17
2. Japanese Language Education Division
   - Intensive Japanese Program ····· 18
   - Extra-curricular Japanese Language Program ····· 27
   - General Japanese Language Course ····· 45
   - Program for Exchange Students ····· 48
   - Japan-Korea Cooperative Program for Science and Engineering Students ····· 51
   - Japanese Language and Culture as General Education Program ····· 53
   - Report 1 Japanese Language Consultation ····· 57
   - Report 2 Japanese Learning Support Site RAICHO ····· 59
3. Advisory Division ····· 61
4. Schedules ····· 66
5. List of Staff and the Responsibility of ISC ····· 69
6. Data ····· 71

International Student Center University of Toyama
3190 Gofuku, Toyama 930-8555 Japan

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。